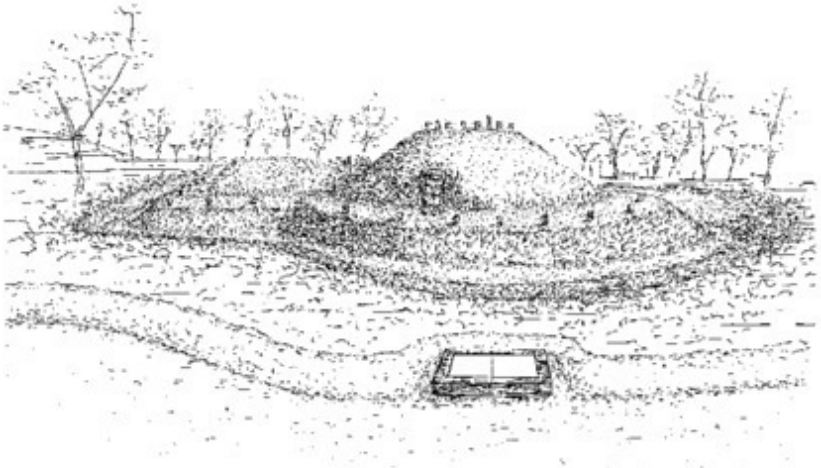
大室公園史跡整備事業に伴う範囲確認調査概報 Ⅳ

小二子古墳

前橋市教育委員会

大室公園史跡整備事業に伴う範囲確認調査概報 Ⅳ

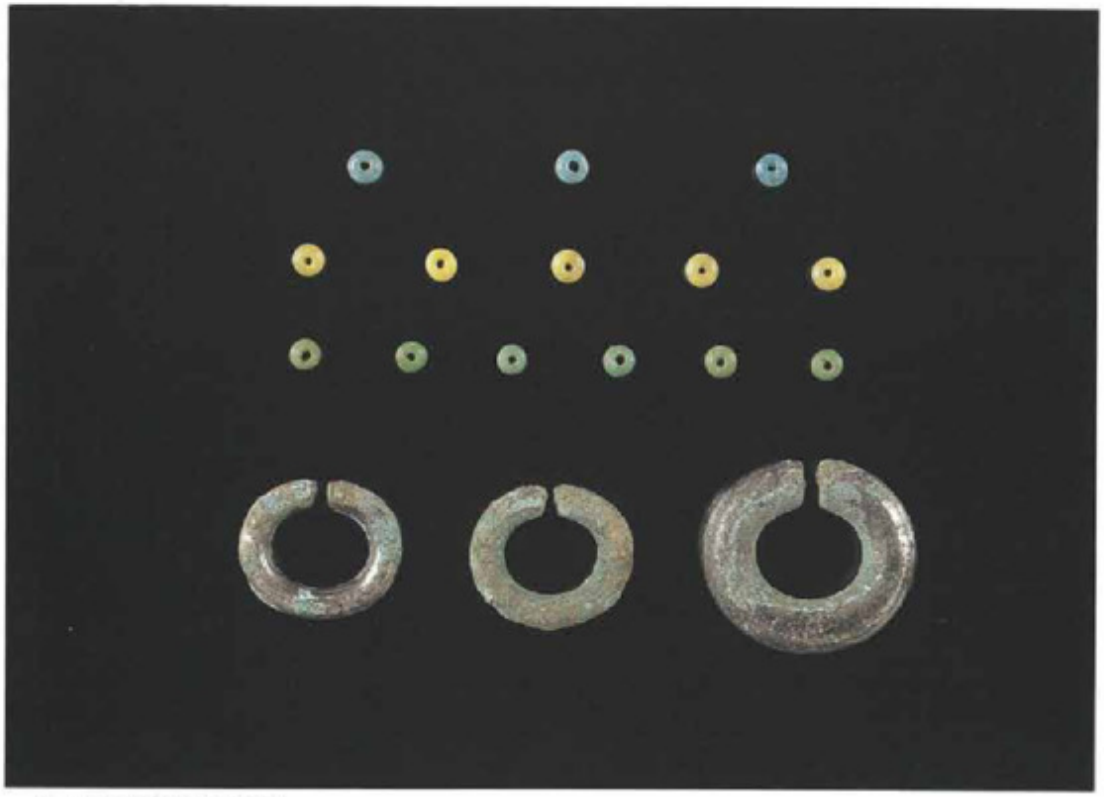
小二子古墳



小二子古墳　整備イメージスケッチ

前橋市教育委員会

1　小二子古墳石室調査区全景（南上空から）



2　小二子古墳の装身具

3　小二子古墳の形象埴輪と円筒埴輪

序

大室公園が赤城山を背景にしだいに具体的な姿をあらわしています。休日には、親子連れや子供たち、史跡めぐりの人たちが三々五々公園内を散歩しています。公園の南側は史跡ゾーンとして古墳の森が古代の雰囲気を秘めどっしりと位置づいています。

そんな史跡ゾーンの中で史跡整備は、着々と進められています。前・中・後二子の三古墳も整備に先立ち、整備資料をえるための発掘調査が行われました。その一環として小二子古墳の発掘調査も去年に引き続き実施しました。

地山を削り古墳の一段目のテラスを築き、周堀の土で二段目を構築する古代人の合理的な工法や、テラスに円筒埴輪をめぐらせ、鞍部や後円部に形象埴輪をならべて古墳を飾り、当時の人々に古墳をより意識させる工法等は、これからの整備を行って行くうえで重要なポイントになりました。

石室は、後世に石を取る目的でこわされていましたが、幸い床面の一部や石室の石を置いた痕跡や雨水の侵入を防いだ粘土層が調査され、石室を図面上で復原することは可能となりました。中でも羨道をふさいだ閉塞は美しいほどに整然と石が積まれており、古墳整備の重要なポイントとなってきました。今回の調査で小二子古墳の整備に先立つ発掘調査は一応完了の運びとなり、調査で得られた資料をもとに、小二子古墳の整備に入ります。

・周堀、テラス、前方後円墳の墳丘等、古墳の全体像をどう復原するか。

・形象埴輪や円筒埴輪列をどこまで復原し、古墳築造当時の位置にすえつけるか。

・石室、特に閉塞された部分をどう見せるか。

等々、整備にあたり課題はありますが、前・中・後二子の三古墳の整備とあわせて考えて行くつもりです。

公園を訪れた人たちが「上毛野の古代社会」へとタイムスリップする、そんな史跡ゾーンの中の一つに小二子古墳を位置づけたいと考えております。

平成3年に着手された同指定史跡の調査も、6年目を迎えました。今回の小二子古墳の調査で完了の運びとなりました。多大な成果をあげ無事に調査が完了したことは、一重に関係各位、諸機関の皆様方の暖かい援助の賜物といえます。ここに、感謝を込めまして厚く御礼申しあげます。

平成9年2月28日

前橋市教育委員会

教育長　岡本信正

例　　言

1　本書は、前橋市・前橋市教育委員会が計画している大室公園史跡整備事業に伴う国指定史跡小二子古墳指定名称「並びに附小古墳」の発掘調査報告書である。

調査は、平成2年度に策定した『大室公園史跡整備基本構想』に基づいて実施した。

2　小二子古墳は群馬県前橋市西大室町2142番地に所在する。

3　調査は、大室公園史跡整備委員会の指導のもとで前橋市教育委員会が実施した。

調査担当および調査期間は以下の通りである。

平成7年度

調査・整理担当者	前原　豊・新井真典
現地調査期間	平成7年7月21日～平成7年10月31日
遺物整理期間	平成7年11月20日～平成8年1月31日

平成8年度

調査・整理担当者	前原　豊・宮内　毅
現地調査期間	平成8年6月3日～平成8年12月9日
整理・報告書作成期間	平成8年12月16日～平成9年1月15日

4　本書の編集は前原・宮内が行った。原稿執筆は、Ⅱ章、Ⅲ章2、Ⅴ章2・3、　Ⅵ章hを宮内、Ⅴ章5とⅥ章g・kを永井智教（上武大学商学部学生）、それ以外は前原があたった。

5　調査に関して、大室公園史跡整備委員会の白石太一郎副委員長・梅沢重昭委員・松島栄治部会長・井上唯雄幹事・松本浩一幹事・水田　稔幹事・津金沢吉茂幹事・右島和夫幹事にご指導をいただいた。

6　須恵器の生産地について大江正行氏（財群馬県埋蔵文化財調査事業団）、鉄器について杉山秀宏氏（太田女子高校）、土師器について坂口　一氏（財群馬県埋蔵文化財調査事業団）にご教示をいただいた。また、発掘の調査に関しては、田中　裕氏（千葉県埋蔵文化財センター）にご協力をいただいた。

7　発掘調査で出土した遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課収蔵庫に保管されている。

凡　　例

1　挿図中に使用した北は座標北である。

2　挿図に、建設省国土地理院発行の1／20万地形図（宇都宮）と1／5万地形図（前橋）を使用した。

3　遺跡コードは、平成7年度が7E11・M－11（小二子古墳）、平成8年度が8E11・M－11である。

4　墳丘長は、下段斜面下端からもう一方の下段斜面下端までを計測した。

また、従来の「基壇」を「下段平坦面」と変更した。それは、「基壇」の用語概念を整理しきっていないためである。

目　　次

序

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の立地 …… 3

2　歴史的環境 …… 3

Ⅲ　調査の経過

1　調査方針 …… 6

2　調査経過 …… 8

Ⅳ　層　　序 …… 12

Ⅴ　遺構と遺物

1　墳丘・周堀 …… 14

2　埴輪列 …… 19

3　石室前面部 …… 21

4　石　　室 …… 23

5　出土遺物 …… 27

Ⅵ　成果と問題点 …… 42

巻頭カラー

口絵1　小二子古墳石室調査区全景（南上空から）

口絵2　小二子古墳の鉄器・副葬品

口絵3　小二子古墳の形象埴輪と円筒埴輪

図　版

PL. 1　4・7号古墳と小二子古墳全景
2　墳丘と石室調査のようす
3　石室の閉塞状況
4　石室全景と内面からみた石積みによる閉塞
5　石室裏込めの状態
6　石室裏込めと玉石、列石の状況
7　周堀と遺物出土状態
8　円筒埴輪の出土状態と復原
PL. 9　形象埴輪の出土状態、記念撮影
10　平成7年度のトレンチ調査
11　平成7年度のトレンチ調査
12　平成7年度のトレンチ調査
13　円筒埴輪
14　円筒埴輪と形象埴輪
15　形象埴輪・鉄滓・装身具
16　土師器・須恵器

挿　図

頁

Fig. 1　大室公園の位置……1
2　大室公園の周辺図……2
3　大室公園と大室古墳群……4・5
4　小二子古墳現況測量図……7
5　発掘調査経過図……8
6　平成3・7年度調査区域図……9
7　平成8年度調査区域図……10
8　小二子古墳測量区……11
9　小二子古墳標準土層図……13
10　小二子古墳墳頂部断面図……16
11　小二子古墳全区……17・18
12　埴輪列実測図（1）……20
13　埴輪列・埋設土器実測図（2）……22
14　小二子古墳石室実測図……24
15　出土遺物分布図……28
Fig. 16　円筒埴輪実測図（1）……30
17　円筒・形象埴輪実測図（2）……32
18　形象埴輪実測図（3）……33
19　形象埴輪実測図（4）……34
20　形象埴輪実測図（5）……35
21　形象埴輪実測図（6）……36
22　形象埴輪実測図（7）……37
23　土器実測図（8）……39
24　鉄滓・副葬品実測図（9）……40
25　墳丘復原図……42
26　石室復原図……42
27　小二子古墳に類似する古墳……44
28　石室前面部出土の土器……46
29　円筒埴輪線刻分類図……48

付　図

小二子古墳石室実測図

表

頁

Tab. 1　調査区別面積一覧表……14
2　小二子古墳計測表……15
3　円筒埴輪の推定本数……19
4　形象埴輪の種類と本数……21
5　小二子古墳石室計測表……25
Tab. 6　調査区の出土遺物量表……27
7　円筒埴輪観察表……50
8　形象埴輪観察表……51
9　土器観察表……52
10　裏金要項……53

Ⅰ　調査に至る経緯

前橋市では『第四次前橋市総合計画』の中で国指定史跡前二子古墳・中二子古墳・後二子古墳・小二子古墳が存在する市東部の大室地区を「大規模公園の整備地区」として位置づけ、36.9ヘクタールの総合公園の建設を計画した。公園建設にあたっては、公園計画地内に貴重な史跡が存在するため、長期的展望に立った公園内の史跡整備計画が不可欠となり、文化庁・群馬県教育委員会の指導のもとに平成元年度より大室公園史跡整備委員会を設け、専門家・学識経験者等の協力

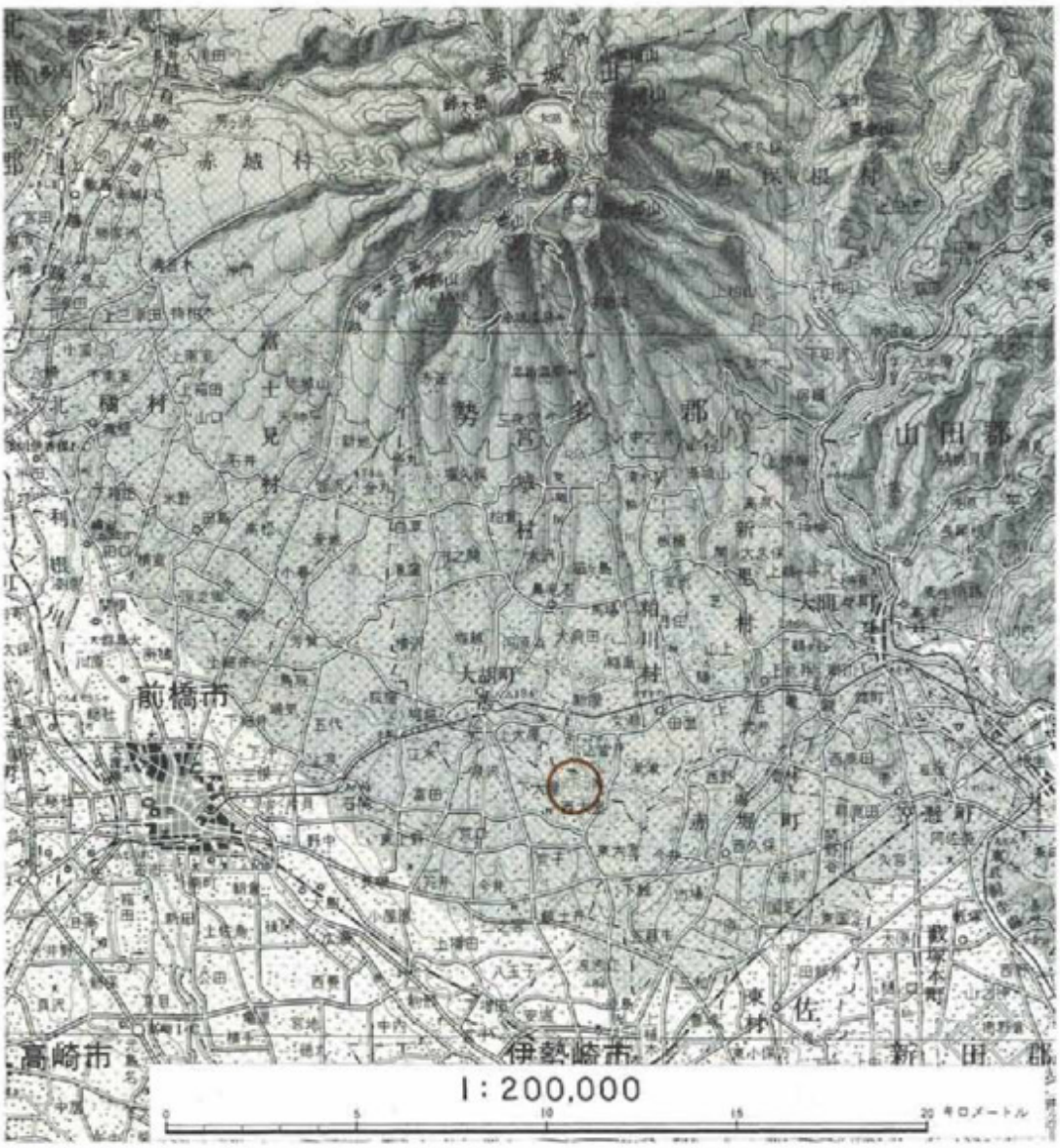


Fig.1　大室公園の位置

を得て、検討を重ね、平成２年度に『大室公園史跡整備基本構想』を策定した。

本調査は、この史跡整備基本構想に基づき実施したものである。古墳の調査は、平成３年度に後二子古墳、平成４年度に前二子古墳、平成５・６年度に中二子古墳の範囲確認調査を行った。平成７・８年度の継続事業として「国指定史跡後二子古墳並びに附小古墳」のうちの附小古墳の発掘調査を行い、史跡の保護・活用・研究面の資料収集を行い、史跡整備の基礎資料を得ることを目的とした。

なお、指定名称は「附小古墳」であるが、『上毛古墳綜覧』に記載された「小二子古墳」の名称を、史跡整備委員会で承認を受け、採用した。

小二子古墳の整備は、前・中・後二子古墳の整備手法と大きく異なり、全面的な復原を計画しているため、平成７・８年の２カ年にわたって、ほぼ古墳全域の調査を実施した。

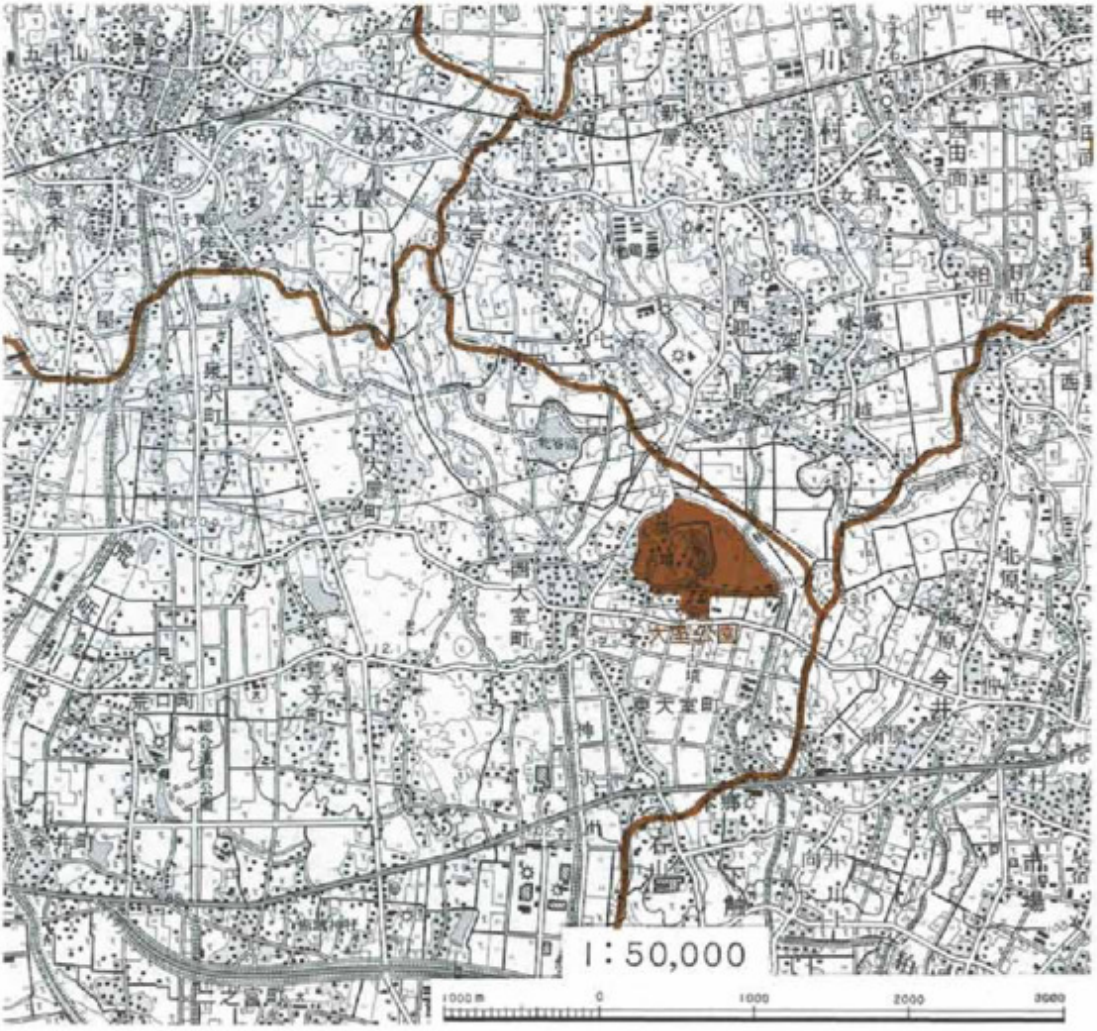


Fig. 2　大室公園の周辺図

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の立地

小二子古墳の所在する前橋市西大室町は、前橋市の市街地から東へ約15kmの所に位置する。この古墳をはじめとする大室古墳群は、国道50号の東大室十字路より北へ2kmで、県道前橋・今井線と県道伊勢崎・深津線の交差点から北東1kmに位置している。また、ＪＲ両毛線伊勢崎駅から古墳へは北へ約7kmあり、上毛電鉄粕川駅からは南南西へ約3kmある。東側は多田山と呼ばれる火山泥流による丘陵があり、赤堀町との境となっている。また、北に接する粕川村とは、「七ツ石」とよばれ信仰の対象となっている巨石のある丘陵とそれに連なる丘陵を行政上の境界としている。

小二子古墳の西側にある小山は自然丘陵で、石切り場の痕跡を残している。また、小二子古墳の南側も丘陵地形となっている。小二子古墳の北東側には五料山とよばれる自然丘陵があり、上縄引遺跡のある西側も台地となっている。この地区の丘陵地形の基盤は、すべて赤城山体崩壊により引き起こされた「梨木泥流」によって形成された「流れ山」で、粗粒輝石安山岩が露出しているものに、七ツ石や石山観音、産泰神社裏の巨石などが挙げられる。小二子古墳と北側の下縄引遺跡との間には狭い谷頭が入り、湧水点となっている。また、近世になってから谷地の南側に堤をつくり、堰止めてできたものが五料沼である。小二子古墳の南東には、ほぼ主軸を同じにし前二子古墳、中二子古墳、後二子古墳の大型前方後円墳が並行して造られている。

2　歴史的環境

国指定史跡前二子古墳、中二子古墳、後二子古墳ならびに小二子古墳をはじめとした周知の遺跡が存在する荒砥地区は、自然に恵まれた風光明媚な所であるとともに、考古学上重要な地域でもある。そこで、小二子古墳周辺の歴史的環境をみてみたい。

まず、大室公園内の内堀遺跡や荒砥川流域の洪積台地先端部を中心に荒砥北三木堂遺跡、また宮川の沖積地に臨む柳久保遺跡群においてナイフ形石器、細石刃等が検出され、神沢川の東部にあたる横俣遺跡群では「流れ山」の頂上部からAT下位のナイフ形石器が出土している。続く縄文時代には、草創期の遺跡として爪形文土器が検出された下触牛伏遺跡がある。二本松遺跡や柳久保遺跡群からは、早期の良好な資料が出土している。前期の遺跡は、横俣遺跡群、荒砥二之堰遺跡、荒砥上ノ坊遺跡、荒砥上諏訪遺跡など検出例は多い。中期後半の遺跡も多く確認されているが、いずれも5～10軒の中・小規模の集落にとどまっており、赤城村三原出遺跡、赤堀町曲沢遺跡のような大規模集落の存在は知られていない。弥生時代の遺跡は、水田耕作に適した沖積地

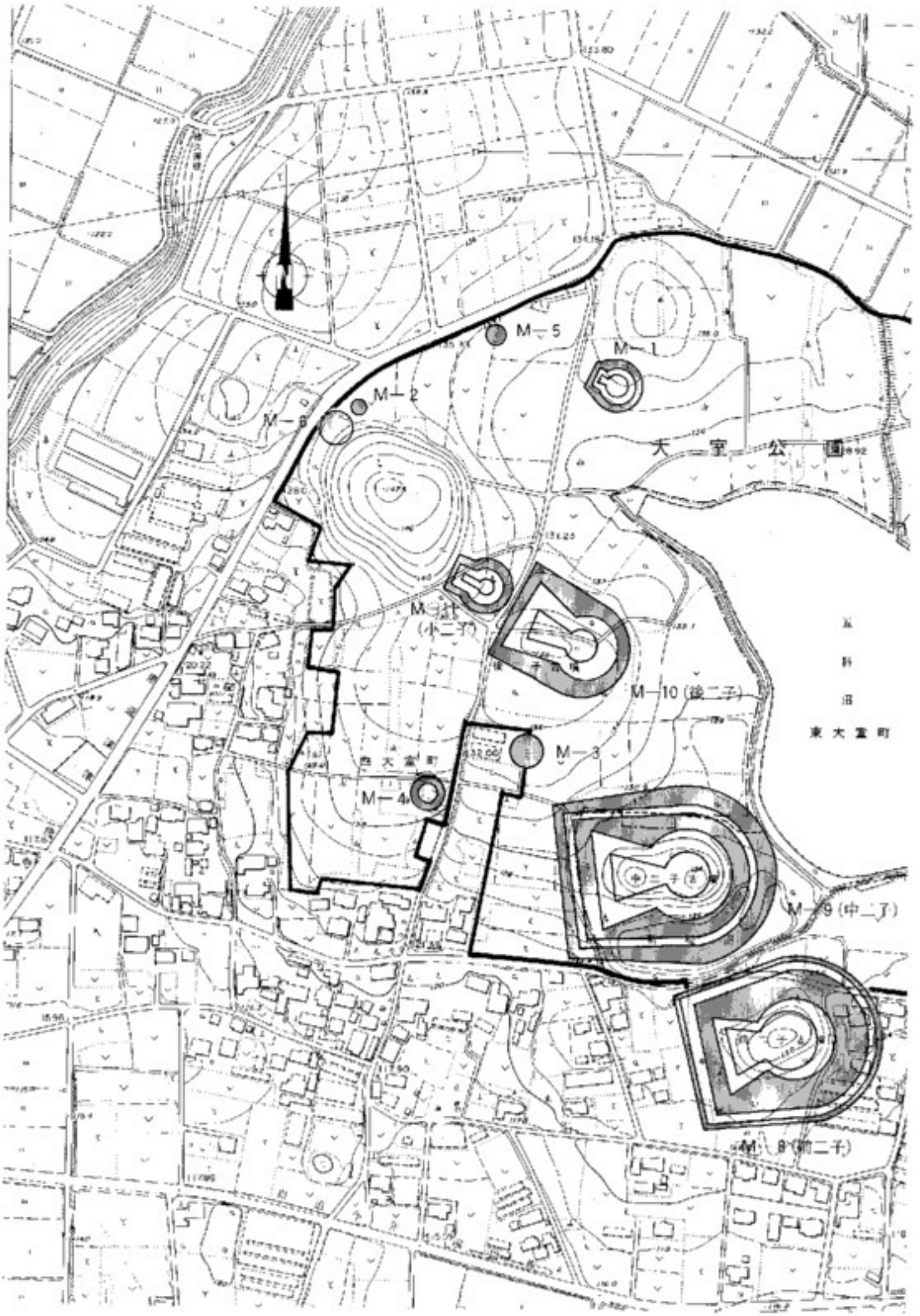
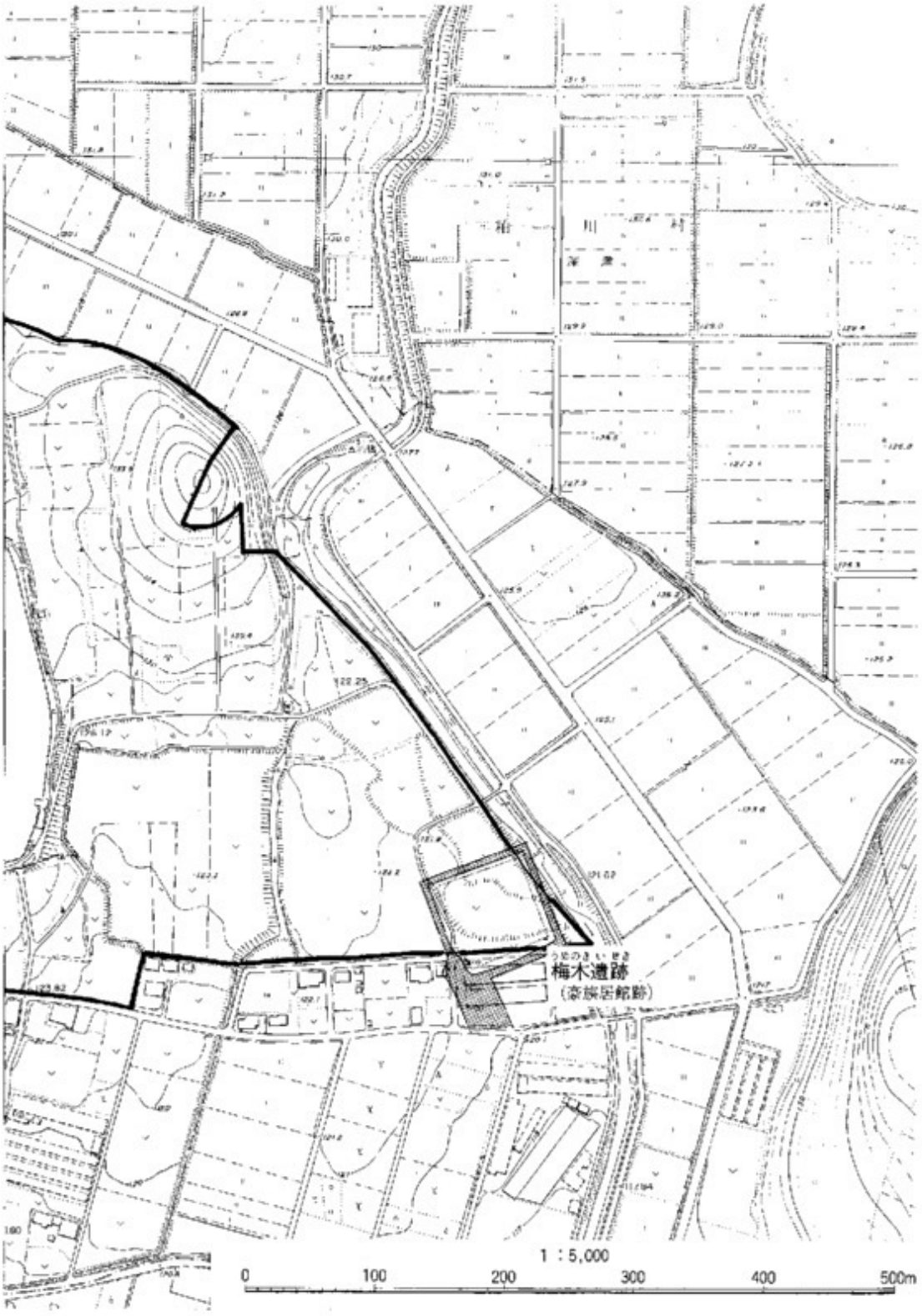


Fig. 3　大室公園と大室古墳群


うめのきいせき
梅木遺跡
(豪族居館跡)
1：5,000
0
100
200
300
400
500m

を臨む台地や微高地に立地しており、中期後半から後期の小規模集落が荒砥島原遺跡、荒砥上川久保遺跡、西原遺跡、西迎遺跡などで見られる。

古墳時代前期の遺跡としては、上縄引遺跡をはじめ、下縄引遺跡、北山遺跡、七ツ石遺跡、久保皆戸遺跡、梅木遺跡などがある。5世紀後半から6世紀代に入ると、強大な支配者の存在を暗示するように今井神社古墳、伊勢山古墳、前二子古墳、中二子古墳、後二子古墳、荒砥村120号墳、小二子古墳などの前方後円墳が築造され、また、付近には、口縁部に犬が付く円筒埴輪が出土した上縄引4号墳、円筒埴輪の口縁部に貼付けられたと思われる人物・猪・小鳥の上裂小像が出土した舞台1号墳、家形埴輪群を出土した赤堀茶臼山古墳など全国的にも著名な古墳も存在する。梅木遺跡で検出された首長層の居宅はこれらの古墳と何らかの関係があると推定される。このほかに居館址として、荒砥荒子遺跡、丸山遺跡などがある。6世紀後半から7世紀代に入ると小円墳の群集化が進み、1～3基程度の散在する小円墳も出現するようになり、支配階層の多層化と系列化が進んだことを意味している。

Ⅲ 調査の経過

1 調査方針

小二子古墳の整備は、すでに発掘調査を実施してきた前・中・後二子古墳とは大きく異なり、全面的な復原をすることが、基本構想で策定されている。したがって、今回の調査は、墳丘・石室・周堀の調査を行い、具体的な整備方向を決定する資料収集を目的としている。

平成3年度に後二子古墳の調査に併せて、小二子古墳のトレンチ調査を一部行っていた。今回の調査は、平成3年度の調査成果を踏まえながら、より整備に向けた具体的な資料収集の目的で行ったが、調査区、調査方法については平成3年度の手法に準拠している。詳細については、「後二子古墳・小二子古墳」の報告を参照していただきたい。

平成3年度に設置した2本の耐久性のあるコンクリート埋設杭をもとに、再度グリッド杭と水準杭の復原を行った。ちなみに、既設の2本の杭は、前方部からやや離れて西にあるサ－0－2.0m（X＝－43069.983m・Y＝－57113.222）と後円墳頂部に存在するサ－9＋2.0m（X＝－43057.524m・Y＝－57079.418、H＝138.052m）である。グリッドは、4m四方を基準とし、呼称は北西交点を用いる。北から南へ50音（ア～タ）、西から東へ算用数字（1～15）で表している。なお、グリッドの南北ラインは20°16′01″東に振れている。

今回、石室の調査では1m四方のグリッドを使用した。詳細については、Fig.6・7を参照していただきたい。北から南へ算用数字（－3～10）、西から東へアルファベット（A～F）を使用し、墳丘グリッドと同様に呼称は北西交点を使用した。なお、石室Dラインは、墳丘グリッ

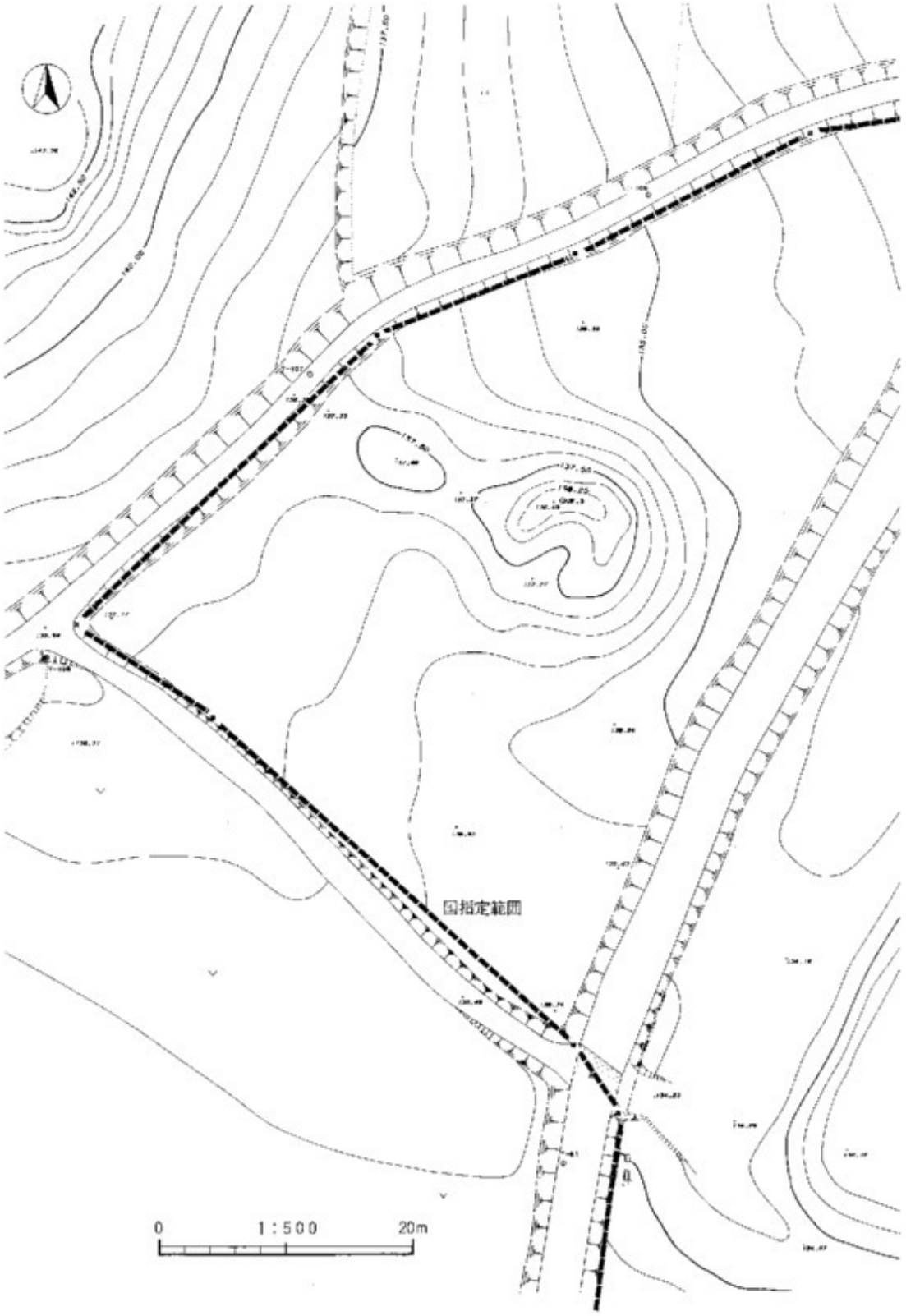
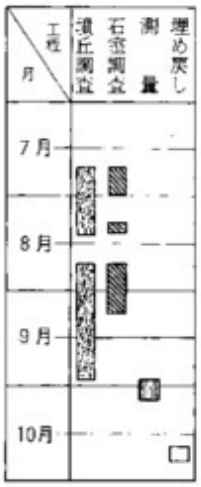


Fig.4　小二子古墳現況測量図

ドのサ－９からス－８を結んだ線と一致させた。また、墳丘ス－８は石室Ｄ－10も兼ねさせた。なお、石室グリッドの南北ラインは46°49′55″東に振れている。

平成７年度の発掘調査では、墳形、石室の状態を把握する目的でトレンチ調査を主眼に置きながら進めた。墳丘の保護の観点から調査範囲を最小限に抑えるため、北側半分に主力を注いだ。南北・東西の離れたトレンチを区別するために原則として北ないし西をＡとし、東ないし南についてＢとした。

平成７年度



平成８年度

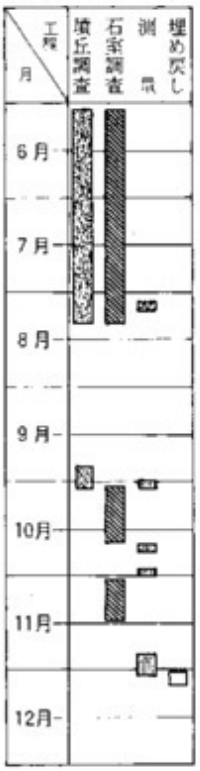


Fig.5　発掘調査経過図

平成８年度の調査は、７年度の調査を受けて、①円筒埴輪列の設置間隔②石室の残存状況③形象埴輪の樹立位置④墳丘形態の裾部を解明することを目的に、トレンチとトレンチをつなぐ形でやや広範囲に調査を実施した。

調査は、原則として手作業で行うこととし、具体的には、

・墳丘0.2ｍコンター、外周0.1ｍコンター、縮尺１／20の平面図作成。
・グリッド杭側での土層観察に基づいた縮尺１／20の土層図を作成。
・遺物分布図は縮尺１／20で作成し、10cm四方以上のものは図化、それ以下はドットで表記。
・取り上げにあたっては、遺物台帳に諸属性を記録。
・円筒埴輪列は、縮尺１／10の微細図を作成。

以上のような方法で調査を進めた。なお、本調査は、史跡の保護の観点から古墳築造当時の表面までとし、それより下層にある遺構調査は行っていない。ただし、出土遺物は、すべて取り上げを行った。

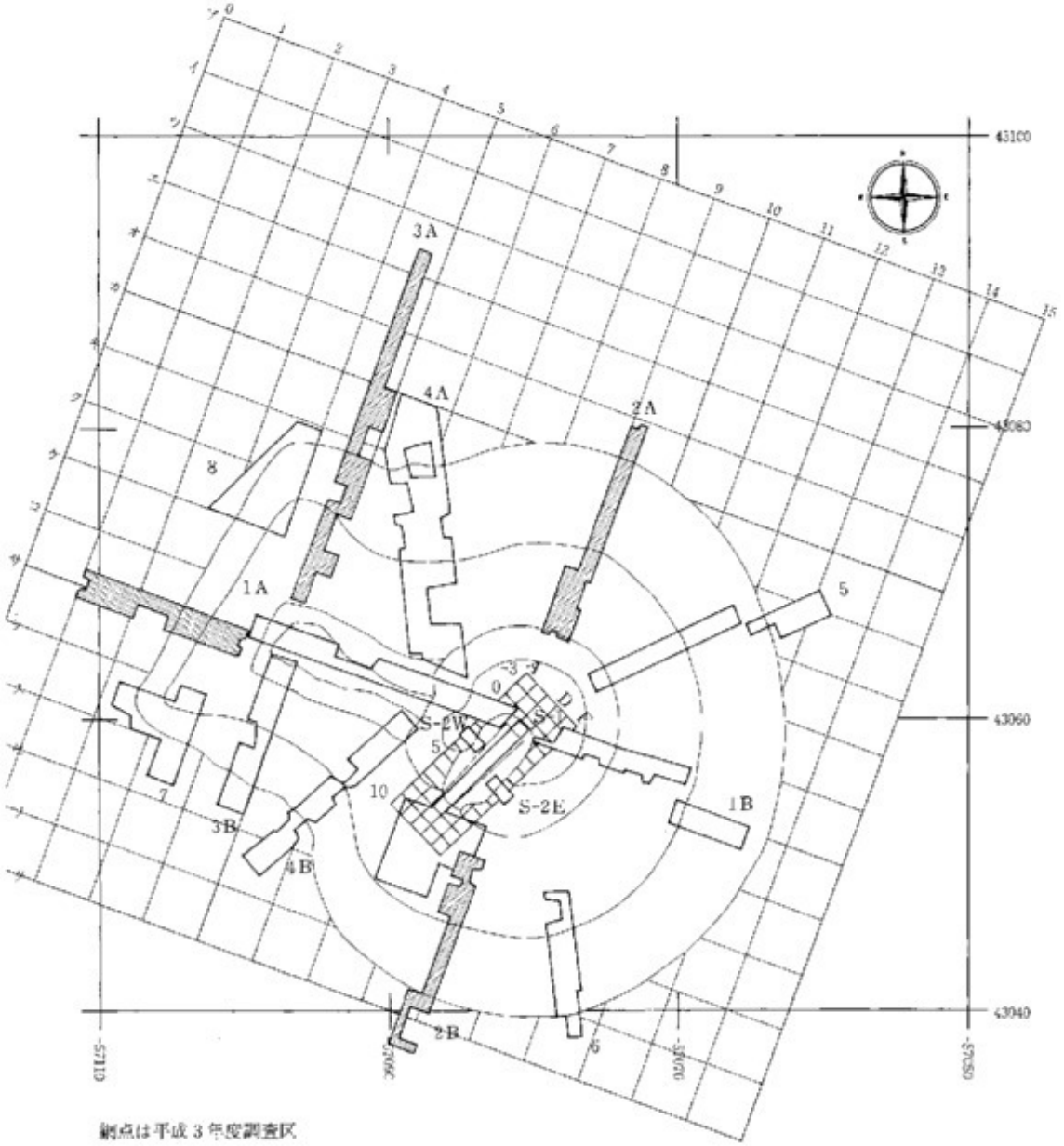
２　調　査　経　過

ａ．平成７年度発掘調査　調査に先立ち、小二子古墳の範囲確認調査方法について大室公園史跡整備委員会事務局内の打ち合わせ、同古墳整備部会等で検討、協議を重ね、２月24日の同委員会で承認を得て、史跡現状変更届を４月28日に文化庁に提出した。その後、現地踏査、発掘事務手続き、調査用グリッド杭・水準基準杭を設置した。同じ公園予定地の内堀遺跡群の調査を、小二子古墳の調査に先立つ５月10日より開始した。現状変更申請の許可が５月23日付で文化庁よりおりたが、調査工程を考慮し内堀遺跡群の調査の一部が終了するのを待って、７月21日から小二子古墳の発掘調査を開始した。すでにトレンチは設定してあったので、直ちにトレンチによる掘り下げを開始した。墳丘調査は調査の要所となる主軸、くびれ部、前方部コーナーから先行して行い、周堀、埴輪列が検出された。石室調査は石室の主軸に入れたトレンチによる掘り下げと、その後はボーリング棒

による探査で、裏込めを含んだ石室の範囲を検出した。埋め戻しは来年度の調査を考慮して、シートで全体を覆い作業を終えた。

調査期間中、9月4日に現地で古墳整備部会を開き、調査の進捗状況、今後の調査予定等についての検討を行った。その結果、小二子古墳の墳形、築造年代等に関して若干の留意事項があげられた。

業務外部発注は、7月24日より自然科学分析で小二子古墳の地形の古環境復原に着手、9月28日よりトレンチ平面測量に着手し、12月15日にすべての業務が完了した。また、現地調査事務所にて出土遺物や石室から取り出した土の水洗もすべて10月23日で完了した。10月31日に器材・出



網点は平成3年度調査区

Fig. 6　平成3・7年度調査区域図　　0　1:500　20m

土品の運搬、整理事務所の開設、作業の準備を済ませ、11月20日より平成８年１月31日まで本年度分の遺物整理を実施した。

ｂ．平成８年度発掘調査　前年度同様に検討、協議を重ね、２月24日の委員会で承認を得て、史跡現状変更届を４月14日に文化庁へ提出した。その後、現地踏査、発掘事務手続き、調査用グリッド杭・水準基準杭を設置した。大室公園内の内堀遺跡群の調査は、小二子古墳の調査に先立つ５月10日より開始した。現状変更申請の許可が５月14日付で文化庁よりおりたため、内堀遺跡群の調査を一時中断して、６月３日から小二子古墳の発掘調査を開始した。すでに調査区は設定してあったので、墳丘・石室ともに直ちに掘り下げを開始した。墳丘調査は切り株の除去に手間取っ

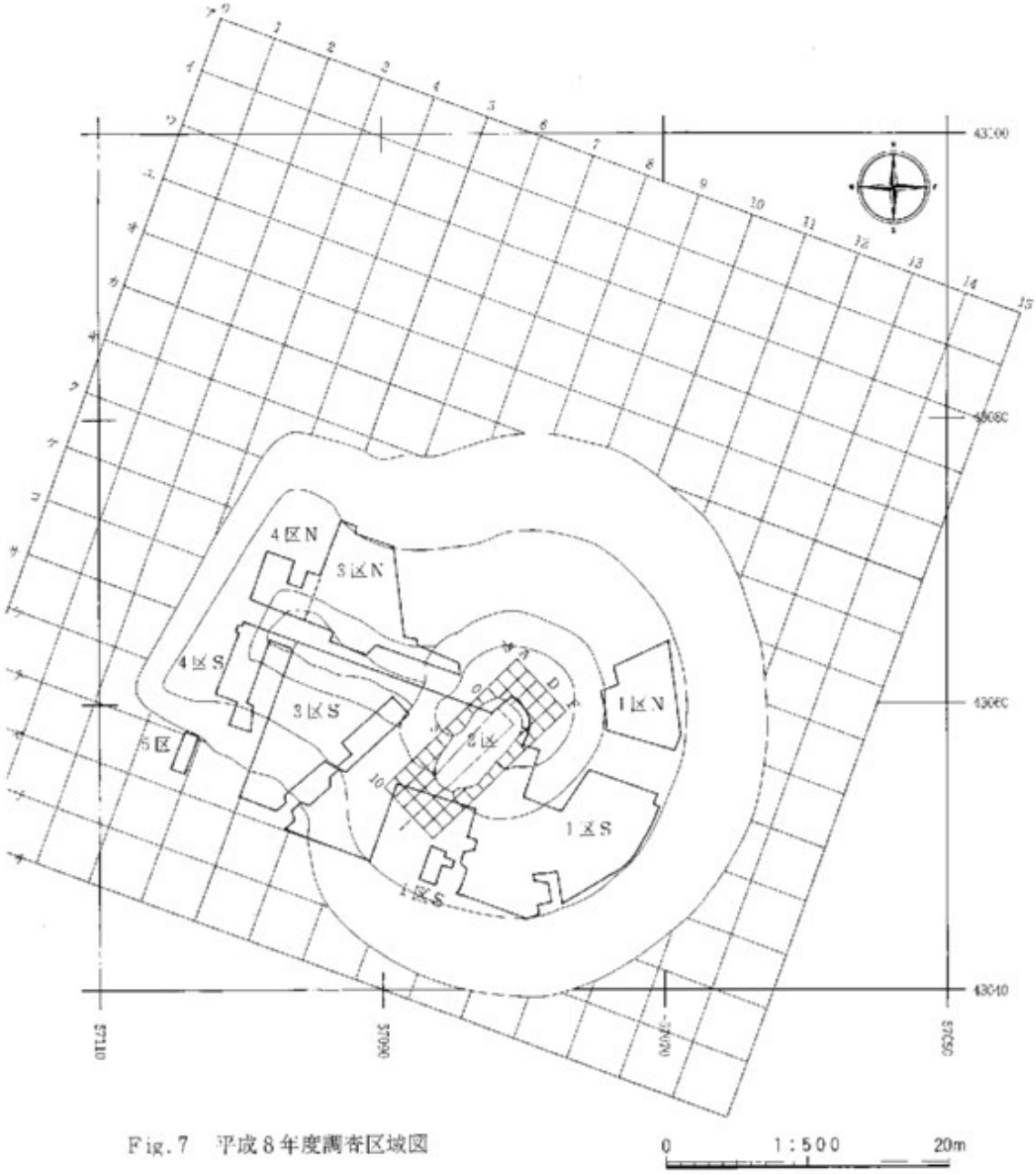


Fig.7　平成８年度調査区域図

0　1:500　20m

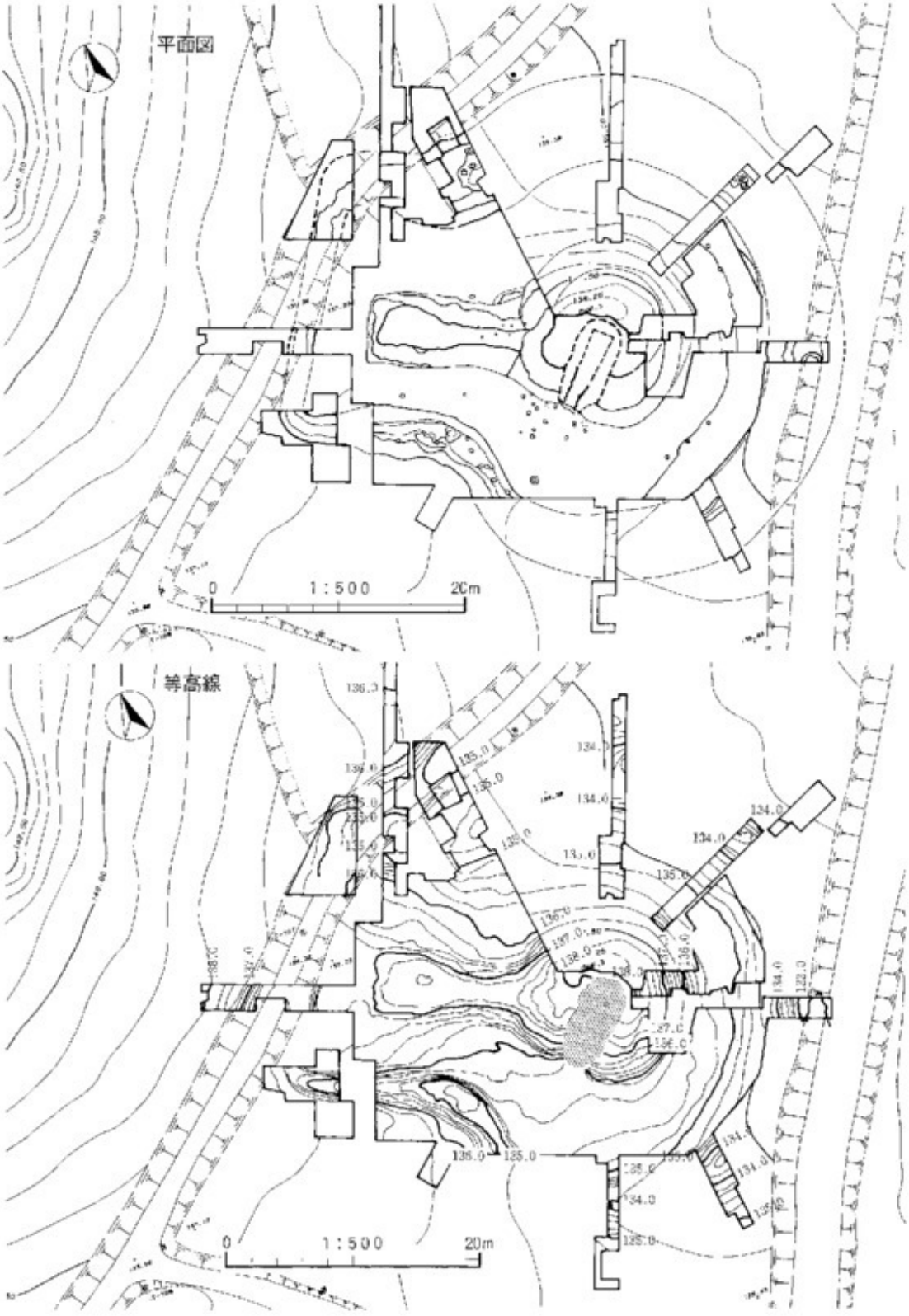


Fig.8　小二子古墳測量図

たが、8月中旬にはほぼ終了し、10月の初めには確定状況に至った。石室調査は破砕された石の搬出から始まり、西壁、玄室、閉塞と8月の初めまでに大方の石を除去した。また、残存の良い閉塞部の調査も並行して行った。10月からはさらに掘り下げ、石室の掘り方、裏込め石、床面の玉石を検出した。

埋め戻しは今後の古墳整備のことを考慮し、石室入り口を土のうで保護、墳丘は十分な盛土を行った後に整形をして12月9日に作業を終えた。

なお、調査期間中、6月27日、8月21日、10月9日の三回、現地で古墳整備部会を開き、調査の進捗状況、今後の調査予定等についての検討を行った。その結果、墳丘の形状、石室閉塞部の調査方法等に若干の留意事項があげられた。10月27日には現地説明会も実施し、県内外から約300名の参加者があった。業務の外部発注は、8月7日より石室平面測量に着手、8月14日より3日間で石室閉塞部分の型取り、10月3日より墳丘平面測量、10月17日には空中写真撮影、11月26日より最終的な石室測量が行われ、コンピューターによる遺物処理業務を除いて12月2日にはすべてが終了した。また、現地調査事務所にて出土遺物や石室から取り出した土の水洗もすべて11月19日で完了した。12月13日に器材・出土品の運搬、整理事務所の開設、作業の準備を済ませ、12月16日より平成9年1月15日まで本概報の作成を行った。

平成3年と平成7年、8年の3カ年の調査面積は735.2㎡におよんだ。小二子古墳の面積が1,225㎡になるため、古墳の60%を調査したことになる。

Ⅳ 層　　序

標準土層図については、小二子古墳について深掘り調査を実施できないため墳丘の土層と内堀遺跡旧石器時代調査区の層序を基にして作成した。

a．古墳構築後に堆積した土層

0層　近代～現代の層。石室のほとんどは破砕された礫層で構成されている。

1層　1a層は、暗褐色微砂の表土層（コナラを中心とした落葉樹の葉が腐植した層）。
　　1b層は、オリーブ褐色微砂の表土層。

2層　平安時代以降の層。12世紀後半に浅間火山から噴出した浅間軽石流テフラ（As-Kk）と1,108年に浅間Bテフラ（As-B）を主体に含む層。上部からa～cの3枚の亜層に分離。
　　2a層は、暗褐色軽石層でAs-Bを20～30%程度含む。
　　2b層は、黒褐色軽石層でAs-Bが50%前後。
　　2c層は、暗オリーブ色軽石層でAs-B純層に近い。

3層　古墳～平安時代の層。古墳墳丘の盛土や地山が崩落し堆積した土層。aとbの2枚の亜層に分離。
　　3a層は、黒色微砂層でローム粒子をわずかに含む。
　　3b層は、オリーブ褐色微砂層でローム土と黒色土との混合。
　　平坦面では墳頂から崩落した古墳構築土の6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳軽石（Hr-FP）や6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳火山灰（Hr-FA）、4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石（As-C）が

耙じり土やローム漸移土・ローム土の混入の違いによって、さらにc～eの亜層。

4層　古墳時代の層。周溝や墳丘の最下面に堆積する層。ローム土が主体。色調の違いからa～cの亜層。

b．古墳構築前に堆積した土層

Ia層　黒褐色粗砂層。耕作土層。浅間草津テフラ（As-Kk）と浅間Bテフラ（As-B）を50%以上含む。粘性なく、締まりあり。

Ib層　黒褐色土層。As-Kz・As-B、As-C、Hr-FA、Hr-FPを含む粗砂層。粘性はないが、締まりはある。

IIa層　As-B純層。わずかに匍層をはさんで上部にAs-Kkが存在する。

IIb層　黒色細砂層。As-C、Hr-FA、Hr-FP（径20mm）を15%含む粗砂層。粘性を有し、締まりあり。

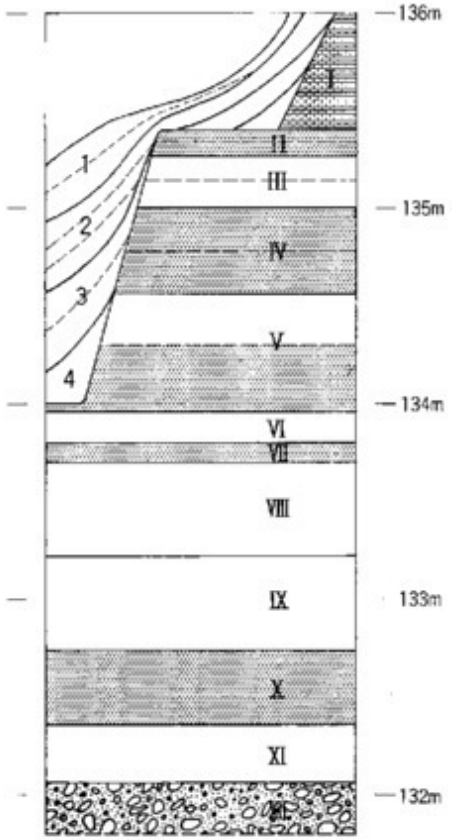
IIc層　暗灰黄色細砂層。粘性は少しあるが、締まりなし。

III 層　黄褐色細砂層。淡色黒ボク土。粘性は少しあるが、締まりが弱い。縄文時代遺物包含層。

IVa層　明黄褐色硬質ローム層。約1.3～1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石（As-YP）を10%、約1.8万年前に浅間火山から噴出した浅間白糸軽石（As-Sr）、または1.7万年前に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第1軽石（As-OP1）を5%を含む微砂層。粘性があり、硬く締まる。

IVb層　明黄褐色土層。ハードローム層。As-YPを5%、As-SrまたはAs-OP1を10%程度含む微砂層。粘性があり、硬く締まる。

V 層　明黄褐色硬質ローム層。約1.8～2.2万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群（As-BP）をブロックで20～30%程度含む層。粘性があり、硬く締まる。



VI 層　明黄褐色硬質ローム層。As-BP Groupをブロックで15%程度含む層。粘性があり、締まりが弱い。基底付近に約2.2～2.5万年前に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰（AT）の降灰層準があると考えられる。また、As-BP Groupの基底の室田軽石（MP）の存在も考えられる。

VII 層　明黄褐色微砂層。風化土壌。粘性を有し締まりは弱い。上部に約2.2～2.5万前にATの含有が極大値を示す。

VIII 層　明黄褐色粘土層。暗色帯。粘性が強く、締まりの弱い粘土層。色調でa・bの2亜層に分類できる。b層の下部から灰色のチャートの岩片がブロックで検出された。約3.1～3.2万年前に赤城山から噴出した赤城震沼テフラ（Ag-K）の上部に相当する水沼ラピリ（Cl.P）およびその上位の赤城小沼テフラ〈Ag-KLP〉と一致する。噴火の規模や分布などから水沼ラピリ（Cl.P）の可能性が大きいという分析結果を得た。

IX 層　明黄褐色粘土層。粘性が強く、締まりのある粘土層。a～dの4亜層に分類できる。

X 層　明黄褐色軽石層。比較的風化しており、層相などから約4.1～4.4万年前に榛名火山から噴出した榛名八崎軽石（Hr-HP）に同定される。3亜層に分類でき、aは比較的大粒な軽石層、bは火山灰層、cは軽石層である。

XI 層　褐色粘土層。水性堆積で非常に粘性が強い。

XII 層　青灰色砂礫層。巨礫によって構成される。榛名泥流（約20～30万年前）によって形成されたと考えられる「流れ山」の構成土と同じ。

Fig. 9　小二子古墳標準土層図

V 遺構と遺物

小二子古墳の調査は、平成3年度の後二子古墳の調査とあわせて実施している。その時には、11本のトレンチを設定したが、実際に掘り下げを行ったのは、4本のトレンチに過ぎなかった。それは、今回の調査が立案されており、広範囲の調査で得られる成果に期待したためである。

平成7年度の調査は、北側の古墳形状と石室の損壊状態を把握すべくトレンチ調査を基本とした。詳細なトレンチ壁面セクションの作図を済ませておいた点は、平成8年度で容易に広範囲な調査を展開させる上で有利であった。

平成8年度の調査は、平成7年度に調査したトレンチとトレンチをつなぐ形となったため、効率よく進めることができた。平成8年度の面的な調査により、平成3・7年度のトレンチで観察した構築面や上層が変更される点が多かった。調査者の技能や力量に帰すべき結果ともとれようが、遺構の断ち割りが許されないトレンチ調査の限界を垣間みた。

3次にわたる発掘調査の面積は、735.2㎡となった。古墳の墓域は、長さ43.9m・幅39.4m・高さ5.4mで面積1,225㎡を測るため、全体では6割の部分の調査が済んだ計算になる。調査の結果、全周する周堀に囲まれ、2段の墳丘構成をとる前方後円墳であることが判明した。ただ、幅広い下段平坦面を持ち、下段墳丘と上段墳丘の形態・工法は大きく異なっている。墳丘の規模は、長さ38m・幅30.4mとなり、主軸方向N49°W（N48°44′59″W）となった。現況でみえる後円部の南側の陥没坑から、横穴式石室を推定できた。しかし、石室の大半は、後世に盗掘を兼ねた採石場と化しており、用材を割り取った際に生じた不必要な破砕された石が床面まで充填されていた。

1 墳丘・周堀

（Fig.11、PL.1～12）

a．外縁部 小二子古墳は、西の標高150.5mの流れ山から南東に延びる丘陵の緩やかな斜面に

Tab.1 調査区別面積一覧表

	No	トレンチ・区名	調査面積	合計
平成7年度	1	石室（S1）	6.0㎡	282.0㎡
	2	石室（S-2W・E）	3.0	
	3	石室前面部	29.5	
	4	1Aトレンチ	19.0	
	5	1Bトレンチ	37.0	
	6	3Bトレンチ	19.0	
	7	4Aトレンチ	57.5	
	8	4Bトレンチ	24.0	
	9	5トレンチ	23.0	
	10	6トレンチ	14.0	
	11	7トレンチ	23.0	
	12	8トレンチ	28.0	

平成8年度	1	1区N（北）	28.0㎡	365.0㎡
	2	1区S（南）	104.0	
	3	2区	22.0	
	4	3区N（北）	128.0	
	5	3区S（南）	51.0	
	6	4区N（北）	13.0	
	7	4区S（南）	16.0	
	8	5区	3.0	
3年度	1	1Aトレンチ	21.4	88.2㎡
	2	2Aトレンチ	19.5	
	3	2Bトレンチ	18.1	
	4	3Aトレンチ	29.2	
小二子古墳調査総面積				735.2㎡

占地する。独立丘陵状の流れ山は、頂上から4m下がった標高136.5mのあたりで傾斜が緩やかに変換する。小二子古墳はその変換点と後二子古墳との間に造られている。古墳が造られ斜面は、1Aトレンチの地山の標高が136.5mであり、東の1Bトレンチ側の地山の標高が134.4mとなる、40mで2.1mほど下がる。外縁部のトレンチから自然堆積状態のAs-B・Cのテフラを確認したことから整形作業は行っていない。また、埴輪片等もみられないため、埴輪の設置等も認められない。

7トレンチで、周堀と重複した赤井戸式や鬼式系の土器を出土する古墳時代前期の遺構が認められた。平成8年度に追加調査を実施した。その結果、溝が推定されるため、周溝墓などの遺構の可能性が考えられる。しかし、古墳築造以前の遺構であり、小二子古墳を損なうため調査を止めた。このほか、縄文時代早期や後期の遺物が周辺から検出されている。また、本年度調査した小二子古墳と後二子古墳の外周道路部分でも、古墳時代前期の集落が確認されている。

b．周　堀　すべてのトレンチから周堀が検出されていることから、全周していると考えられる。平面形状は、前方部先端がやや南に拡がるため左右対称形にならず、後円部は南北の楕円形となる。周堀を覆う土は、すでに調査した3つの古墳と同様の堆積状態であった。Fig. 9の土層図に示したように4層に大別される。すべての調査区の周堀覆土中位から2層のAs-Bテフラが厚さ10～30cmで検出されていることから、後世の攪乱は受けていない。Tab. 2にそれぞれの地点の計測データを掲載したが、前方部での周堀は幅1.1～1.8mと狭く、しかも深さ0.3～0.7mと浅いためハードローム層まで掘削は到達していない。それに比べ、後円部では幅4～5mと広くな

Tab. 2　小二子古墳計測表

		後円部					くびれ部		前方部		
		北	北東	東	南東	南	北	南	北	中	南
周堀下段墳丘	1 外縁標高	134.6	134.1	—	135.0	135.0	—	135.9	—	137.9	136.5
	2 底面標高	133.3	133.4	133.0	133.5	134.0	—	134.7	135.6	136.2	136.4
	3 周堀深さ	1.1	0.7	1.2	1.2	1.1		0.9	0.4	0.7	0.3
	4 周堀の幅	5.5	4.5	[4.0]	4.1	3.7	(4.5)	2.8	(1.8)	[1.4]	1.1
	5 外傾角度	29°	24°	—	19°	27°	—	36°	—	31°	37°
	6 下端標高	133.7	133.6	133.1	133.5	134.1	134.9	134.7	—	136.0	136.0
	7 下段高さ	0.8	0.5	1.2	1.2	1.0	0.8	0.9	—	0.8	0.7
	8 下段の幅	1.2	0.7	2.1	2.0	1.9	2.5	1.0	—	1.1	0.7
	9 FA層標高	—	134.9	134.8		—	—	—	—	—	—
	10 下段角度	30°	37°	31°	29°	33°	15°	38°	—	45°30′	48°50′
平坦面上段墳丘	11 下端標高	134.4	134.1	134.2	134.7	135.1	135.1	135.6	136.0	136.8	136.7
	12 上端標高	134.9	135.1	135.2		135.8	—	136.2	136.1	136.8	—
	13 平坦面高	0.5	1.1	1.2	—	0.8	—	1.1	0.5	0.1	—
	14 平坦面幅	(6.1)	6.0	5.9	[6.9]	6.6	6.8	4.6	[3.6]	4.1	[4.4]
	15 平坦面角度	7°	13°	5°40′		6°30′	8°30′	5°		0°	—
	16 上端標高	135.5	136.6	137.8	—	—	137.2	137.3	—	137.2	—
	17 上段高さ	0.5	(14.4)	2.6	—	—	1.0	1.1	—	0.4	—
	18 上段幅	1.3	(1.2)	4.7	—		2.1	2.2		0.7	—
	19 上段角度	28°	(25°)	29°	—	—	25°	27°	—	26°30′	—
	20 墳頂標高	138.4	—	138.2	—	—	137.3	137.4	—	137.3	—

註（ ）は現存値、［ ］は復原値である。

り、深さ0.7~1.2mまでおよび、1Bトレンチ ではAT層まで達していた。掘削深度による違いが、上段墳丘の盛土の違いとなっている。表面観察の限界があるが、前方部には黒色土、後円部にはローム土を主体に盛土を行っている。

c．下段墳丘　下段墳丘は北側の一部を除いて調査を行った。平面形は前方部先端が南に開くため左右対称形とならない。さらに、前方部1とした場合、後円部が1.8とやや帆立貝形となっている。墳丘の長さ38.0m、幅が30.4m・前方部長13.3m・前方部の幅17.8m・後円部の長さ24.7m・幅が30.4mを測る。さらに前方部で4m、後円部で6mと幅の広い平坦面は、石室前面部では8m近い幅となる。平坦面の傾斜は前方部で標高136.8mであり、後円部では134.6mであるため、2.2mほどの高低差を有する。構築にあたって、地山にHr-FA面が点々と観察できることから、整地をする程度の工事であろう。後円部の東が斜面になっているため、長さ18m、幅2~3mにわたってローム土を用い整形している。また、平坦面の中央に設置間隔をあけた円筒埴輪列を確認している。平坦面上では形象埴輪の破片も出土しなかったため、形象埴輪の樹立はなかったと考えられる。

d．上段墳丘　下段墳丘に比較して上段墳丘は、形状・大きさの点で異なる。下段がやや帆立貝形であるのに、上段墳丘は柄鏡形の前方後円墳である。また、前方部に比較して後円部のほうが60cm程高く、盛土の土も前方部が黒色土であるのに比べ、後円部はローム土と黒色土を互層に使用している。上段墳丘は長さ25.0m、幅14.5mであり、前方部の長さ12.1m、幅は6.0m、後円部の長さが12.9mで幅が14.5mとなる。墳丘構築土は石室裏側から観察した結果から、ハードロームと黒色土が互層となっていた。なお、葺石については調査においてまったく認められなかった。形象埴輪片が上段斜面から多量に出土している。後円部の斜面からは器財形埴輪と円筒埴輪がまとまって出土し、鞍部（前方部と後円部の間で前方墳頂部寄り箇所）から人物形埴輪や形象埴輪の基部、円筒埴輪が出土している。

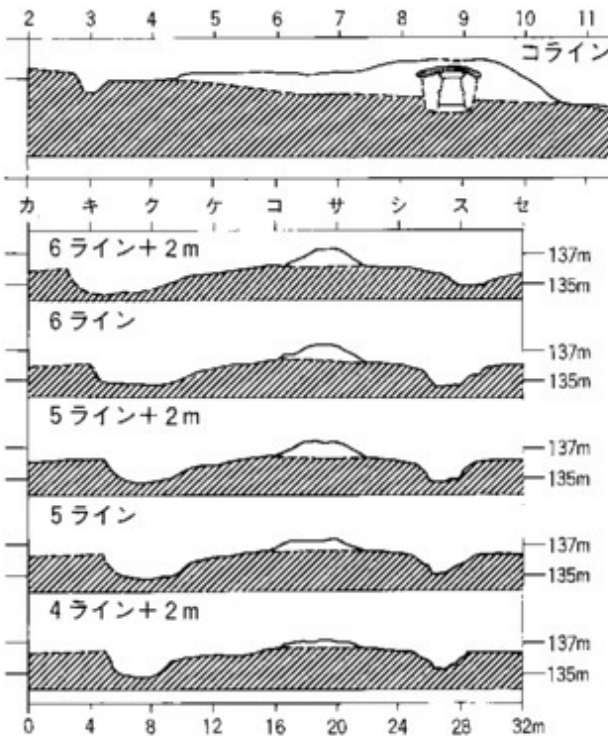


Fig.10　小二子古墳縦横断面図

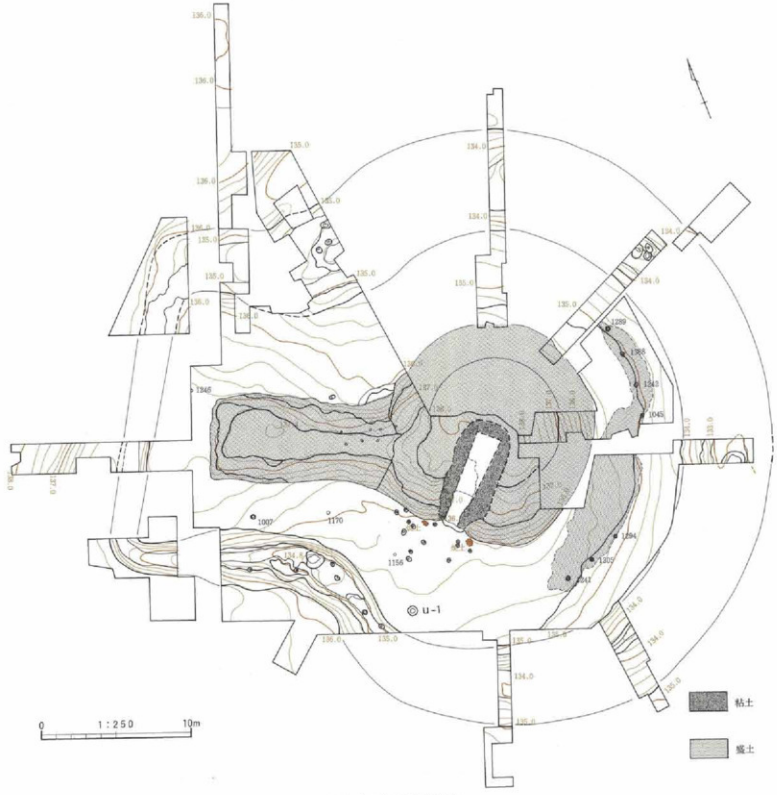


Fig.11 小二子古墳全図

2 埴　輪　列

（Fig.12・13、PL.8）

円筒埴輪については出土したものの多くが掘り方を有しており、埴輪の樹立位置を正確に示している。また、鞍部からは形象埴輪の基部が検出された。その他多くの種類の形象埴輪片が斜面に流出した状態で検出された。現在、各調査区とも遺物の整理作業が終了していない状況のため、現時点での情報を取りまとめておきたい。

a．円筒埴輪列　検出された円筒埴輪は前方部墳頂と下段平坦面で計16本であったが、円筒埴輪列として原位置を留めていたものは下段平坦面に限られる。Fig.12の右下段の模式図に示した1289（1区N）・1388（1区N）・1242（1区N）・1045（1Bトレンチ）・1294（1区）・1305（1区）・1241（1区）の7本は、後円部東側の平坦面に存在し、単独の設置坑を有していた。そのため埴輪の出土位置は原位置と判断できる。1156（3区S）・1070（3区S）・1007（3Bトレンチ）・1246（4区N）の4本は、後円部から前方部南側にかけて出土したものである。やや浮いた状態で出土したため設置坑は検出されなかったが、外傾した直立に近い出土状態からは本来の樹立位置に近いものと考えられる。1003（1Aトレンチ）・1004（3区N）・1005（1Aトレンチ）・1013（1Aトレンチ）・1014（1Aトレンチ）の5本は鞍部から見つかった。これら5本は原位置から北側へ倒れた状態で検出され、設置坑は有していないもののほぼ本来の樹立位置と考えられる。埴輪の設置間隔は掘り方を有している1区で2.0m～2.2m、1区Nで若干広がり2.1m～2.3mであった。3区Sの埴輪列は間隔が4.8mであるが、1区と同様に考えた場合2本の間にもう1本設置されていたと判断され、設置間隔は2.4mと推定される。前方部墳頂の埴輪列4本は判断に苦しむが、原位置と判断される1014の埴輪と、倒れ落ちて原位置から遊離した1003の埴輪との距離を等分割した1.1m～1.3mと推定される。

また、Tab.3に示したように80～90本の円筒埴輪を使用したことが考えられた。ここでは仮に80本とし、下段と上段の使用個数を算出したい。まず、下段平坦面の円筒埴輪列が全周した場合の総延長は89mとなる。2.2m間隔で設置すれば40本の埴輪が必要となる。したがって残りの40本は墳頂部での使用が考えられる。その40本を鞍部の総延長23m・後円墳頂部周囲27mの計50mに設置した場合、設置間隔は1.2mであったと算定できる。

下段平坦面の上端から埴輪列の中軸線までの距離は、1区Nで3.1m、1区は3.4m、3区Sは2.2m、4区Nは前方部北西コーナーの検出に苦労したが距離1.8mであった。4区Sの埴輪を除いて、埴輪列は下段平坦面の上端と下端の間のほぼ中位に位置し、4区Sの埴輪は大きく周溝側に寄っている。掘り方を有する埴輪の基底部は7cm～10cm埋設されていた。

Tab.3　円筒埴輪の推定本数

①　普通円筒埴輪口縁破片延長	0.745m
②　普通円筒埴輪の口縁直径平均	22cm
③　普通円筒埴輪の口縁円周	69cm
④　延長：円周（①：③）	93本

⑤　普通・朝顔円筒埴輪破片総重量	300.9kg
⑥　円筒埴輪1本の重さ	3.2kg
⑦　円筒埴輪推定本数（⑤：⑥）	94本
普通円筒80～90本、朝顔円筒10本前後	

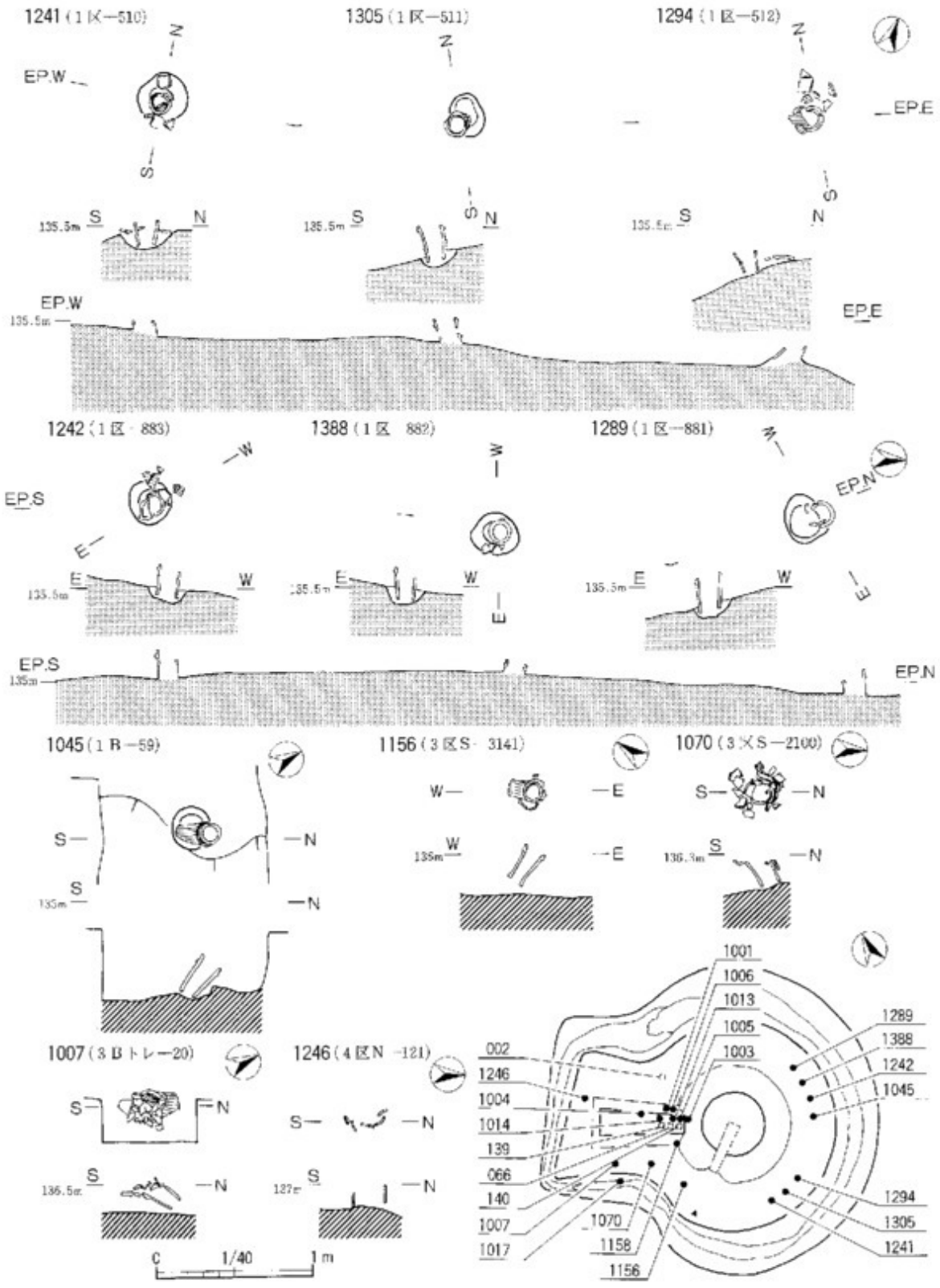


Fig.12 墳輪列実測図（1）

b．形象埴輪群　Fig.13の最上段は平成７年度の鞍部である1Aトレンチの埴輪出土状態を図示したものである。主軸方向に沿って西から139・066（001の人物と同一個体と判明）・140の３個体が１m間隔で設置されていた。いずれも形象埴輪の円筒部であるため、形象部との接合が期待される。これらの形象埴輪の北側に、平行して1014・1013・1005・1003の円筒埴輪が配置され、南にはやや流れ落ちた状態であるが1158の円筒埴輪が配置されていた。このように鞍部主軸線上に１m間隔で人物群が置かれ、北側には平行して円筒埴輪列、さらに南側にも円筒埴輪列があった可能性が極めて高いことが判明した。後円部の上段墳丘斜面や破壊された石室から家、靫、靫、大刀、蕨といった器財埴輪の破片が出土した。本来は後円墳頂部に樹立されたものである。

3　石　室　前　面　部

（Fig.11・13・28、PL.6・10）

平成７年度の調査では、後円部の南に南北５m、東西６mの調査区を設定したが、平成８年度は墳丘の南側のほぼ全面を掘削した。

a．砕石層　石室前面部には安山岩の破片（５～20cm大）が厚く堆積しており、この破片の堆積は石室の奥から前面部まで続くことが確認された。その厚さは厚いところで50cmで、中には天井や側壁に用いられたと思われる大型な石材も含まれていた。この厚い砕石層の下面には1108年の浅間山の噴火で降下したAs-B軽石が厚く堆積していた。この砕石層の直下から明治時代頃に使用されたものと推定されるキセルの雁首と吸い口が出土した。

b．石室外に運び出された副葬品　３区Ｓのシー７グリッドで石室から大量に掻き出された玉石層が分布し、その層から耳環や大刀金具が出土し、土中からは水洗選別の結果、飾り刀金具・鉄鏃・ガラス製小玉が発見できた。

c．柱穴群　石室前面部は西から東へ若干傾斜する地山面で構成され、上段墳丘の裾周りでは、黒色のAs-C軽石層の上に堅緻面が検出された。古墳構築の際に踏み固められた結果といえよう。また、石室入り口付近には柱穴らしき遺構が13個検出された。大きさは様々で、径40cm・深さ40

Tab.4　形象埴輪の種類と本数

鞍　部		
種　類	推定個体数	備　考
人物（にんぶつ）	8	男子（全身像２・半身像２） 女子（１） ※（貴人２・農夫１・巫女１ 盾持人１・不明１） 脚の同一部分で接合
馬（うま）	2	後輪で接合
盾（たて）	2	
計	12	

後円墳頂部		
種　類	推定個体数	備　考
家（いえ）	1	
靫（とも）	2	
靫（ゆぎ）	1	左下のヒレで判断 ヒレ部接合に２種類の技法
大刀（たち）	4	
脛（さしば）	3	
計	14	
推定個体数	26個体	

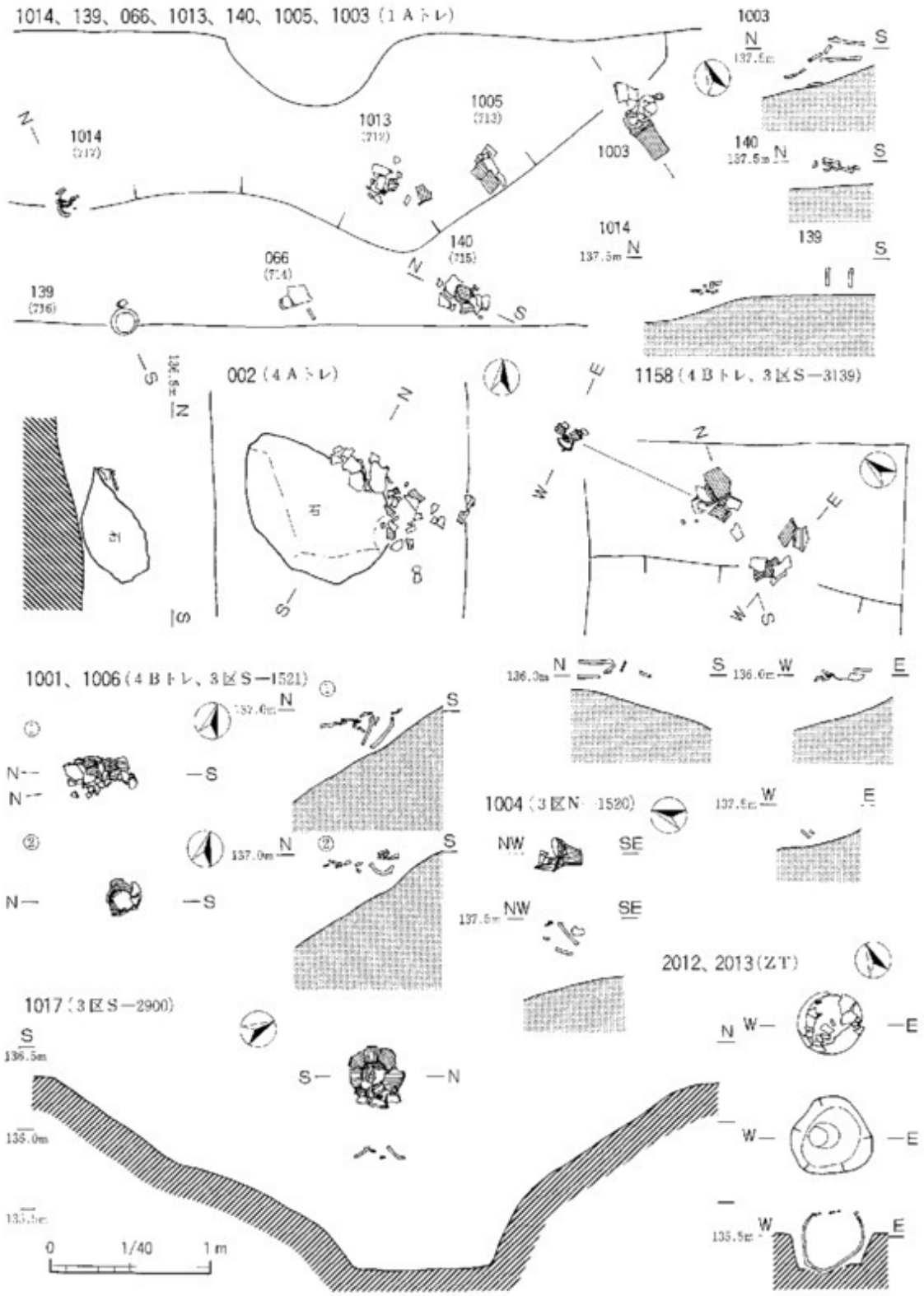


Fig.13　埴輪列・埋設土器実測図（2）

cmのものが2個、径30cm・深さ30cmのものが3個、径20cm・深さ20cmのものが7個、径20cm・深さ40cmのものが1個であった。これらの使用の目的は未解明であり、樹木の根である可能性も否定できないが、石室前でまとまって検出されたことを考慮した場合、埋設土器、焼土跡とあわせて墓前祭祀との関係も一考の余地がある。

d．墓前祭祀の土器と焼土　土師器杯形土器8個体が石室前面部東側からかなり集中した状態で出土し、須恵器提瓶1個体も同様の位置から出土した。また、焼土跡は2カ所検出され、石室の中心線を軸に線対称の位置で、上段墳丘に近接した地点から検出された。いずれも下段平坦面に熱による赤化がみられた。

e．古墳時代前期のU－1号埋設土器（Fig.13・23）　石室の主軸ラインの延長線上に古墳時代前期の樽式系の壺と赤井戸式の甕を用いた埋設土器が検出された。古墳構築面で確認したもので、胴部上半が露出した状態となり、掘り方も確認された。壺内部の土を水洗選別したが遺物はなかった。出土状態から、①古墳築造時に転用、②前期の遺構を小二子古墳築造時に発見したが丁重に扱ったという2通りの考え方ができよう。

4　石　　室

（口絵1、Fig.14、付図1、PL.2～6）

石室のほとんどの石が抜かれていたが、下段平坦面を一部掘り込んで、ほぼS 45° Wに開口する袖無形横穴式石室であることが判明した。推定される石室の大きさは、全長6.0m、奥壁幅1.8m、入り口幅1.0m、高さ1.8mである。半地下式の構造をとるため、下段平坦面から一段下がり羨門石をとおり羨道に入る、さらに框石から玄室へもう一段下がる構造をとることが考えられる。

a．石室の破壊　明治時代頃に盗掘を兼ねた石材の採掘によって、天井石・壁石・玉石のほとんどが抜き取られていた。石室前面部に30～50cmの厚さで多量に堆積したハツリ屑の直下から出土したキセルが、唯一の遺留品である。石室の破壊は、キセルの時期判定に委ねられるが、おそらく明治時代に行われたのであろう。盗掘は、後円部墳頂から穴を掘り、天井石、壁石の抜き取りを行っている。石室内で粗割りを行っており、割った河石が床面まで充填されていた。石室前面部でハツリ屑が多量にみつかっていることから、ある程度の期間をかけて石の抜き取りが行われたと考えられる。抜き取りは大型な石材を主目的に行っており、幸いにも小ぶりな石で構成される羨道部や閉塞石は難から免れた。また、西壁に残された2石については、抜き取り以前に裏込が崩落していたと考えられ、2石がすでに傾いていたために抜き取りを断念したと思われる。残された石や石室を充填していた割石には幅4～7cmの見事なクサビ跡（PL.15）が数多く残されていた。

b．石　材　石室内に割られて充填された石、残存していた構築石材のほとんどが赤城産の粗粒輝石安山岩であった。わずかに床面玉石の2～3点ほどにチャートがみられたにすぎない。粗粒輝石安山岩の産地は、あえて赤城山体に求めなくても「流れ山」で容易に採掘できる。「流れ山」

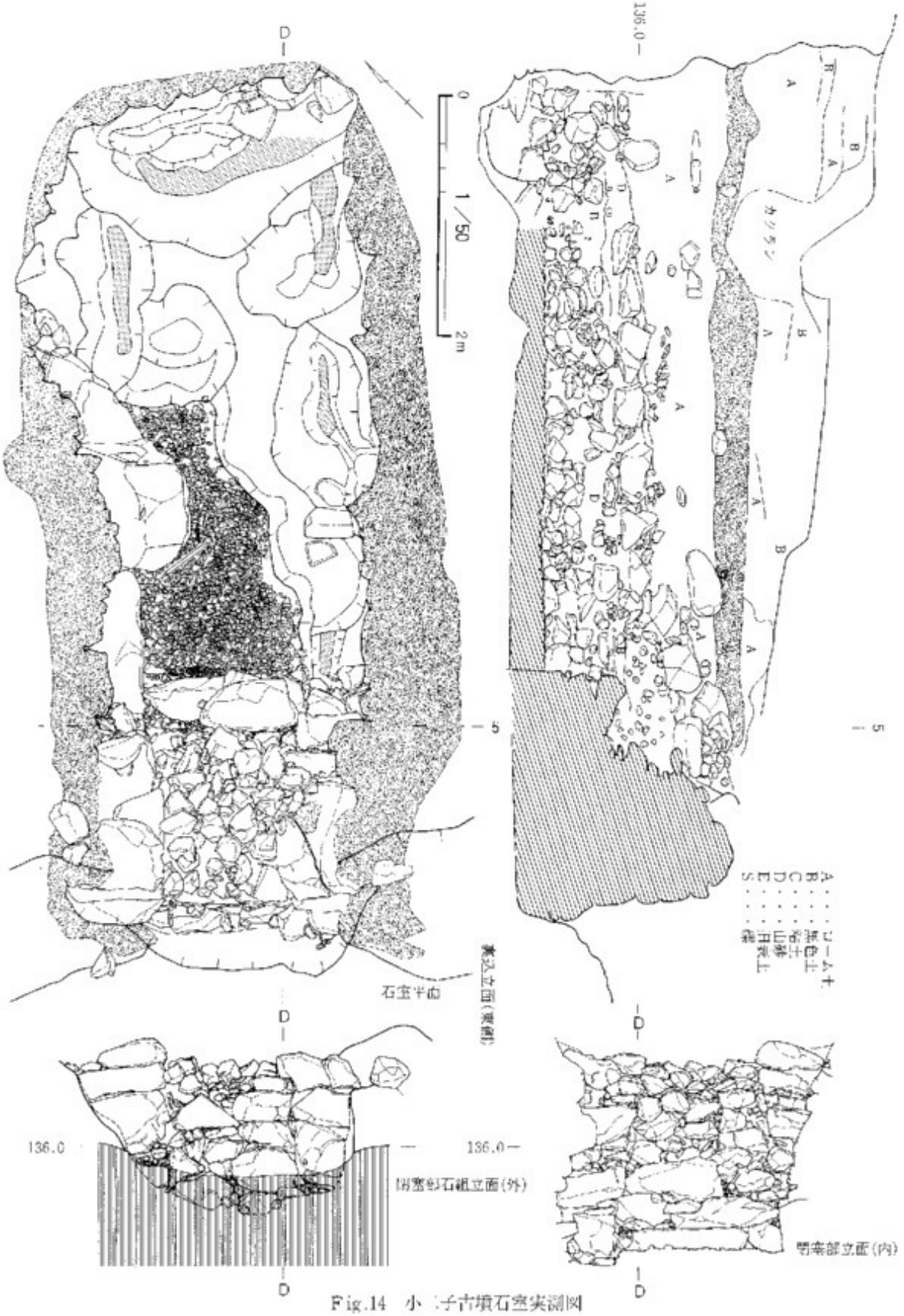


Fig.14　小二子古墳石室実測図

は大室公園内にも３カ所存在する。「流れ山」は、今から約20～30万年前、赤城の大噴火よって引き起こされた「梨木泥流」によって運ばれた粗粒輝石安山岩を内包する丘陵である。流れ山の分布は、この地域をほぼ真ん中にして、北西が前橋市上大屋町、北東が新里村武井、南が伊勢崎市華蔵寺町の約10kmの範囲に40カ所も存在する。小二子古墳の西に隣接した流れ山には、粗粒輝石安山岩の採掘坑が10カ所ほど確認でき、古墳時代の採掘坑の存在も考えられる。

c．閉塞粘土　石室の閉塞部は石積みを行った後に、外面に限って粘土による被覆がなされる。外面閉塞部を覆う層位は自然堆積の様子が観察できた。通常にみられるAs-Bテフラも尋常に堆積することから後世に荒らされた様子はうかがえなかった。粘土は付図１にセクションを図示した５層であるが、入り口下面には40cmの厚さで覆われていた。また、入り口前面には列石を置き、粘土の流出を防いだものと思われる。粘土層は石を混合する5a層と純粘土の5b層の２層に分離できたことで、連続した時間内での作業であるか、断続した時間の所作であるか検討を要する。外面全体を被覆したことが十分考えられるが、検出状態では上部40cmには存在しなかった。現時点では、①粘土被覆は当初から全面的な施工をしていない、②追葬時に遺体を入れる高さだけ除去した結果である、の２点が考えられる。このことは、閉塞に積まれた石と有機的な関連を有する。

d．閉塞石　長さ２ｍの羨道全域にわたって石積みによる閉塞が存在した。外面は、下から３段目の標高136.5ｍまで大型な石が平積みで使用される。その上は小ぶりな石がやや乱雑に置かれている。また、内面の石積みも、標高136.5ｍあたりで石が小ぶりになり、外面の石の変化と呼応している。閉塞石の大きさの違い、粘土の被覆がなされていない点、耳環（じかん）が２セット検出されていることを併せて、追葬の可能性を考えておきたい。

玄室に接する面では、幅の広い石が３段積まれている。入り口から20cm下がった場所に梱石の上面が存在し、その梱石が20cm露出しているとすると40cm下がる。40cm下がった面と下段の石の上面が同じ高さとなることから、框石と推定される。後二子古墳のように幅広い平坦面を持つことや平坦面から下がる石室など共通性があることから、石室構造も両袖、袖無の差異はあるにしろ参考になると考えられる。

e．羨　道　羨道全体に置かれた閉塞石をはずしていないことから、内容の解明には至っていないが、表面の観察では、下段平坦面から外側では20cm、内側では40cm下がる。壁体用材は玄室に比べ小型であるのは、墳丘外面の曲線の演出や、天井先端の架構との関連と考えられる。床面の

Tab.5　小二子古墳石室計測表

位置		計測	推定	摘要
全長		－	6.0m	
玄室長			4.0	
玄室幅		－	1.8	
玄室高		－	1.8	
羨道長		－	2.0	
羨道幅	底面	入口1.2	－	玄室側1.4m
	天井近辺	0.9	－	

羨道高	現在1.5	1.6	入り口（1.3）
玉石厚	0.15	－	
掘り方の長さ	－	7.0	半地下式
掘り方の幅	－	3.0	地山を60～80cm掘り込む。
使用石材	粗粒輝石安山岩（西の隣接した流れ山産か）		
閉塞の工法	石で充填後に粘土被覆、粘土流出防止の列石		
開口方位	S45°W		
盗掘された年代	明治時代か（江戸～昭和時代）		

幅は、壁体に82°の傾斜で持送りがみられるため、深い内面の方が広くなっている。

羨道床の長さは、2.0mを測るが、入り口の掘り込みを加えれば2.5mとなる。

f．玄　室　奥壁をはじめ壁石のほとんどが抜き取られていたが、西壁には2つの根石が残存していた。南の石が長さ1.2m・厚さ0.5m、次の石が長さ1.7m・幅1.2m・厚さ0.5mと大型石材を使用している。攪乱層を丁寧に掘り下げた結果、すべての根石の抜き去った痕跡を検出できた。それによれば、西壁が残存2石＋1石、奥壁1石、東壁3石構成をとることが判明した。抜き取った痕跡をもとにした玄室の大きさは、全長4.0m・奥壁幅1.8m・羨道側幅1.3mである。

g．床　面　閉塞石は、史跡整備で公開を予定しているため除去調査は実施しなかった。そのため、羨道部分については表面観察から記述せざるを得ない。入り口から20cm下がった高さに敷石の上端がくる。框石が20cm前後突出していると推定されるため、入り口から40cm下が羨道床面高と推定される。また、玄室床面に接して横たわる整美な石のレベルとも一致することから、框石と推定される。玄室の南部分には整然と敷かれた玉石が幅1.2m、長さ2.2mの範囲で検出された。かろうじて難を逃れた玉石層であり、厚さは15cm前後で径5～10cmの均一な円礫を、粘土で固定していた。掘り方の面は、Ⅲ層上面である淡色黒ボク土が踏み固められていた。

h．掘り方　調査は、破壊をうけて崩落した土や割った時に生じた屑石の排除を目的に実施したため、厳密な掘り方の調査は行っていない。土石を丁寧に排除した結果、石室の裏込として補填された石や土が層をなして現れた。また、途中の裏込が抜け落ち、墳丘盛土や地山の土が観察できたため、石室や墳丘の構築、掘り方のおおよその規模が推定できた。調査で土石を排除した大きさが南北7m、東西3mであるため、それよりやや大き目の長方形の掘り方を推定できる。底面は入り口から玄室までほぼ水平に掘られていた。その高さは、ほぼ標高135mで、地山から深さ60～80cmほど掘り下げられていた。壁石を据えた痕跡は、さらに30～40cm深く掘られていた。底の土は、淡色黒ボク土からハードローム層の直上にかけてである。

i．裏込と天井　裏込の観察は、外部の完成面でなく、内面に隠され実際にはみえない部分で行った（付図を参照）。裏込の材料は、A…ローム土・B…黒色土、C…粘土、D…山砂の4つの土に分類でき、石材はⅠ（40～50cm大の山石）とⅡ（7～20cm大の山石）、Ⅲ（小石）の3種類に大まかに分類できた。石材ⅡとⅢが主体的に使用され、A～Dの土が互層で充填されていた。石材Ⅰは3つの高さにそれぞれ連続して使用した状態が観察できた。標高134.9mの高さに下位の石列が置かれ、135.8mの底面レベルで中位の石列が置かれる。上位の石列の底面レベルは136.8mである。上・中・下位の石列は作業工程の節目と考えられる。すなわち、下位の石列が根石を据えた段階に並べられ、中位が2段目の壁石が設置される段階、上位が天井を架構される段階に施工されたものと推定される。特に奥壁には底面から1mの高さまで石材Ⅰが石垣状に積まれており、石室構築にあたって奥壁根石の設置が極めて重要であったことを物語っている。

天井については、すべて天井石が抜かれていたので、不明な部分が多い。しかし、裏込のセクションに天井被覆の粘土層が残されていた。東壁では、標高136.6～137mの高さに厚さ30cm、西

壁で標高136.7～137.2mの高さに厚さ30cm、奥壁で標高136.8～137.2mの高さに厚さ30cmで、水平に、しかも均一の厚さで認められた。使用された粘土は、IIr-IIPの下層に良くみられる濃茶色の粘土層である。粘土はシール材として雨水の侵入を防ぐために、カマボコ状に厚く盛られていたため、粘土層よりさらに高い標高136.8～137.2mあたり天井石が架構され、盛り上がった状態に粘土被覆がなされたものと推定される。

なお、天井と閉塞の両方に同一の粘土を使用しているため、天井に用いた粘土と閉塞に用いた粘土が入り口で重なっていたが、区別がつかなかった。

j．副葬品　玄室南側の玉石直上からFig.24の直刀1、飾り弓金具1、鉄鏃1が出土した。このほか、大刀破片や飾り弓金具、刀子、ガラス製小玉が破壊された石に混じった状態で出土した。その他は下段平坦面に掻き出された土の中から、鍔、鞘口金具、須恵器提瓶が見つかり、細かな遺物は土の水洗選別により多数発見された。

5　出土遺物

1）円筒埴輪（Fig.24・25、PL.13）

a．普通円筒埴輪　今回の調査で出土した円筒埴輪の総重量は300.9kgを計り、80～90本の円筒埴輪が樹立されていたものと推定された。紙面の都合上もあり接合の完了したものから9個体を実測したが、復原可能な埴輪は30数個体を数える。それらも含めて普通円筒埴輪の概要を述べて行きたい。

普通円筒埴輪はすべて2条突帯3段構成で、器高平均値32.9cm、最低値30.0cm、最高値39.4cmである。すべての資料において最下段の占める割合が極めて高く、それに呼応するのか口縁部の割合は異常に低いものである。第2段の長さは比較的長めのものと、最上段の値とほぼ同じもの

Tab.6　調査区の出土遺物重量

平成7年度調査

調査区名	円筒埴輪	形象埴輪	須恵器	土師器	縄文土器	石　器
石　室	4.8	0.9	－	－	－	
石室前面部	16.4	3.6	1.3	0.9	0.1	1.2
1Aトレンチ	32.0	2.3			0.2	1.3
1Bトレンチ	6.4	－	－	－	0.1	0.9
3トレンチ	5.5	－	－	－	0.1	－
4Aトレンチ	26.7	6.1	－	0.3	0.2	
4Bトレンチ	23.7	2.4	－	0.4	0.1	－
5トレンチ	1.8	0.7		0.1		
6トレンチ	0.7	－	－	－	0.5	0.5
7トレンチ	0.6	0.3	－	0.5	0.1	－
8トレンチ	－	－			－	
計	116.1	16.3	1.3	2.2	1.4	3.9

平成8年度　（単位 kg）

調査区名	円筒埴輪	形象埴輪	須恵器	土師器	縄文土器	石　器
1　区	33.5	7.8	1.2	0.2	0.5	1.2
2　区	0.8	0.2	－	－		
3　区　N	74.5	10.2	－	－	0.1	1.0
3　区　S	77.1	13.9	0.3	0.9	0.5	3.2
4　区　N	4.9	0.1	－	－	0.1	－
4　区　S	2.0		－	－	－	－
5　区	－	－	－	－		
計	182.8	32.2	1.5	1.1	1.2	5.4

平成7・8年度合計

調査区名	円筒埴輪	形象埴輪	須恵器	土師器	縄文土器	石　器
合　計	300.9	48.5	2.8	3.3	2.6	9.2

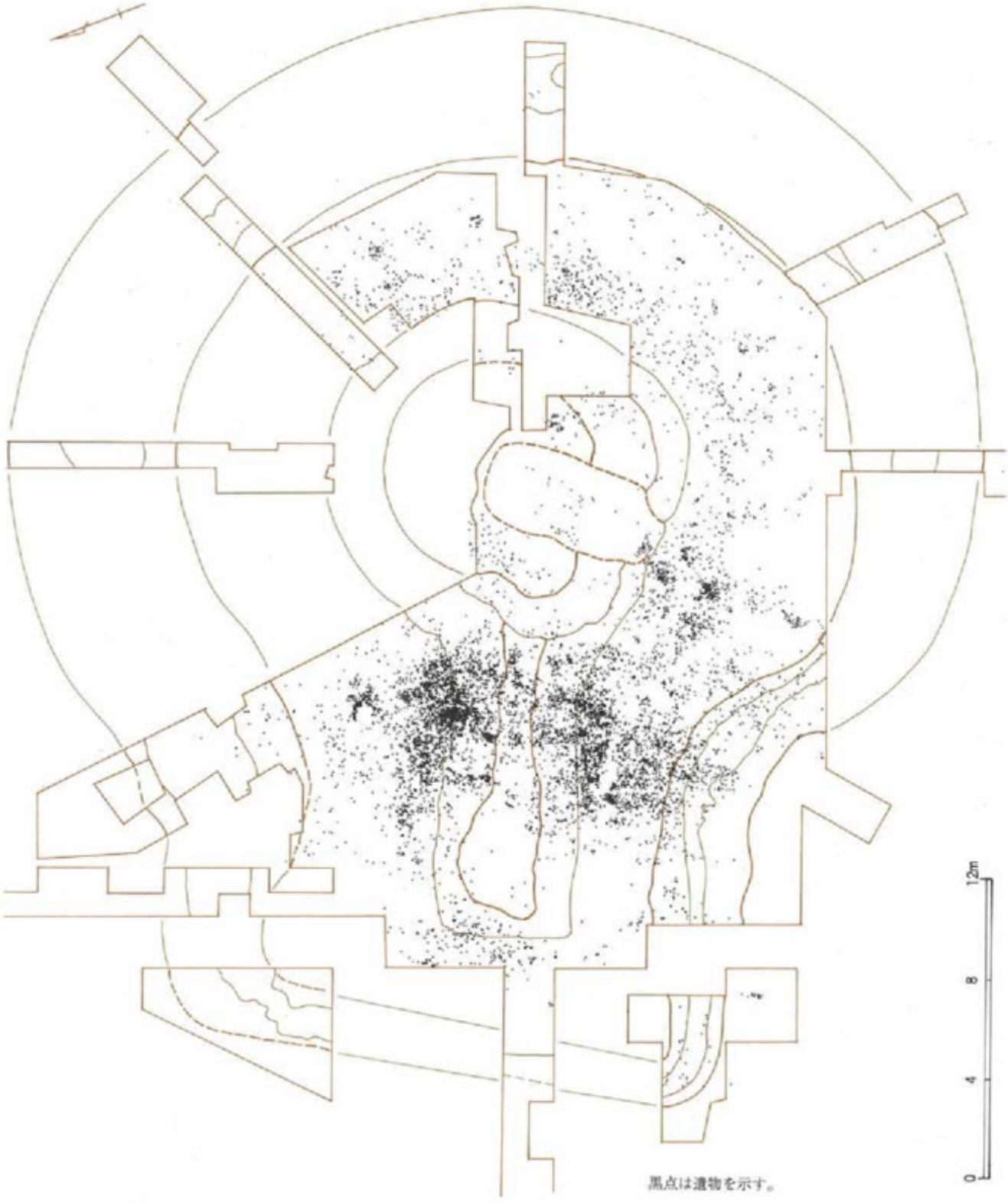


Fig.15　出土遺物分布図

とに大別でき、その長さは同様な値を示すものによってグルーピングが可能な状態である。透孔はすべて円形に統一され、小ぶりなものが多い。

次に製作工程の復原と諸要素の抽出を行っていく。まず幅10cm程度の粘土板を丸め基部を成形する。次に粘土紐の巻き上げを一部でハケを併用して一気に行うが、内面にハケ目施文具の当たりのあるものとそうでないものとが存在している。そして外面に縦位のハケによって調整を行うが、これには下から上へ1回の調整によるものと、最下段中位を境に2段階の調整によるものの二者が認められる。内面には上半部に限って縦・斜位のハケによる二次的な調整を行うが、これを欠くものもあるのですべてにおいて行われた手法ではない。この後に突帯の貼付を行うが、複数の個体においてその間隔が全く同一のものが認められることから、突帯の割り付けにあたっては何らかのスケールが用いられていたことが推定される。突帯は概してシャープさを欠いた低いもので、ナデもあまいなものが目立つ。最後に透孔を切り取るが、すべて径5cm前後で統一されており、2段目の間隔の広さとの間に関連性を見いだすことは難しい。

なお、大半の個体においてはヘラによる線刻を認めることができ、現時点までにその文様意匠から6種類を確認している（Fig.29参照）。

b．朝顔形円筒埴輪（1017）　朝顔形埴輪でほぼ完形に復原することのできたものは1個体のみである。10個体程度を確認しているが、さらに上回る個体数となろう。胴部に2条、頸部に1条、花状部に1条の都合4条の突帯を有し、プロポーション的には肩部の形状が、比較的張るものとあまり張らないものに2大別される。肩部以下の製作工程は普通円筒と同様であるが、肩部から花状部にかけては2～3段階の乾燥単位をおいている点で異なっている。

2）形象埴輪（Fig.17～22、PL.14・15）

分類しえた形象埴輪として、人物・馬・家・盾・靫・鞆・鞆・大刀の8種類26個体があげられる。今回掲載した形象埴輪は、ある程度形状の把握できた個体を中心に図示したが、接合作業を進めていけば、さらに図化できる資料が増加する。すべての破片観察を踏まえ器種ごとに概要にふれていく。

a．人物埴輪（001）　人物は同一部位（左腕部）で個体識別を行い、その結果人物A～Gの7個体の存在を推定することができた。他に頭部に弁帽の表現をするものを盾持人物埴輪と判断し人物Hを設定することが可能ならば、最低8個体の存在を指摘することができよう。内訳を示すと男子立像2・女子半身像（巫女）1・男子半身像（農夫）1・盾持人物1・不明3となる。しかし8個体中である程度全体の形状が把握できたものは3個体に過ぎない。

人物A（001）とした個体は全身像である。正装した男子を表現しているようである。人物B（105）は上衣裾部を中心に依存するものであるが、袴上部の膨らむ部分に白色顔料を斑点状に塗布しており、袴の材質を示すものなのか或いは単なる図柄なのか検討を要するものである。人物C（009）は顔面部・基台部を欠損した半身像である。『く』の字状の美豆良を結い、ミット状の手を胸部に添え、腰部には鎌を装着している。農夫像と思われ、近接する内堀M－1号墳の出土

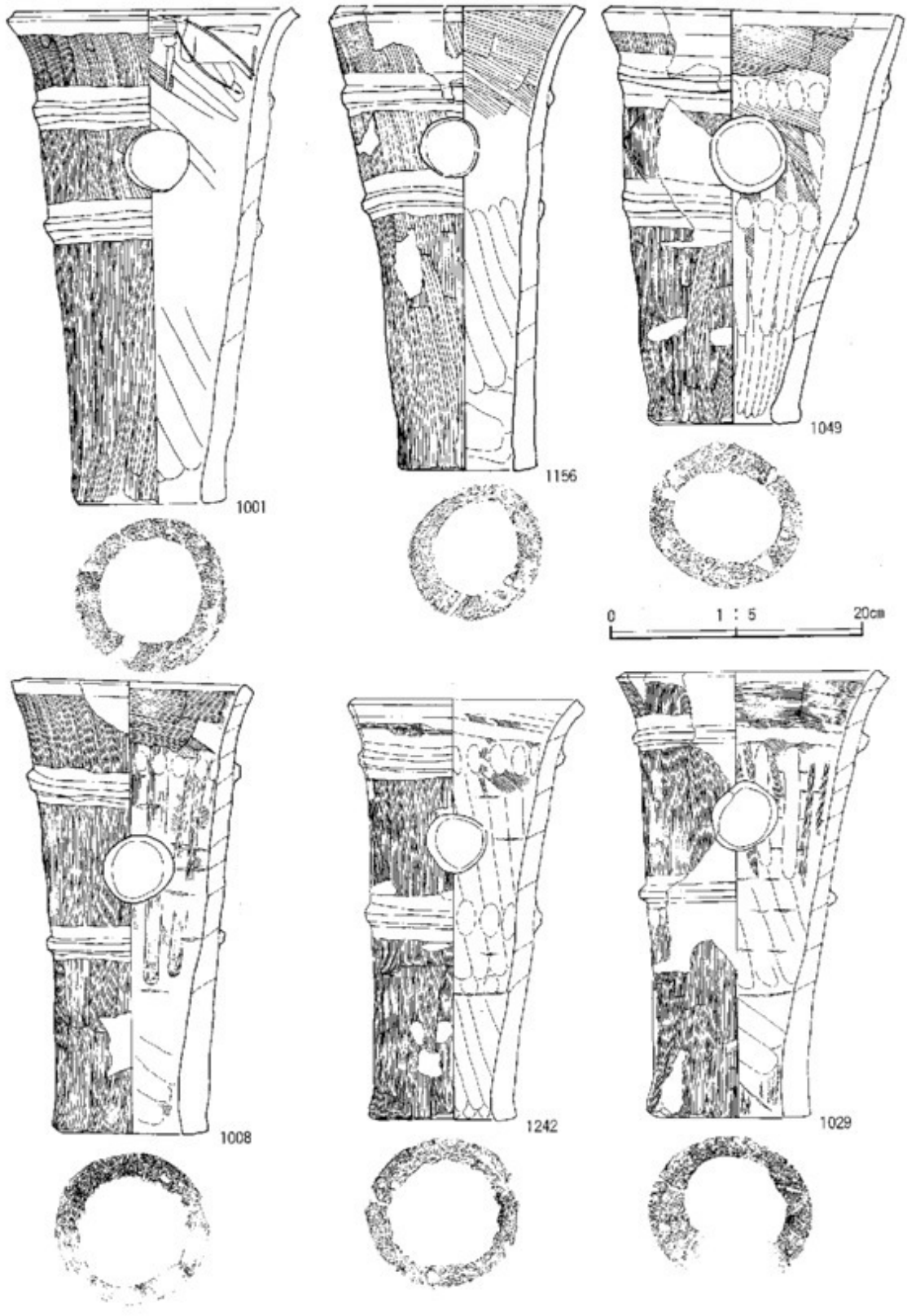


Fig.16　円筒埴輪実測図（1）

例に酷似する。人物D（005）は頭部・基台部を欠損した半身像である。ミット状の手を腰部に添えており、性別は不明である。

b．馬形埴輪（026・021）　馬形埴輪は2個体を識別することができた。馬B（021）の馬装は特徴的なもので、前輪と後輪の間に粘土紐によって格子状の造作がなされる。使役の馬とされる玉村町オトカ塚古墳出土例に類似するものの馬B（026）には通常の鞍が表現されており、同様な性格を有するものなのかは不明である。

c．家形埴輪　家形埴輪は1個体を確認しているが、遺存状態が良好でないため数点の破片資料をもとに推定したものである。基部は楕円形を呈し、四隅にコーナー部分をもたないタイプである。戸口構造は不明であるが、裾廻りには低位置の突帯を貼付し、壁体上部には円形の透孔を穿つ。屋根部の形態は入母屋造りで、上屋根部には鋸歯文を主体とする幾何学的な文様を線刻している。東京国立博物館で所蔵する赤堀町今井出土品に類似するものであろう。

d．盾形埴輪（002・032）　やや大振りのものを盾B（032）とした。盾はA（002）・B（032）ともに類似した形状をであると推定され、上半部の両端に一対の小突起を持つものである。盾正面に線刻された文様は、遺存状態の良いA（002）では梯子状文様と鋸歯文の組み合わせを基調にするものであり、遺存状態の不良なB（032）も文様意匠においてそれに準ずるものと推定される。

e．翳形埴輪（040・067・042）　翳形埴輪は3個体を確認している。翳A（040）とB（067）・C（042）は翳部正面の装飾において異なるが、観察される成型方法は共通する。翳B（067）は基台部と翳部で調整に用いられた原体が異なり、製作工程を復原する上で看過することのできない資料となりうる。翳A（040）の翳部に接する基台部の突帯は、2条の接近して貼付されるもので特徴的である。

f．鞆形埴輪（063・141）　鞆形埴輪は最低2個体を確認している。鞆A（063）・B（141）は鞆部の形状、基台部の突帯の貼付方法において相違点を見いだせるが、鞆部上部に焼成前に小孔を穿つという点で共通している。鞆B（141）に見られるような、基台部に2条の接近して貼付する突帯は器材埴輪の基台部において散見されるもので、その分布は赤城山南麓に集中するようであるが、埼玉県行田市酒巻15号墳（註1）においても確認することができる。

g．靫形埴輪（034・057、PL.13）　靫形埴輪は同一部分での判断で最低5個体を分類することができたが、胎土・調整工具からは6～7個体の存在が推定される。鰭部の接合方法は靫A（034）・B（057）に見られるような、円筒部に粘土板を直接接合するもの（Ⅰ類）と、靫B（057）に見られるような円筒部を長方形に切り取った後に、粘土板を差し込むもの（Ⅱ類・PL.13参照）の2種類が認められる。全体における割合としてはⅠ類が主流を占めている。なおⅡ類とした技法のものは藤岡市本郷埴輪窯址の製品で特徴的に見られるものとされるが、同様の技法によるものは酒巻15号墳においても確認できる。胎土の特徴も本郷のそれと異なるようなので、Ⅱ類とした技法をもって直ちに本郷埴輪窯址からの供給とするのは危険であろう。なお全体のプロポーショ

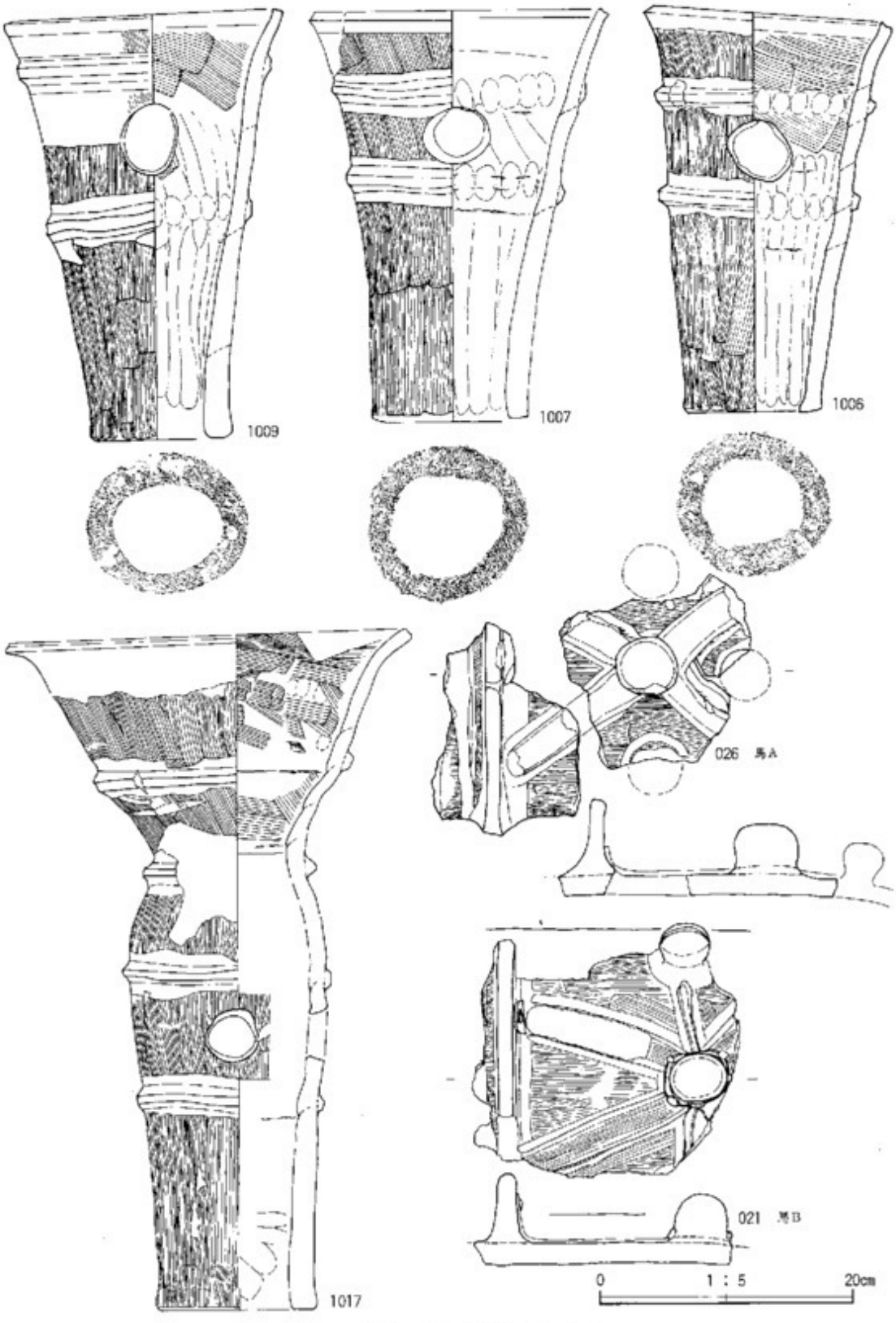


Fig.17　円筒・形象埴輪実測図（2）

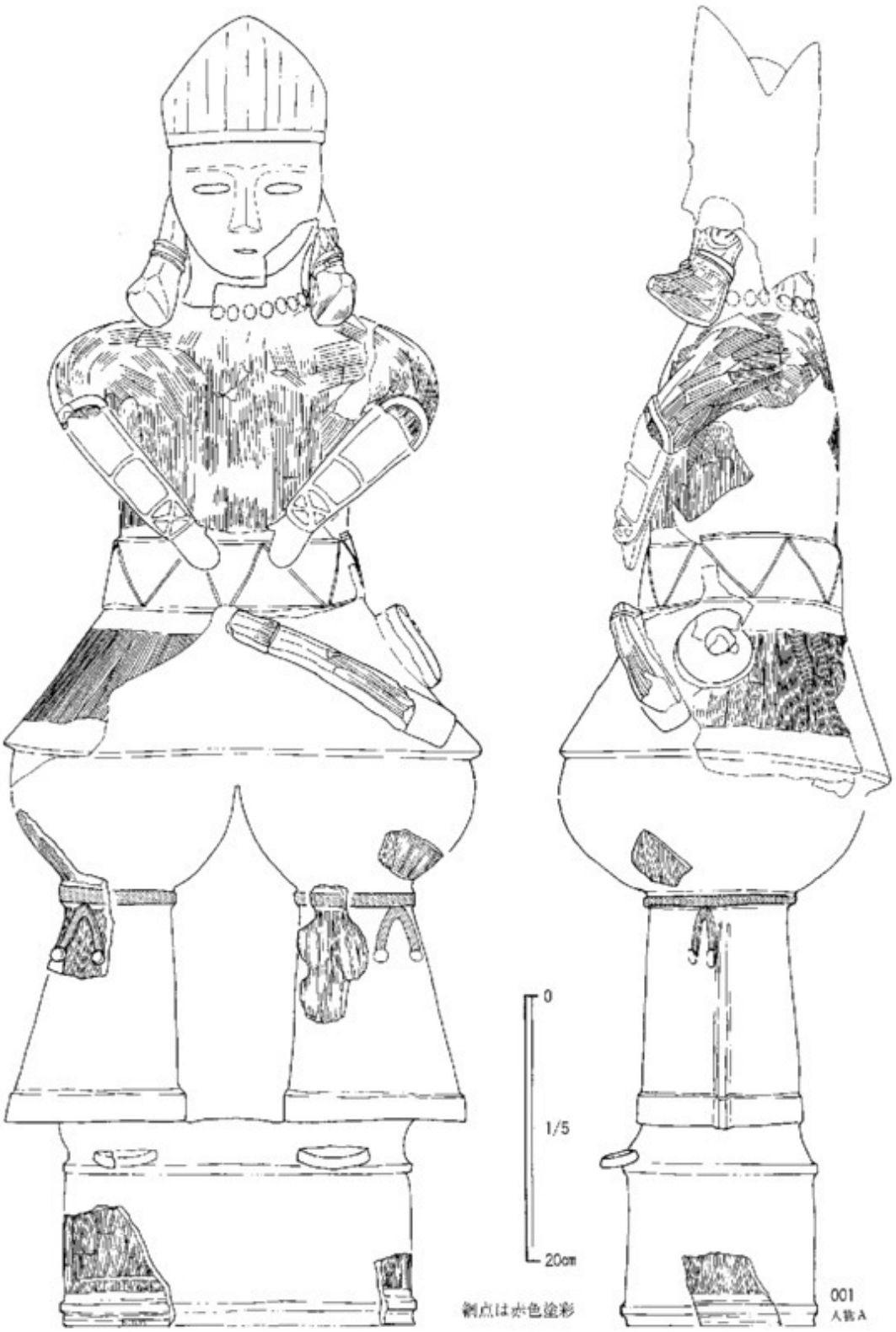


Fig.18　形象埴輪実測図（3）

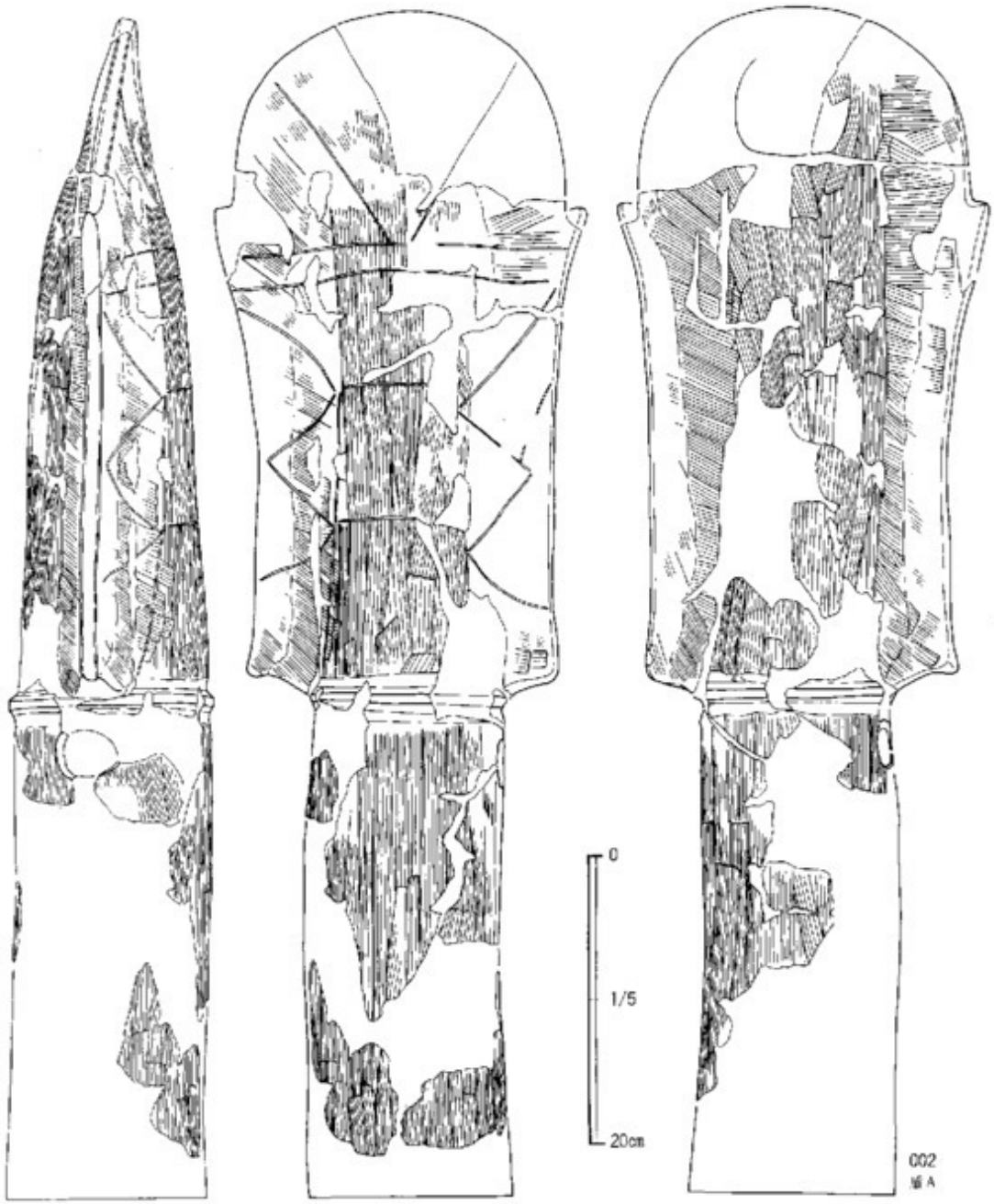


Fig.19　形象埴輪実測図（4）

ンや鍔部正面に線刻される文様は、酒巻15号墳も含め北関東における6世紀後半代の鍔形埴輪に普遍的なものである。

h．大刀形埴輪（046・047・045）　大刀形埴輪は4個体を確認し、すべて玉纏大刀を表現するものである。柄頭端部に相当する上端部の処理方法には、矢視を省略した形態のもの（Ⅰ類・Dが相当）と、矩形粘土板によって閉塞した後に上部から小孔を穿つもの（Ⅱ類・A（047）、B（046）、C（045）が相当）の2種類が存在する。Ⅱ類としたものは鍔Ⅱ類同様、酒巻15号墳でも確認さ

Fig.20　形象埴輪実測図（5）

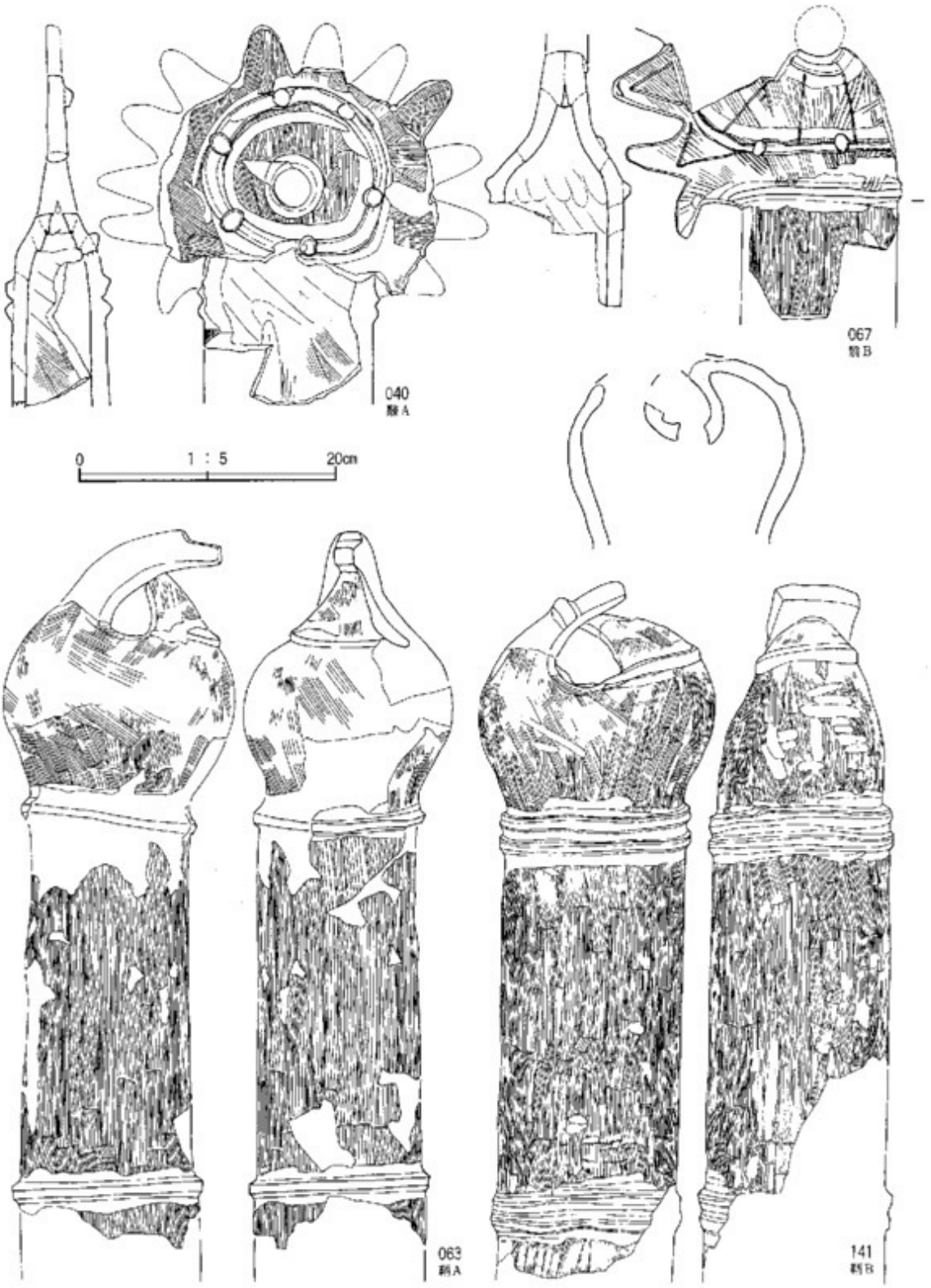


Fig.21　形象埴輪実測図（6）

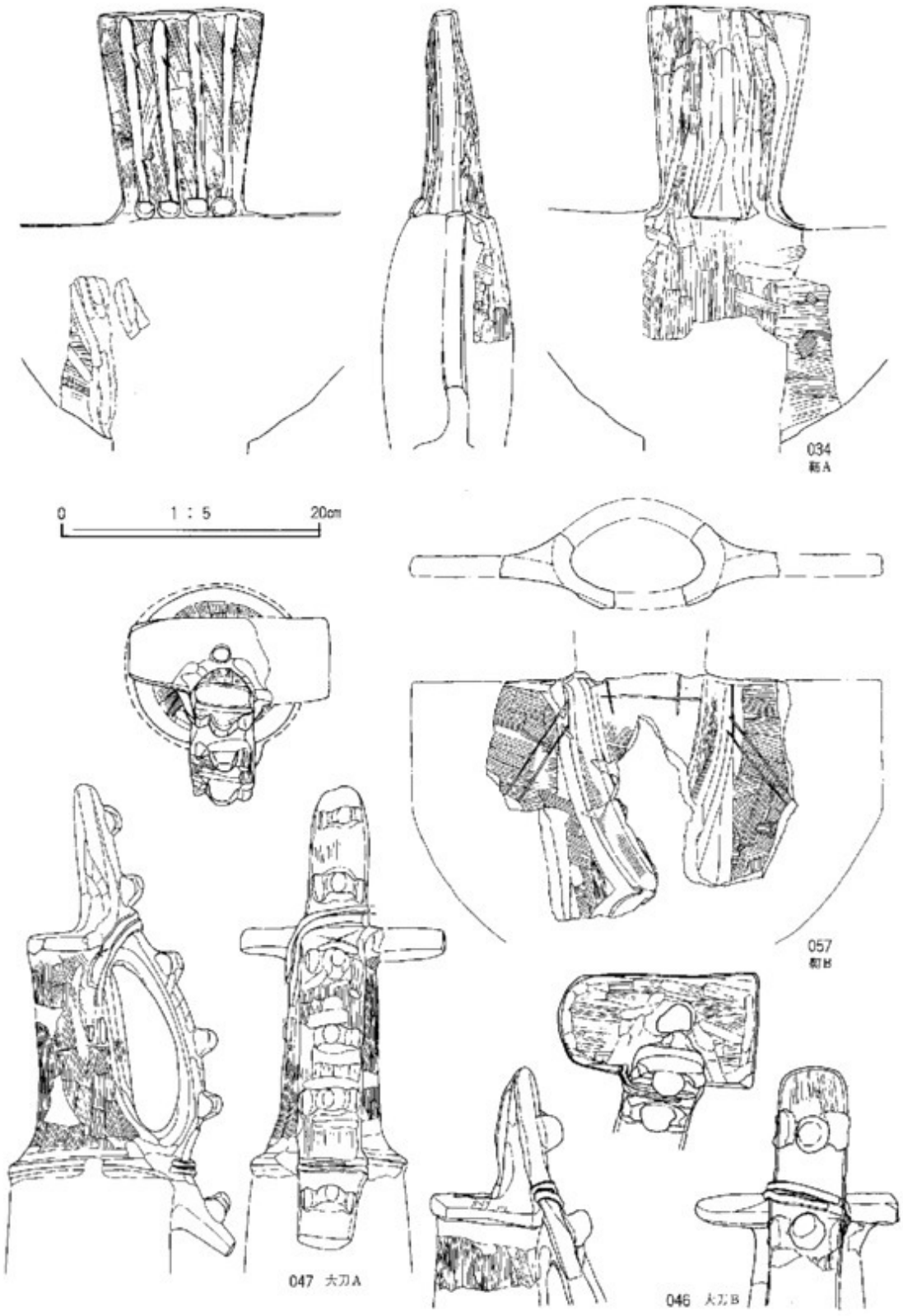


Fig.22　形象埴輪実測図（7）

れる。大刀部に接する基台部の突帯は、脚A（040）にも見られる特徴的なものである。

i．特殊な形象埴輪（PL.13）　馬形埴輪の基台部と思われるものであるが、透孔を切り取った直後に別の粘土を補填してそれを閉塞・調整し、別の位置に透孔を穿ち直しているものが確認された。透孔にはその穿孔位置に規制が存在していることを示唆している。

3）石室前面部出土の土器（Fig.23、PL.16）

石室前面部の右側からは土師器杯8点（2002～2008・2010）、須恵器提瓶1点（2001）が集中して出土している。一括資料として扱いえるもので、完形もしくは完形に近い状態で出土したものが少ない点等、故意に破砕された後に廃棄されたものであった可能性を有する。土師器杯は有段口縁杯を含む所謂模倣杯で、面取りのなされないシャープさを欠いた口唇部をもち、口縁部が外傾するものである。これらの特徴から土師器杯は鬼高Ⅱ期の特徴を持ち合わせているということが言え、6世紀の第4四半期に位置付けることができる。

2001の須恵器提瓶は器表面に著しい風化が進行しており、2次焼成の可能性もある。在地産と考えられ、大沼正行氏の胎土観察によれば金山丘陵を除く東毛地域の特徴を持ちあわせる。TK－43並行期に位置付けることが可能で、土師器杯との間に年代的な矛盾は生じない。

4）石室副葬品（Fig.23・24、PL15・16）

副葬品の中で原位置を保っていたと判断されるものは直刀1（3044）・鉄鏃1（3028）・飾り弓金具1（3025）のみで、その大半は石室前面付近へ盗掘時に掻き出された土砂の中から検出されている。

①装身具（3001～3017）　今回の調査で出土した装身具は、ガラス製小玉15・耳環3である。以下にそれらの詳細を述べて行く。

a．ガラス製青色小玉（3001～3003）　青色のものは3点あり、透明度はあまり高くない。形状は球形であるが造りは雑で、ゆがんだもの（3003）もある。大きさは長径4.91～5.44㎜、厚さ3.13～3.65㎜となり、長径・厚さの双方において顕著な個体差は認められない。

b．ガラス製緑色小玉（3004～3009）　緑色のものは6点あり、透明度は低い。形状は不明瞭な稜によって画される平坦面を上下にもった臼玉状をなし、造りは雑なものである。大きさは長径4.65～4.95㎜、厚さ3.17～4.25㎜となり、厚さのそれにやや個体差が認められる。

c．ガラス製黄色小玉（3010～3014）　黄色のものは6点あり、透明度は低いが鮮やかなものが多い。形状は球形で、造りは比較的丁寧なものである。大きさは長径4.98～5.01㎜、厚さ3.19～3.93㎜となり厚さのそれにやや個体差を認めることができる。発色剤としては他例からの類推で少量のFeを用いていると考えられる。

ガラス製小玉の多色化は後期に入って促進されるが、特に黄色のガラス小玉はその生産量の少なさから貴重品で、首長層を主体に供給されるものである。

d．耳環（3015～3017）　すべて中実品で断面楕円形の銅製の棒を金薄板で包み、一方が開放された環状にまるめ、製作されたものである。3015と3016は対をなすもので、長径は互いに2.5㎝

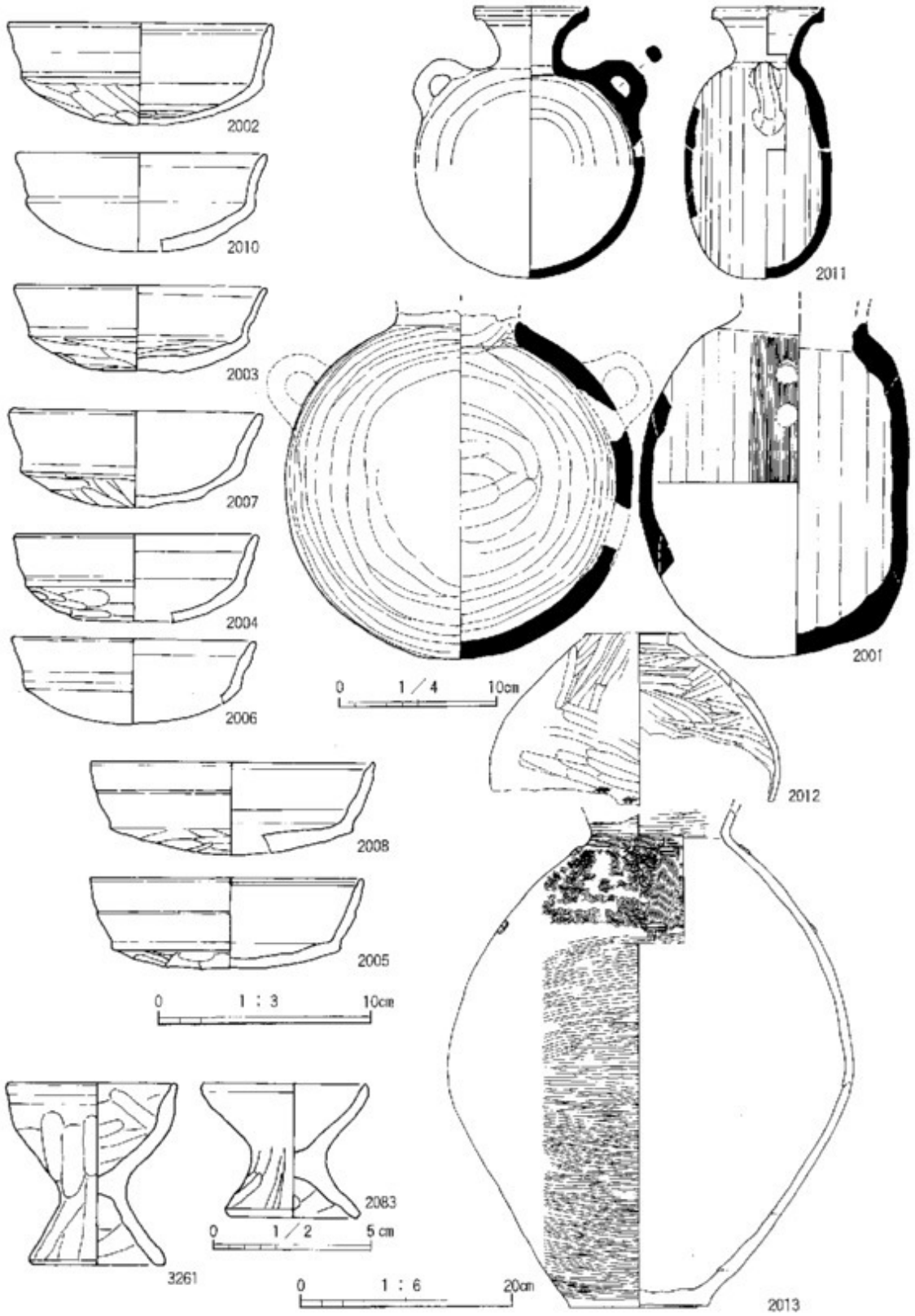


Fig.23 土器実測図（8）

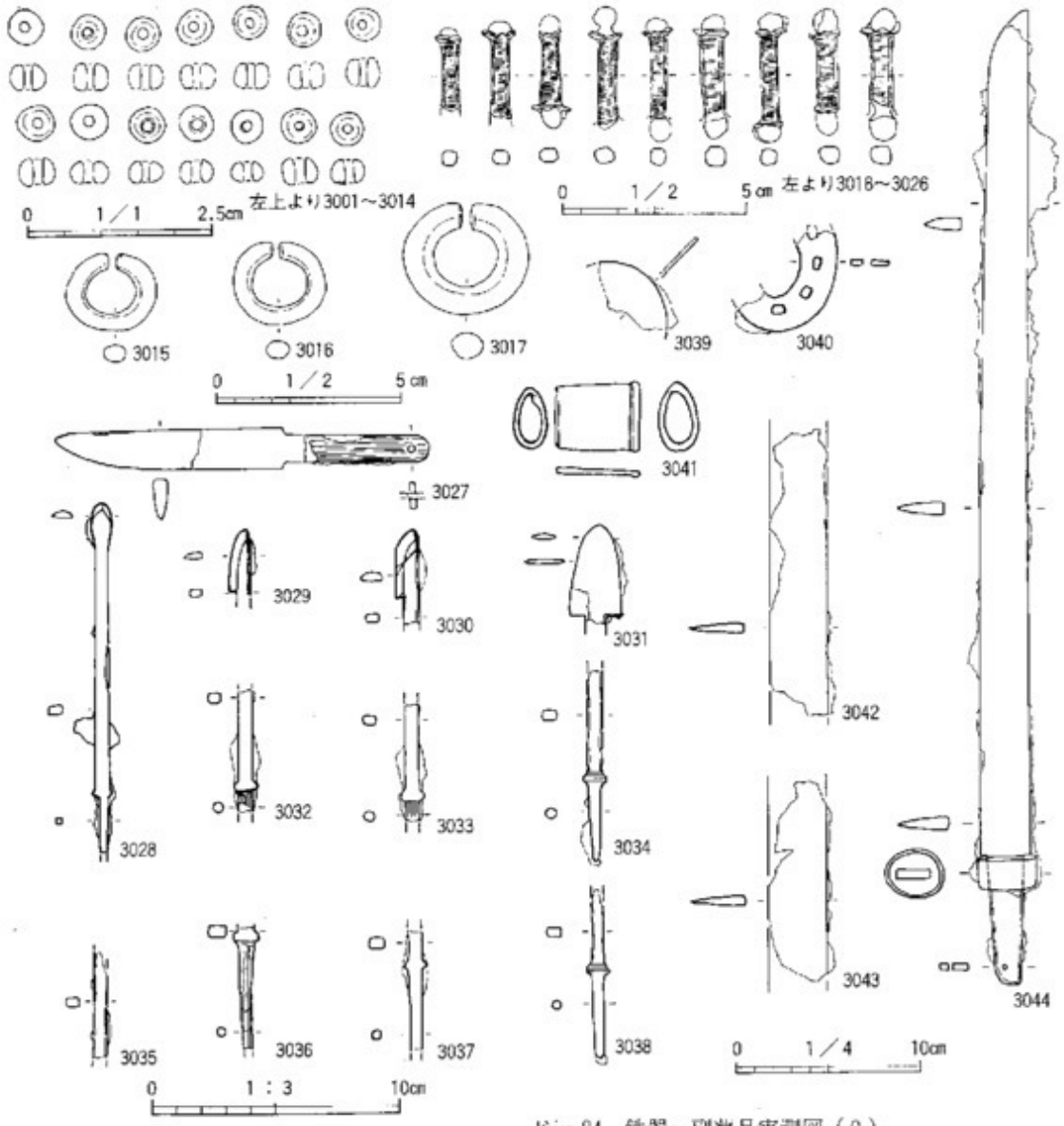


Fig.24 鉄器・副葬品実測図（9）

程度、重量は10ｇ程度である。3017は対にはならないが、大きさは長径3.3cm・32.4ｇで大形品である。仮に１人につき１対の装着と考えるならば、２人以上の埋葬が行われたことを傍証することになる。

②武器・武具（3018～3038・3040～3044）　武器・武具として分類できたものは、飾り弓金具９・刀子１・鉄鏃10以上・直刀２・刀装具２（鍔・鞘口金具）である。鉄器は全体的に遺存状態が芳しくないため、遺存状態が良好なものを図示した。

ａ．飾り弓金具（3018～3026）　弓本体にリベット状に打ち込まれた鉄製金具で、すべて木目に直角に打ち込まれる。金具の化状部間の長さは、計測可能なもので2.2cm（±0.5cm）の１群と1.9cm（±0.5cm）の１群が存在し、２張の弓の副葬が想定されよう。弓１張に対し金具数５～６点

を平均的な数とするなら、10点の出土はそれを裏付ける結果となろう。

b．刀子（3027）　錆化の著しい鉄製で、直接接合しない2点を同一個体として扱い図上で、全長15.0cm、刃長を9.3cm、茎長5.7cmとして復原した。刃部は先端部で緩やかなふくらみをもって切先に移行しており、刃部最大幅1.7cm、棟厚0.6cmである。茎は現状で最大幅1.1cm、最大茎厚は刃部同様0.6cmで、刃部から遠ざかるにつれてその厚みを減じて行く。欠損しているものの目釘を有しており、茎全面に平行する木質を良く残している。

c．鉄鏃（3028～3038）　概して遺存状態は悪く、図示しえなかったものも含めるとその数は10本程度であったと推定される。鏃身部の形態には鏟・片刃・長三角の少なくとも3形式の鏃が存在している。唯一ほぼ完形を保っている3028は端刃の棘篦被片丸造鏟箭式のもので、残存長14.1cmを計り、鏃身部長1.6cm、篦被長10.0cmであり、篦被・茎部は断面方形である。他はいずれも長頸鏃で、確認できるものはすべて棘篦被を有している。

d．刀装具（3040・3041）　3040は鉄製の直刀鍔で、50%程度の残存率ではあるが8窓のものであろう。倒卵形をなし最大径は内側で推定3.5cm、外側で7.5cmを計る。

3041は鉄製の鞘口金具であると考えられ、完形品である。一端を折り返した鉄板を倒卵形に丸めることによって製作されている。鞘口部は先の折り返しによって結果的に縁取りされる形となり、長さ4.5cm、鞘口部の最大径は外側で3.7cm、内側では2.9cmを計る。内面には木質が良く残り、外面の一部に布圧痕を残す。

e．直刀（3042～3044）　3042・3043は刃部の破片で、4点のうち残りの良い2点を図示した。同一個体であると考えられ、刃部幅3.1cm、棟厚0.6cmを計る。

3044は原位置を保って出土した両関造りの小ぶりな直刀で、倒卵形の柄金具を装着している。切先の一部を欠損する以外ほぼ完形である。全長53.0cmと推定され、刃部長46.0cm、刃部幅は関部が2.7cmで切先へ行くに従ってその幅を減じている。棟厚は関部で0.8cmを計る。茎長は7.0cmで基部の厚さは0.5cmを計り、基部から離れるに従って僅かにその厚みを減じてゆく。不整形な端部には目釘孔を有し、茎部全面にわたって平行する木質を良く残している。

f．不明鉄製品（3039）　円弧を描く縁部をもつ鉄製品で、その厚さは0.2cmで一定している。直刀の鍔ではなさそうで、強いて言うなら馬具（鏡板）の可能性がある。

g．須恵器提瓶（2011）　石室内から運ばれた攪乱土より鉄製品の破片とともに出土したものである。比較的精緻な作りで、大江正行氏によれば胎土の特徴から在地産（内毛）のものである。

Ⅵ　成果と問題点

3次におよぶ調査の結果、兆域長43.9mと小規模ながらも2段築成の前方後円墳であることが判明した。石室は明治時代頃に石を抜き取られたため壊滅的な破壊を受けていたが、袖無型横穴式石室であることも判明した。石室前面は幸いにも破壊の難を逃れたため、良好な閉塞状態が観察された。また、広い下段平坦面には円筒埴輪列が確認され、墳頂部の2カ所に形象埴輪群が設置されていた。また、出土遺物は墓前祭祀に使用された仕器類、石室外に掻きだされた装身具・武器類が認められた。

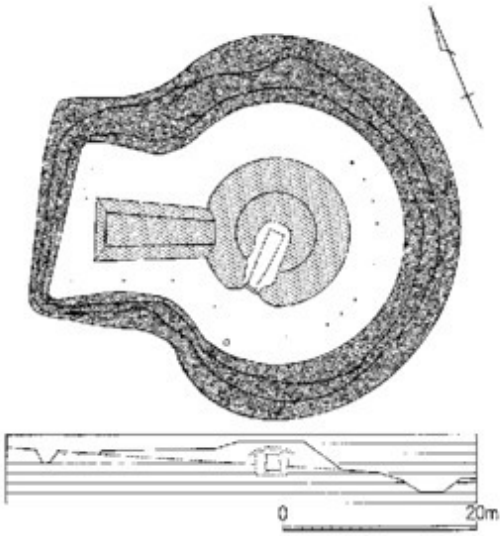


Fig.25　墳丘復原図

整理作業に着手した状態であるため、文化財保存計画協会に委託中の小二子古墳整備基本設計資料作成に足る内容の提示に努めることを第一義とし、総合的な分析・検討は、現在進行中の作業が完了した時点に委ねたい。ひとまず中間的な報告の意味合いで成果と課題をまとめておきたい。

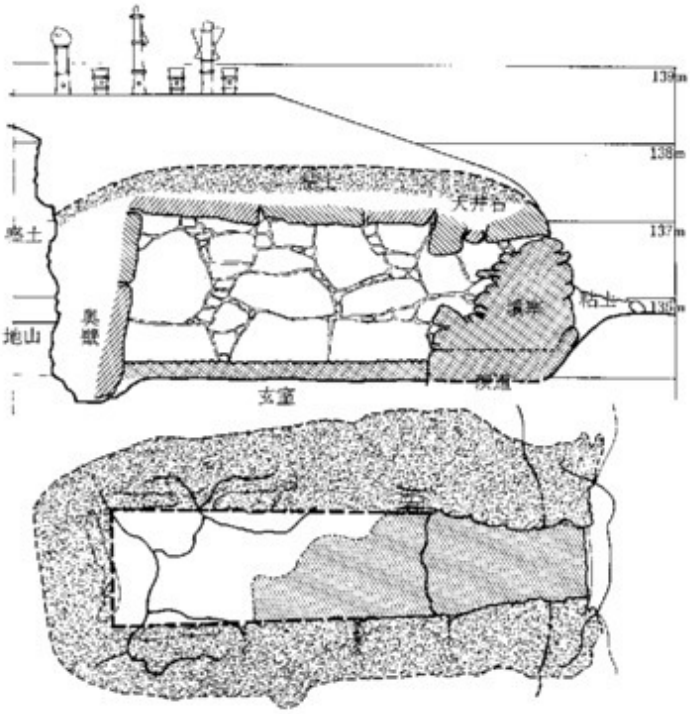


Fig.26　石室復原図

周堀に囲まれた墳丘は、主軸を西東（N49°W）に持ち、下段平坦面に円筒埴輪列、墳頂部の2カ所に形象埴輪群を設置する。円筒埴輪の数は80～90本と推定される。

古墳の兆域は、全長43.9m、幅39.4mであり、面積1,225㎡を計る。下段墳丘は地山を掘削して造成されており、全長38m、幅30.4m、高さ5.4mである。上段墳丘は全長25.0m、幅14.5mと小規模となる。

墳丘構造は、下段は地山削り出しであり、一部に盛土がみられ、上段は盛土によって構成される。

墳頂部の形象埴輪群は鞍部に人

物を中心にした配列、後円部に器財群を中心にした配列で構成される。また、今回の調査によって古墳の兆域が一部国史跡指定範囲を超えることが判明した。

a．立地　西側の標高150.5mの流れ山から南東に延びる斜面上に立地する。小二子古墳が築造された場所は、流れ山の急斜面が緩やかな斜面に変換する地点と後二子古墳とに挟まれた限定された空間である。旧地形は西から東への斜面で、標高136.5～134.4mで高低差は2.1mを測る。

b．外縁部　旧地形を改変することなく古墳の兆域を造成していると考えられる。ただ、西から北側には明治時代に道路を通したため切り通しになっていたので、旧地形の観察が不十分であった。また、埴輪列等の特別な施設は検出されなかった。

c．周　堀　すべてのトレンチから周堀を検出したため、全周するものと思われる。山側の前方部は狭く浅いのに比べ後円部側は広く、深く掘削されている。それは上段墳丘の盛土の供給の問題なのか、地形からくる制約か、文化的な規制なのか、それらの複合体であるのか検討を要する。

d．墳　丘　小規模ながら2段築成された前方後円墳である。兆域の全長43.9m・幅39.4m・高さ5.4m・面積1,225㎡・主軸をN49°Wに持つ。下段墳丘の全長38mに比べ上段墳丘は全長25mと小さくなっている。言い換えれば広い平坦面を有する古墳である。また、平面形も大きく異なり、前方部の墳丘は、後円部に比較して低く作出される。後二子古墳も平坦面が広い古墳である。しかし、後二子古墳の場合は、平坦面全域に盛土が認められた。小二子古墳の場合、低い前方部、旧地形をそのまま生かした平坦面の作出、石室の半地下式構造など省力化を考えた工法である。かつて栃木県で取り沙汰された基壇面を墳丘長に含むか含めないかという議論を彷彿させるが、ここでは一応盛土が無い場合でも周堀で区画された範囲を墳丘として扱っておきたい。

また、石室にみられた種々の工法には、墳丘の省力化と矛盾する要素も内包している。

e．小二子古墳と類似する古墳　今回の調査によって判明した小二子古墳の墳形でいくつか気にかかった点があった。そこで県内で同時期の形態が類似する古墳を探索した結果、10例が集成できたのでFig.27に図示した（註2）。取り上げた古墳は、1…小二子古墳（墳丘長38m）、2…前橋市内堀M－1号墳（35m）、3…粕川村地蔵塚古墳（44m）、4…同村西原F－1号墳（30m）、5…同村月田二子塚古墳（45m）、6…同村鏡手塚古墳（44m）、7…赤堀町五目牛清水田遺跡1号墳（43m）、8…下佐野遺跡Ⅱ地区7区3号古墳（35m）、9…赤堀町片田古墳群赤堀59号墳（53m）、10…赤堀町峯岸山赤堀276号墳（24m）である。

この中で前方部上段墳丘の存在が調査で判明しているものは、1・3・6である。2・4・5の前方部上段墳丘は報告書をもとに図面操作で復原し、8は葺石の根石から復原した。分布図をみたところ、赤城南麓の前橋市東部、粕川村、赤堀町の粕川流域に集中することが判明し、地域色をもった古墳形態といえそうである。

また、この中で石室構造の判明しているものが5例あり、袖無型横穴式石室が主体的に4例存在し、片袖型横穴式石室1例で、両袖型横穴式石室はまったく使用していない点に特徴がある。

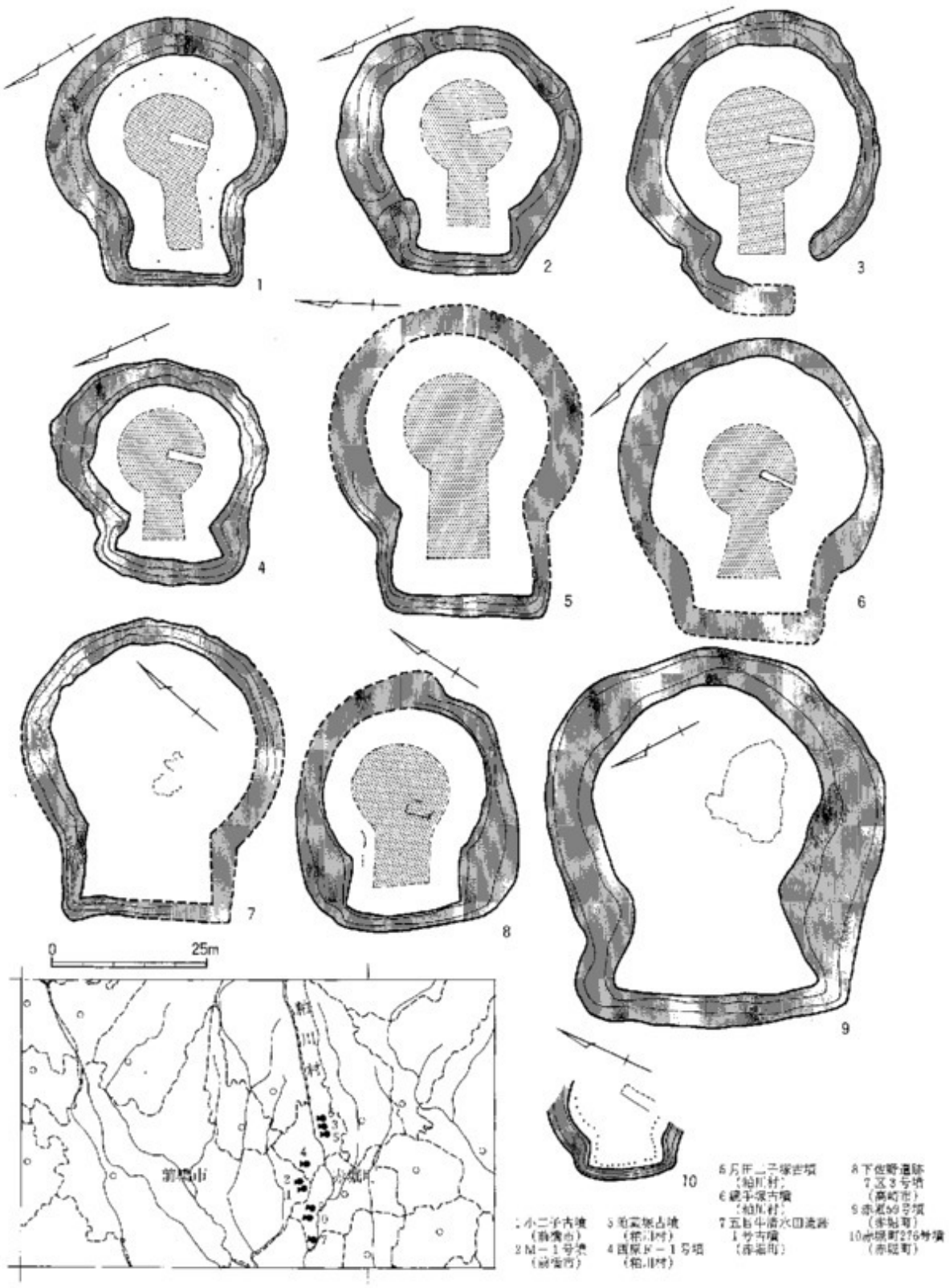


Fig.27　小二子古墳に類似する古墳

さらに石室開口方向も炭窯に転用された2を除けば4例とも西に指向性があることも指摘できる。

墳丘の立面形態においても、1・3・4・6の事例から、後円部が高く前方部が低いことがあげられる。すべての古墳において埴輪樹立が認められ、形象埴輪も確認されている。形象埴輪の樹立は、1～4の古墳は、人物群が鞍部、器財群が後円墳頂部と2群に分けて樹立されている。形象埴輪の設置にあたって、大型前方後円墳の場合は石室周辺に人物群を配列させるのに対し、鞍部に置かれる点で異なっている。

墳丘の規模を比較した場合、最小24m、最大53mであり、多くは30～40mの大きさにまとまりをみせていることから中規模の古墳で、上段墳丘形態から前方後円墳の一形態と考えられる。

以上、墳丘の形態や構造、石室の形態・構造、埴輪樹立といった3つの観点から共通性が認められた古墳が複数存在し、一定地域にまとまって分布することが指摘できる。この形態の古墳が一時期を画する古墳型式であることが想定でき、中規模の墳丘規模であることから同時期に存在する大型前方後円墳に次ぐ支配者層の前方後円墳形態とも受け取れる。

f．円筒埴輪　使用された普通円筒埴輪の数は80～90本、朝顔形円筒埴輪は10本前後と推定された。埴輪配列は下段平坦面と鞍部、後円墳頂部の3カ所に巡らされる。下段平坦面は、北側部分で円筒埴輪列を確認できなかった。そのため全周するか否かの検討を要するが、平均2.2m間隔で全周したことを仮定した上で40本配列され、墳頂部では縁辺部や鞍部に1～2m間隔で40本が配列されていたことが算定された。

内堀M－1号墳は近接して存在し、墳丘の規模・形態・埴輪組成・時期等で共通する。下段平坦面の円筒埴輪列は、配置や設置された間隔も類似している。内堀M－1号墳の報告によれば、円筒埴輪列は全周はせず、北側に配列されなかったことが考えられている。しかし、小二子古墳の埴輪出土量は、内堀M－1号墳とは比較にならないほど多いため、より多い埴輪配列が想定されるので、内堀M－1号墳の配列例を直接的に引用することはできない。今後の遺物接合作業と遺物分布図の分析を完了した時点で、再度、配列に関して検討を行って行きたい。

g．形象埴輪の配列　形象埴輪も遺存状態が良好ではなかったとは言え、今後分布図の読図作業が進むにつれて、その配列の全貌を明らかにすることが可能と確信している。ここでは個体別の出土状態を手掛かりに、現時点までにおける形象埴輪のデータの提示をしておきたい。

まず形象埴輪の出土状態を器種別にみてゆく。樹立位置を保つものとして鞍部で検出された3個体がある。3個体は鞍部縁辺に配列され、2列の円筒列の間に平行する形で配列されている。後円部寄りには139の不明形象基台部（人物か）、001の人物A基台部、140の不明形象基台部（人物か）となる。人物・馬の同一破片は、基本的には前方くびれ部寄りの上段墳丘斜面に集中分布がみられ、平成8年度調査地区の3区N・Sに分布する。馬も人物と同様な出土状態で3区を中心に出土している。

器財埴輪の出土位置は、後円部にほぼ限られ、平成8年度調査地区の1～3区に分布する。器種別の出土状態を見ると、家は1・2区、墳頂部、盾は2個体ともくびれ部、靫は墳頂部を中心

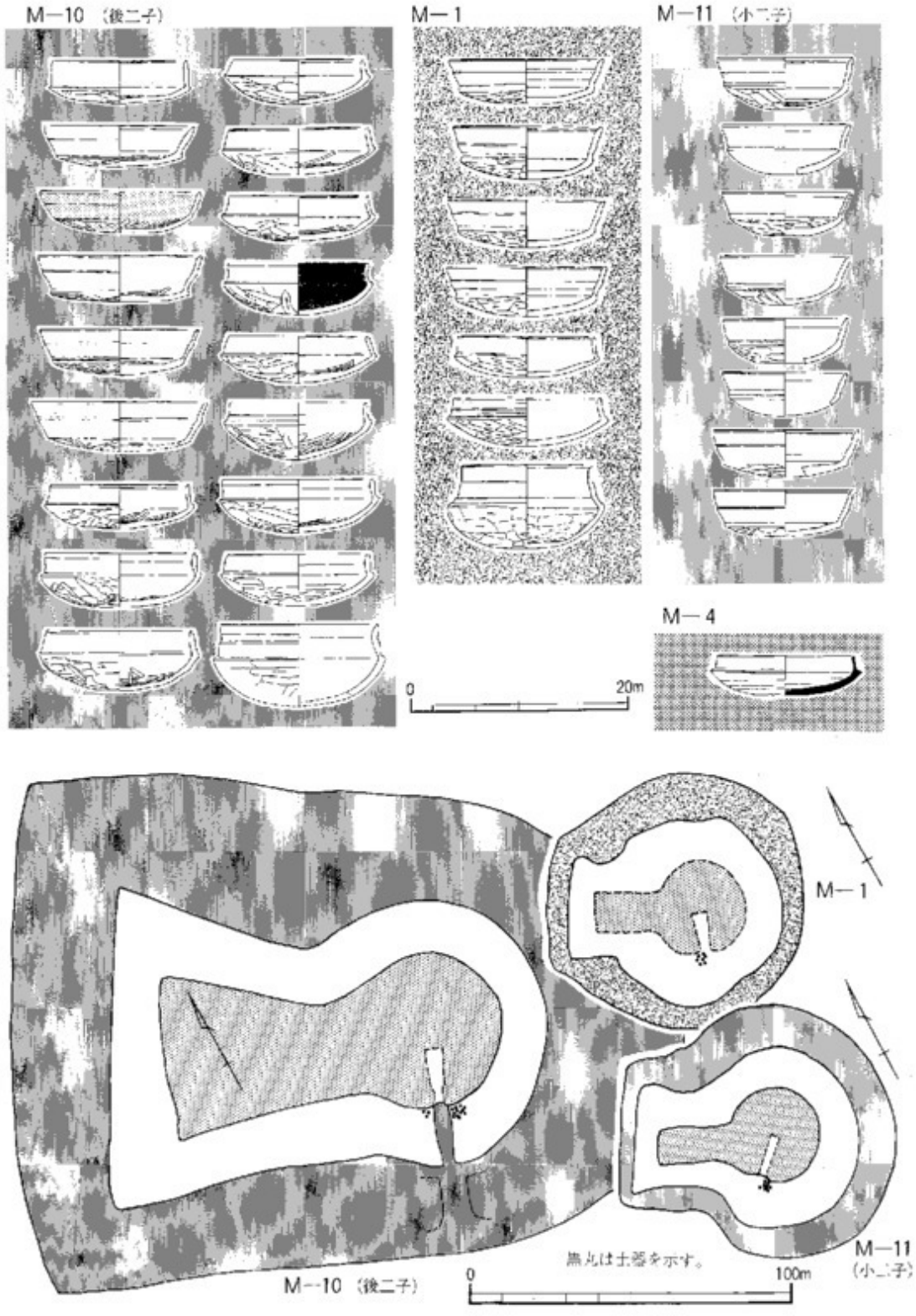


Fig.28　石室前面部出土の土器

に２区・ＺＴ、鞆はＺＴ・１区、鍔と大刀は１・３区で出土しており、これらはの中には広範囲に分布をみせている。

以上、本墳における形象埴輪配列の検証を行ってきたが、これらの出土状態から復原された配列位置は、後円部墳頂のＡ群（家・器財）と鞍部付近のＢ群（人物・馬）というように、都合２つのブロックに分かれるものと考えられる。これは綿貫観音山古墳等の、６世紀後半の大型前方後円墳で検証された埴輪配列形態との間に若干の相違点を生じるものである。

本墳に類似した埴輪配列を推定できる古墳として、筆者の管見にふれただけでも近接する内堀Ｍ－１号墳や西原Ｆ－１号墳、赤堀59号墳がある。それらの墳丘形態は本墳に類似する小型前方後円墳である。橋本博文氏によって、塚廻り１号墳等の６世紀前半代の帆立貝式古墳における、前段階の埴輪配列の影響が指摘された内堀Ｍ－１号墳では、盾持人が他の器財とともに独自のブロックを形成している。それがＢ群へ統合されてしまう本墳や、欠落してしまう西原Ｆ－１号墳など、埴輪組成や配列形態において若干の相違点を見いだすことができる。それらを変遷によるものとしてとらえた時、本墳における配列形態は内堀Ｍ－１号墳のそれに後続する段階に位置付けることができる。時期的に後出する段階であろう西原Ｆ－１号墳を考慮するなら、内堀Ｍ－１号墳⇨小二子古墳⇨西原Ｆ－１号墳というような形象埴輪配列の形態変遷を想定することも可能であろう。

いずれにせよ本墳で検証された形象埴輪の配列形態は、赤城山南麓に特徴的な小規模前方後円墳に多く採用された埴輪配列の一形態であると考えられる。それは帆立貝式古墳における埴輪配列の影響を強く受けて成立したものと考えられた。本墳において検証された埴輪配列は、小規模前方後円墳における埴輪配列を解明する上で、見過ごすことのできない事例であり、整理作業の進展を待って後日再検討を行いたい。

ｈ．石室前面部　石室の入り口の前面から土師器杯８個体と須恵器提瓶１個体が出土した。後二子古墳の調査でも石室前面部から土師器杯18個体と鉢、大甕が一括で出土している。さらに内堀Ｍ－１号墳からも、石室前面部より土師器杯７個体が一括出土している。後期の古墳で、石室前面から土師器の杯を主体にする土器組成が出土することは、隣接する３基の古墳以外に周辺地域では報告されていない。なお出土状態については、後二子古墳と小二子古墳では、ほとんど小破片の状態で出土しており、故意に破砕した可能性も残すが、Ｍ－１号墳ではほぼ完形に近い状態で検出されている。また小二子と後二子古墳では石室両側に焼土を確認している点は興味深い。

つぎに３基の古墳から出土した土師器杯の年代観について検討を加えたい。坂口　一氏のご教示によれば、後二子古墳出土の杯は、口唇面取りを行う大ぶりなものが主体となり、ＴＫ－10～ＭＴ－85型式に比定される。Ｍ－１号墳の杯は、後二子古墳のものに比べ、面取りの甘さと小型化が観察されるため、わずかに後出する段階のものと推定される。小二子古墳では後二子古墳・Ｍ－１号墳に類似するが外稜を有する有段口縁杯をわずかに残すものの、さらに小形化の進んだ外稜を有する口縁杯が主体となるため、さらに後出するものと考えられる。ＴＫ－43の須恵器を

共伴する時期といえる。これら3基の古墳では、石室前面で土師器杯を用いた祭祀を執り行うという点で共通し、土器の検討から後二子古墳→M－1号墳→小二子古墳の年代的な変遷が考えられる。

i．石　室　明治時代頃に石の採掘と盗掘を受けたため、主体部は破壊を受けていた。石室に残された情報から全長6m、奥壁幅1.8m、高さ1.8mのS45°Wに主軸を持つ袖無型横穴式石室であることが判明した。玄室部の壁石は根石の抜き取り痕から、東西とも3石で構成され、奥壁は1石で構成されることが解明できた。3石で構成される西壁石材は2石が残されていた。南の石から長さ1.2m、1.6m、北側には1.2m以上と推定される石が存在したことが推測される。西壁には、長さ1.3m前後の石が3個存在したことが推定される。したがって、小規模な石室であるが1mを超す大型石材を使用している点が指摘できる。

坂本和俊1979によれば、「群馬県内の袖無型横穴式石室を見た場合、両袖型横穴式石室に比べると南に開口するものが少なく、西向きに開口するものも少ないない」という指摘がなされている。小二子古墳の石室が西に開口することは、後二子古墳を避けたものと想定したが、袖無型石室の特徴と考えたい。周辺地域の古墳の袖無型横穴式石室の開口方向をみた場合、北から逆時計廻りに石室主軸の角度をみた場合、西原－1号墳が33°、赤堀町276号墳が7°、地蔵塚古墳が32°と西に振れ、片袖型石室である鏡手塚古墳も22°西に振れている。また、墳丘主軸から石室主軸

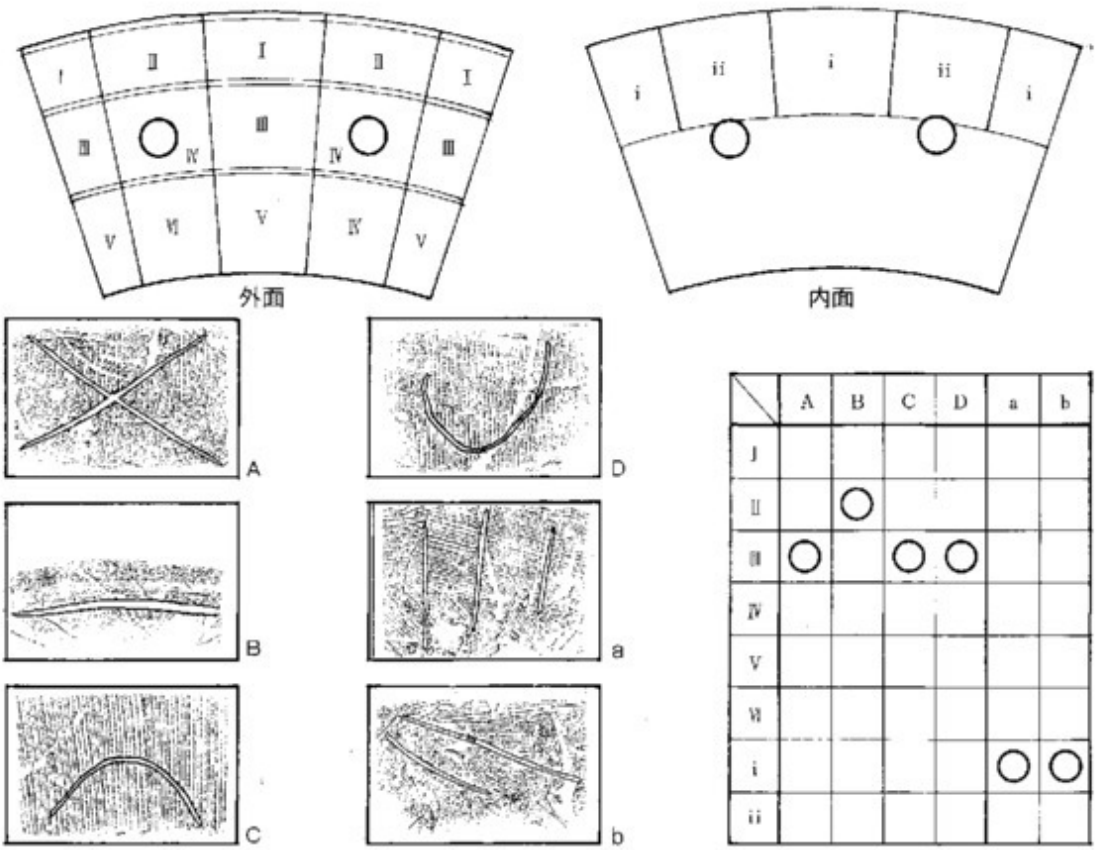


Fig.29　円筒埴輪線刻分類図

の角度を見た場合、小二子古墳でS－23°－W、西原－1号墳でS－15°－W、赤堀町276号墳でS－38°－W、五目牛清水田遺跡1号墳でS－40°－W、地蔵塚古墳でS－5°－Wといずれの場合も西に振れる事が指摘できる。小二子古墳は小型の前方後円墳であるが、石室石材に大型石材を用い、均一な玉石を厚く敷き、閉塞部には石積みの後に丁寧な粘土被覆がなされていた。大型石材を使用することや半地下式構造等を採用している点で後二子古墳と共通性をもち、県内で閉塞石積みの後に粘土被覆をした事例として薮塚本町街道橋古墳があげられる。また、半地下式の構造をとるものとして荒砥村245号墳があげられる。（註3）

j．出土遺物　墳丘から円筒埴輪80～90個体、朝顔形円筒埴輪10個体前後、形象埴輪26個体（人物8、馬2・盾2・家1・靫2・鞆4・大刀4・鬚3）、土師器杯形土器8個体、須恵器提瓶1個体、石室からは、直刀3点、ガラス製小玉14点、刀子1点、鉄鏃10数点、弓金具9点、須恵器提瓶1個体が出土した。土器をはじめとする遺物は、6世紀後半の特徴を有するものである。また、埴輪にはわずかではあるが海綿骨針と結晶片岩砂粒が混入するものが存在することから、群馬南部・埼玉北部の埴輪生産地から供給された埴輪の存在を指摘しておくに留め、全ての埴輪破片の観察を済ませてから論を展開させたい。

k．円筒埴輪に見られる線刻　普通円筒埴輪の大半に線刻が認められ、その意匠からFig.29に示すようにA～D・a～bの6種に分類することができた。A～Dは外面に施され、a・bは内面のそれで、aには2本線のものと3本線のものとで2通りのバリエーションが存在する。さらに線刻の施される位置とその意匠の間に一定の規則を見いだせたので、Fig.29に簡単な模式図を示しておいた（註4）。

同一意匠の線刻をもつ埴輪には、その形態との間にも相関性を認めることができたので、A類を例にとって少し触れておく。A類の線刻をもつ円筒埴輪は完形に復原できた30個体中で9個体が確認でき、30%近い割合となる。大きさの概略については、底径はほぼ12cmに統一され、器高は32～34cm、最下段高は16～19cm、突帯間の長さは9～10cmである。これによると底径・器高・突帯の貼付間隔の計測値は互いに近似し、最下段高においては比較的変動する傾向が窺える。なお具体的に触れてはいないが、プロポーションや内外面の調整も近似し、使用されるハケ原体も基本的には同一木目のものを用いていると判断することができた。各個体において底径や突帯間の長さが近似する様などは、その割り付けに同一のスケールを用いていたことが推定され、同一原体を用いた類似した調整、近似するプロポーション等から、A類の線刻を持つ埴輪群は非常に似通ったものであると言える。ここではA類の線刻をもつ円筒埴輪は同一工人とまで言えないものの、ある基準に基づいて同一の工人集団によって製作されたものであると判断しておきたい（註5）。線刻と埴輪の生産・供給の問題に関しては、正式報告時に詳細な検討を行ったうえで結論を出して行きたいと思う。

上記の遺物や遺構をはじめとして、墳丘下面の地山にはHr-FAが検出された。唯一、年代決定

の根拠となった石室前面部出土の土師器の年代観によれば、小二子古墳は6世紀第4四半期の前半のに築造された古墳といえる。また、隣接する3基の変遷は、後二子古墳⇨内堀M－1号墳⇨小二子古墳といった変遷が考えられる。

註1）資料観察にあたっては行田市立博物館学芸員塚田良道氏の御協力をえることができた。

2）笹川村地蔵塚古墳、月田二子塚古墳、鏡手塚古墳の墳丘実測図は、粕川村教育委員会係長小島純一氏の提供による。

3）荒砥村245号墳については、調査を担当した飯塚　誠より教示をえた。

4）Fig.29の円筒埴輪区分凡例図は、北関東における線刻をもつ埴輪に普遍的に使用できるように作成した。

5）工人および工人集団という用語は不適切であるかもしれないが、便宜上用いた。

参考文献

1．尾崎喜左雄　1951「群馬県勢多郡月田古墳」　『日本考古学年報1』日本考古学協会。

2．尾崎喜左雄　1953「横穴式古墳袖無型石室の研究」『群馬大学紀要人文科学篇第3巻第十一号』

3．山崎一雄他　1959『大谷古墳』京都大学文学部考古学教室。

4．松村一昭　1977『赤堀村鑑岸山の古墳2』『綜覧赤堀村276号墳』群馬県赤堀町教育委員会。

5．坂本和俊　1979「袖無型横穴式石室の検討」『原始古代社会研究5』校倉書房。

6．石塚久則他　1980『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会。

7．橋本博文他　1981『常陸梶山古墳』大洋村教育委員会。

8．小島純一　1985『西原古墳群K5』粕川村教育委員会。

9．小島純一　1985『粕川村の遺跡』「地蔵塚古墳出土の土師器」群馬県粕川村教育委員会。

10．女屋和志雄・外山政子　1986『下佐野遺跡Ⅱ地区』「7区3号古墳」㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団。

11．右島和夫　1989「東国における埴輪樹立古墳の展開とその消滅」『古文化談叢21集下』。

12．園部守央・加部二生　1989『内堀遺跡群Ⅱ』前橋市埋蔵文化財調査団。

13．中島洋一　1989『酒巻15号墳・稲荷通遺跡』行田市教育委員会。

14．松村一昭　1990『下触片田古墳群発掘調査報告書』『赤堀59号墳』群馬県赤堀町教育委員会。

15．右島和夫　1992『神保下條遺跡』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団他。

16．橋本博文　1992『古墳時代の研究9』「4－1．配列・組合わせの変遷」雄山閣出版。

17．前原　豊・伊藤　良　1992『後二子古墳・小二子古墳』前橋市教育委員会。

18．前原　豊・伊藤　良・戸所慎策　1993『前二子古墳』前橋市教育委員会。

19．藤巻幸男　1993『五目牛清水田遺跡（古代・中近世編）』「1号古墳」㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか。

20．山崎　武　1994『鴻巣市遺跡群Ⅲ』『生出塚遺跡（D・E地点）　本文・写真図版編　』鴻巣市遺跡調査会他。

21．松尾昌彦　1995『古墳時代の飾り馬』松戸市立博物館。

22．前原　豊・戸所慎策　1995『中二子古墳』前橋市教育委員会。

23．三輪嘉六・宮本長二郎他　1995『日本の美術5　No.348 家形埴輪』至文堂。

Tab.7　円筒埴輪観察表

番号	器形	大きさ器厚 口径 器高 底径	大きさ器厚 口線 胴部 基部	透孔 2	突帯	2条①突帯分離 1条②突帯厚 ③基部～	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	ハケ目本/2cm	成形調整	①基部 ②外面 ③内面	備考
1001	普通円筒	(23.0)	1.0	○ 5.5	①E	②0.4 ③21.0	①中粒・B	9	①左回り。		無刻（b－i）
		(39.4)	1.1		①E	②0.5 ③21.5	②良好		②縦ハケ→突帯貼付、口縁部横ナデ。		
		(12.3)	2.6				③にぶい黄色		③斜ハケ→斜方向のナデ。		
							④ほぼ完形				

番号	器形	大きさ 口径 器高 底径	器厚 口縁 胴部 基部	透孔 2	突帯 2条 ①突帯分類 1条 ②突帯厚 ③基部・長	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	ハケ目 本/2cm	成形調整 ①基部 ②外面 ③内面	備考
1156	普通円筒	(20.4) (36.8) (11.6)	0.9 1.1 2.1	○ 5.0	①D ②0.5 ③29.5 ①E ②0.5 ③21.5	①中粒・B ②良好 ③にぶい橙色 ④ほぼ完形	8	①観察不可。 ②縦ハケ→突帯貼付、口唇部横ナデ。 ③斜ハケ→斜方向のナデ。	線刻（b－i）
1049	普通円筒	(24.6) (32.8) (12.4)	0.8 1.2 2.4	○ 5.5	①E ②0.4 ③27.5 ①E ②0.3 ③17.5	①中粒・B ②良好 ③にぶい黄橙色 ④口縁部一部欠損	8	①観察不可。 ②縦ハケ→突帯貼付、口唇部横ナデ。 ③斜ハケ→縦方向のナデ。	線刻（A－Ⅲ）
1029	普通円筒	(22.0) (35.5) (13.0)	1.0 1.1 1.9	○ 5.1	①E ②0.7 ③30.0 ①E ②0.6 ③17.0	①中粒・B ②良好 ③にぶい赤褐色 ④ほぼ完形	11	①左回り。 ②縦ハケ→突帯貼付、口唇部横ナデ。 ③縦ハケ及び縦ナデ→斜方向のハケ。	線刻（a－i）
1242	普通円筒	(19.5) (33.8) (12.2)	1.0 1.2 2.0	○ 4.5	①E ②0.5 ③28.0 ①E ②0.5 ③16.0	①中粒・B ②良好 ③にぶい赤褐色 ④口縁部一部欠損	18	①観察不可。 ②縦ハケ→突帯貼付、口唇部横ナデ。 ③斜ハケ→斜方向のナデ。	線刻（B－Ⅱ）
1008	普通円筒	(19.4) (36.5) [12.5]	1.0 1.3 2.0	○ 5.0	①D ②0.8 ③29.5 ①D ②0.7 ③15.0	①中粒・B ②良好 ③にぶい赤褐色 ④底部一部欠損	13	①左回り。 ②縦ハケ→突帯貼付、口唇部横ナデ。 ③縦ハケ及び縦ナデ→斜ハケ。	線刻（a－i）
1009	普通円筒	[22.5] (34.3) (13.0)	0.8 1.2 2.7	○[5.5]	①D ②0.5 ③29.5 ①D ②0.4 ③18.0	①中粒・B ②良好 ③にぶい黄橙色 ④上半部一部欠損	13	①左回り。 ②縦ハケ→突帯貼付、口唇部横ナデ。 ③縦ナデ→斜ハケ。	線刻（A－Ⅲ）
1006	普通円筒	(20.0) (32.0) (12.0)	1.0 1.3 2.2	○ 5.3	①E ②0.5 ③24.5 ①E ②0.5 ③17.0	①中粒・A ②良好 ③にぶい赤褐色 ④口縁一部欠損	12	①観察不可。 ②縦ハケ→突帯貼付、口唇部横ナデ。 ③縦ナデ→斜め方向のハケ。	線刻（a－i）
1007	普通円筒	(25.5) (32.6) (12.6)	1.0 1.2 2.5	○ 4.5	①A ②0.3 ③26.5 ①E ②0.5 ③19.0	①中粒・B ②良好 ③にぶい赤褐色 ④口縁一部欠損	11	①左回り。 ②縦ハケ→突帯貼付、口唇部横ナデ。 ③縦ナデ→ヘラケズリ。	線刻（a－i）
1017	岡頭円筒	(32.5) (54.3) (12.5)	0.8 1.2 1.4 1.4 2.1	○ 4.3	①E ②0.6 ③42.5 ①D ②0.7 ③34.5 ①E ②0.6 ③26.5 ①E ②0.6 ③16.0	①中粒・B ②良好 ③にぶい赤褐色 ④底・肩部一部欠損	11	①観察不可。 ②縦ハケ→突帯貼付、口唇部横ナデ。 ③縦ナデ→口縁部にかぎり斜ハケ。	5条突帯部分 焼口縁部

註）1．口縁部…口唇部～突帯、基底部…基部～突帯、胴部…口縁部と基底部との間。器厚はそれぞれの部分の真ん中で計測した。

2．透孔の欄にある○と□は透孔の形を表す。その次に表している数値は、透孔の最大径または最大幅である。突帯が2つの円筒埴輪の場合には中段に表示した。角度は、2つ以上の透孔がある場合に表示し、下の段を基準（0°）に上の段がどの程度振れてあけられているかを示した。

3．突帯は、下から1条・2条…とした。突帯はその断面の形によって下の図のようにA～Eの5種類に分類した。

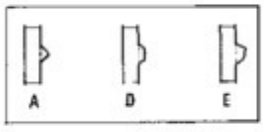
A…断面がくの字のようになっているもの。

B…断面が□または凸状のもの。

C…Bのなかで特に突帯の出っ張りの大きいもの（1cm前後）。

D…断面が台形状のもの。

E…正五角形を線対称軸で2等分したような断面をもつもの。



4．突帯の厚さは、突帯の一番出っ張っている部分とその上の側面との距離で表した。基部から各突帯までの長さは、突帯の中央から基部までの距離で表した。

5．胎土は粒粒（0.9cm以下）・中粒（1.0～1.9cm）・粗粒（2.0cm以上）、海綿骨針・砂粒片岩にA…入る・B…入らない、焼成は良好・普通・不良の3段階評価をした。また、色調は埴輪外面を観察し、色名は新版標準土色帖（小山・竹原1976）によるものである。

6．基部の成形の右回りは時計回り、左回りは逆時計回りである。

7．長さの単位はcmである。現存値を（　）、復原値を［　］で示した。

Tab.8　形象埴輪観察表

番号	出土位置	推定される原位置	種類・器形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存状態 ⑤特徴（観察された成形方法） ⑥法量（完形品に限る）	ハケ（本/2cm）	備考
026	3区N	鞍部	形象埴輪馬A（後輪～尻繁）	①中粒・B②良好③橙④胴部1/3⑤尻繁は粘土帯の貼付により表現。雲珠は球状粘土を尻繁貼付後に圧着。雲珠の両側と後方に剥離痕有り。	10本	
021	3区SN	鞍部	形象埴輪馬B（後輪～尻繁）	①中粒・B②良好③にぶい橙④胴部1/3⑤尻繁は粘土帯貼付により表現。雲珠は球状粘土を尻繁貼付後圧着。その後根元に粘土紐を巻き付けボタン状粘土を6個貼付する。雲珠の最低両側に錦を圧着し雲珠との間に粘土紐貼付してつなぐ。	9本	
001	3区NS	鞍部	形象埴輪人物A（頭・単別個体）	①中粒・A②良好③明赤褐色④鼻部・頭部欠損⑤腰部帯は幅広粘土帯を貼付し、鋸歯文を線刻する。頭部にはボタン状粘土を貼付し首飾りを表現。美豆良は肉厚でバチ形の棒状粘土に粘土紐を2本巻き付ける。腕部は中実で差し込みによるもので、粘土紐により籠手の表現をしている。上衣裾部に靴・大刀を装着する。基台部は楕円形を呈する。	11本	全身像
002	3区N	鞍部か	形象埴輪盾A	①中粒・B②良好③明赤褐④基台部下半欠損⑤基台部上半側面に径4.5cmの透孔を一対穿つ。盾部には鋸歯文を主体とする線刻を有する。盾部は円筒側面にヒン状粘土板を貼付し、上端を押し潰しているが、背面上端は開放されている。盾部はほぼ左右対称で、上半部に小突起をもつ。基台部と盾部は突帯によって画されている。	10本	
032	3区S	鞍部か	形象埴輪盾B	①粗粒・B②良好（黒色付着物）③明赤褐色④盾部上半欠損⑤基台部上半側面に一対の透孔（径5.0cm）を穿つ。盾部には鋸歯文を主体とする線刻を有し盾B共通する文様であるが、線の使い方は異なる。基台部と盾部は突帯によって画される。	12本	
040	ZT 2区	墳頂部	形象埴輪翳A	①中粒・B②良好③明赤褐色④基台部過半欠損⑤基台部上端を押し潰し、翳部へ移行させる。翳部中央には径4.5cmの円孔を穿ち、縁部は鋸歯状に切り取ることによって推定12個の突起を造り出す。翳部正面には径13cm程度のリング状の粘土紐を貼付し、6個のボタン状粘土をほぼ等間隔で圧着している。基台部と翳部は、接近する2本の突帯によって画されている。	13本	
067	ZT	墳頂部か	形象埴輪翳B	①細粒・B②良好③橙④基台部過半・翳部2/3欠損⑤基台部上端を押し潰し、上部と両端に粘土板を貼付することによって翳部需形とし、縁部は鋸歯状に切り取ることによって翳部を造り出す。翳部中央には推定5.0cmの円孔を穿ち、正面にはリング状の粘土紐を貼付したのちボタン状粘土を等間隔に圧着させる。翳部正面には線刻を有し、リング状粘土紐内側は放射状、外側には縁部に沿うように鋸歯文を描く。	12本 8本	基台部と翳部でハケ原体異なる。
063	ZT	墳頂部か	形象埴輪靭A	①中粒・B②良好③橙④基台部下半欠損⑤基台部より上部を外反させ靭部へ移行させる。靭部は中央で前後を接着して2方向に分けて積み上げ、上端は絞り込んで閉塞しており、「6」の字状を呈する。靭部には上方から穿たれた小孔があり、靭部上半には粘土帯を貼付することによって布が重ねられたような表現がなされる。基台部にはほぼ30cmの間隔で2条の突帯が貼付され、上部の突帯は靭部と基台部を画している。	10本	
141	1区	墳頂部か	形象埴輪靭B	①中粒・B②良好③明赤褐色④基台部下半欠損⑤基台部から上部の両側面を外反させ靭部へ移行させる。靭部は中央で前後を接着して2方向に分け積み上げ、上端は絞り込んで閉塞しており、「6」の字状を呈する。靭部には上方から穿たれた小孔があり、靭部上半には粘土帯を貼付して布が重ねられたような表現がなされ、粘土紐を貼付した縁の表現へと移行している。基台部には30cmの間隔で、接近した2条づつの突帯が2本貼付されており、上部の突帯は靭部と基台部を画している。	12本	
034	1区 3区	墳頂部か	形象埴輪鞍A	①中粒・B②良好③橙④鐙身表現部を中心に残存⑤円筒部の上下に一対の鋸を二対圧着しており、上端は開放されている。上部の鐙身表現部は粘土板を上端前面に接着し、二本の突帯によって補強されている。鐙身表現部の鐙は粘土紐貼付によるもので、片側のみにキザミを入れて片逆刺鐙を表現している。鐙身表現部の付け根はボタン状粘土によって装飾される。	9本	
057	1区	墳頂部か	形象埴輪鞍B	①中粒・B②良好③橙④破片⑤円筒部に粘土板を圧着することによって鰭を造り出す。鰭には斜平行線による線刻、円筒部上端には草冠状の線刻が描かれる。円筒部正面には粘土弓貼付によって帯を表現している。	12本	
047	1区	墳頂部か	形象埴輪大刀A	①中粒・B②良好③橙④基台部欠損⑤上端は粘土板で蓋をして閉塞し、後に上方から小孔を穿つ。曲金部は裏面に隆帯によって補強され、三輪玉を6個圧着する。	10本	
046	ZT 3区	墳頂部か	形象埴輪人刀B	①中粒・B②良好③橙④人刀部上半のみ残存⑤大刀Bに準ずる。三輪玉2個残存。	10本	接合個体未掲載。

Tab.9　土器観察表

番号	出土位置	推定される原位置	器形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存状態 ⑤特徴（観察された成型方法） ⑥法量（完形品に限る）	備考
2002	ZT	石室前面	土師器　杯	①中粒②良好③にぶい赤褐色④7/10⑤口縁部外傾。外面口縁部工具による横位のナデ。底部ランダムなヘラケズリ。内面回転台使用のヨコナデ。口唇部・口縁底部境の稜線共に鈍く、口縁部上端内面は浅く沈線状に窪む。⑥口径13.5cm、器高4.7cm。	鬼高Ⅱ
2010	ZT	石室前面	土師器　杯	①中粒②やや不良③橙④1/2⑤口縁部外傾。内外面調整は風化著しく観察不可。口唇部・口縁底部境の稜線共に鈍い。⑥口径12.0cm、器高4.6cm。	鬼高Ⅱ
2003	ZT	石室前面	土師器　杯	①中粒②良好③橙④ほぼ完形⑤口縁部外傾。外面口縁部ヨコナデ。底部は平行するヘラケズリ後、周縁をラフに一周横位のヘラケズリ。内面ヨコナデ。口唇部鈍い。⑥口径12.0cm、器高4.0cm。	鬼高Ⅱ
2007	ZT 1区	石室前面	土師器　杯	①中粒②良好③にぶい橙④2/3⑤口縁部外傾。外面口縁部工具による横位のナデ。底部は平行するヘラケズリ。内面底部はランダムなナデ、口縁部ヨコナデ。口唇部・口縁底部境の稜線共に鈍い。⑥口径12.0cm、器高4.5cm。	鬼高Ⅱ
2004	ZT	石室前面	土師器　杯	①中粒②良好③橙④底部一部欠損⑤口縁部外傾。外面口縁部工具による横位のナデ。底部ランダムなヘラケズリ。内面ヨコナデ。口唇部・口縁底部境の稜線共に鈍い。⑥口径11.7cm、器高4.1cm。	鬼高Ⅱ
2006	ZT	石室前面	土師器　杯	①中粒②良好③橙④底部大半欠損⑤口縁部外傾。外面口縁部ヨコナデ。底部ランダムなヘラケズリ。内面ヨコナデ。口唇部・口縁底部境の稜線共に鈍い。⑥口径11.6cm、器高推定4.0cm。	鬼高Ⅱ
2008	ZT	石室前面	土師器　杯	①細粒②良好③にぶい黄橙色④破片⑤口縁部外傾し、段を有する。外面口縁部工具による横位のナデ。底部はランダムなヘラケズリ。内面回転台使用のヨコナデ。口唇部鈍いが、口縁底部境の稜線は明瞭。⑥口径推定13.5cm、器高4.4cm。	鬼高Ⅱ
2005	ZT	石室前面	土師器　杯	①中粒②良好③暗赤灰色④4/5⑤口縁部外傾。外面口縁部工具による横位のナデ。底部平行するヘラケズリ後、周縁横位のラフなヘラケズリ。内面回転台使用のヨコナデ。口唇部鈍いが、口縁底部境の稜線は明瞭。⑥口径13.5cm、器高4.2cm。	鬼高Ⅱ
2011	3区S ZT	石室内	須恵器　提瓶	①中粒②良好③暗黄灰色④1/2⑤胴部縦断面は一辺が潰れ気味の楕円形を呈する。外面は回転ヘラケズリか。内面は回転ナデ。開塞部円形粘土板による。口縁部上端には粘土帯によって段が作出され、口唇部は上方へ突出する。胴部にリング状の把手をもつ。⑥口径7.5cm、胴部最大径推定14.5cm、器高推定17.0cm。	TK 43 併行青黒色の自然釉被る
2001	ZT	石室前面	須恵器　提瓶	①中粒②不良③暗灰色・赤橙色（風化の結果）④頸部以上欠損⑤胴部縦断面は一辺の平面的な楕円形。外面は全面にわたって同心円状のカキ目。内面は回転ナデ。開塞部は不整形な粘土板によるもので、内面からナデによって調整される。把手は鉤状である可能性が高い。⑥胴部最大径20.0cm、頸部径7.5cm。	灰毛塞か
2012	ZT	U－1（湿度土器）	壺	①中粒②良好③赤褐色④胴部下半⑤外面胴部下半縦位のヘラ磨き、胴部中位斜位のヘラミガキ、肩部横文L R。内面斜位の丁寧なナデ。⑥底径推定9.7cm、胴部最大径28.0cm。	赤井戸系蓋に転用
2013	ZT	U－1（湿度土器）	壺	①細粒②良好③黄橙色④頸部以上欠損⑤外面頸部鋸状文→波状文→縦位の櫛描き。後ボタン状粘土を4対正着しヘラ刻みを入れる。胴部横位のヘラミガキ。内面ヘラミガキ。⑥頸部径14.0cm、胴部最大径39.0cm、底径13.0cm。	樽式系本体に転用
3261	3区S	墳丘覆土	高杯 ミニチュア	①中粒②良好③赤褐色④完形⑤外面脚部・杯部共に縦位のヘラケズリ。口唇部ナデ。内面脚部横位のヘラケズリ。杯部ヨコナデ。⑥脚部径4.5cm、くびれ部径2.1cm、口径5.4cm、器高5.8cm。	石田川照
2085	3区S	墳丘覆土	高杯 ミニチュア	①細粒②良好③赤褐色④杯部大半欠損⑤外面脚部から杯部へ連続する縦位のヘラケズリ。口唇端部ヨコナデ。内面脚部斜位のナデ、杯部タテナデ。⑥脚部径4.5cm、くびれ部径2.3cm、口径推定5.0cm、器高4.2cm。	石田川照

Tab.8と9　注）

① 胎土は細粒（0.9cm以下）、中粒（1.0cm～1.9cm）、粗粒（2.0cm以上）とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名を記載。
また植物については、海綿骨針化石と結晶片岩を含有する……A。
海綿骨針化石と結晶片岩が含有しない…B。

② 焼成は極良、良好、不良の3段階評価。

③ 色調は土器外面を観察し、色名は新版標準土色帖（小山　竹原1976）によった。

Tab.10 小二子古墳調査要項

※⑦…平成7年度・⑧…平成8年度

遺跡名称	国指定史跡「後二子古墳並びに附小古墳」のうちの「附小古墳」 小二子古墳（この名称は、前橋市教育委員会の主催する大室公園史跡整備委員会で決定）
遺跡記号	⑦7E11・M-11　⑧8E11・M-11
遺跡所在地	群馬県前橋市西大室町2142番地
調査期間	⑦発掘調査　1995年7月21日～10月31日　⑦整理作業　1995年11月20日～1996年1月31日 ⑧発掘調査　1996年6月3日～12月9日　⑧整理作業　1996年12月16日～1997年1月15日
調査面積	⑦282㎡　⑧365㎡　⑦・⑧　647㎡　国指定史跡面積　12,283㎡（含む後二子古墳）
調査原因	大室公園史跡整備事業
調査主体者	前橋市教育委員会　教育長　岡本　信正
調査担当者	前原　豊　⑦新井　真典　⑧宮内　毅
発掘作業	石井春江　伊藤孝子　岡田智恵　岡野綾代　川島勝治　神沢方子　木村源次郎　木村はる子　久保もと子 佐藤仕子　関口みよ子　阿部千花　高橋やすの　永井智教　竹内るり子　田中善四郎　田中　裕　角田正次郎 冨岡和子　内藤貴美子　内藤　孝　萩原和子　福田貫之　牧野せつよ　峰岸あや子　吉田真理子　小保方豊五郎
整理作業	伊藤孝子　椎杉みち子　佐藤仕子　高沼八栄子　竹内るり子　角田正次郎　内藤貴美子　永井智教　峰岸あや子 吉田真理子　赤城美代子　桑田エミ子　岩田敏子　白形かはる　大澤まさ江　大塚美智子　鬼塚成子　佐野貴恵子 柴崎まさ子　神保千代子　戸丸澄江　治津明美　松田富美子
調査協力	文化庁記念物課　群馬県教育委員会文化財保護課　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団 赤堀町教育委員会　粕川村教育委員会　東大室自治会　西大室自治会 相川之英　相川真由美　上野克巳　大江正行　大澤伸啓　大西雅也　加部二生　福田貫之　川島雅人 木津博明　小島純一　後藤素加　諸墨　孝　島田雄二　設楽博己　坂口　一　杉山秀宏　早田　勉 田中　裕　塚田良道　中村絵美　土生田純之　橋本博文　市　隆之　右島和夫　細野高伯　前原照子 松村永子　松村和男　松崎元樹　宮田　毅　若狭　徹　南雲芳昭　綿貫綾子
測量・分析 等委託先	井上測量株式会社　丹生サーヴェイ　技研測量設計株式会社　株式会社古環境研究所 たつみ写真スタジオ　シン技術コンサル　システム標準　多摩アセット　松本印刷

大室公園史跡整備委員会

指　導	本中　眞（文化庁）	顧　問	岡本　信正（前橋市教育委員会教育長）
委員長	近藤　義郎	副委員長	白石太一郎（国立歴史民俗博物館）
委　員	梅沢重昭　尾山照彦　⑦荒畑大治　⑧上田　明　松島栄治　福田紀雄　阿久津宗二　渡辺勝利　福田修由 ⑦大谷増治　中内誠一　藤井正彦　⑧飯塚朝		
古墳整備部会	部会長：松島栄治（前橋市文化財調査委員）　幹事：井上唯雄　松本浩一 津金沢吉茂　右島和夫　細野茂夫　駒倉秀		
民家移築部会	部会長：福田紀雄（前橋市立新田小学校長）　幹事：⑧久保喜一　⑧松村富士雄 池田　修　三浦茂三郎　渡辺正義　船津徳人　宮下　寛		
資料館部会	部会長：阿久津宗二（前橋市文化財調査委員）　幹事：丸山知良　外山和夫 能登　健　相澤貞順　石井秀司　⑦木山　卓　⑧川合　功		

大室公園史跡整備委員会事務局

文化財保護課	課長：⑦木山　卓　⑧川合　功　係長：宮下　寛　係長：駒倉秀一　園部守央　井野修二　江原　清 唐澤保之　前原　豊　真塩欣一　⑧飯塚　誠　⑦新井真典　林　清也　⑧宮内　毅
公園緑地課	課長：細野茂夫　課長補佐：船津徳人　篠崎展夫　遠藤雅好　小池俊彦　茂木政定

1．大室公園と大室古墳群・林は奥から流れ山、小・後二子、中二子（南上空から）

2．小二子古墳の全景（西上空から）

PL. 2

1．墳丘全景・手前が前方部、奥が後円部（西から）

2．墳丘全景・前方部に比べ後円部は高い（西から）

3．石室調査状況・割られた石が床まで存在（南から）

4．石室調査状況・破壊された石室の断片（北西から）

5．石室の割られた石と出土した大刀破片（東から）

1．石室入り口・石積み後に粘土を厚く塗布（南から）

2．石室入り口・粘土と列石をはずした状態（南から）

PL. 4

1．後円部上段墳丘と石室の全景（南上空から）

2．奥壁から見た入り口と玉石の状態（北から）

1．石室側壁を据えた痕跡にマットを敷く（北から）

2．石室東壁の裏込め残存状態（西から）

PL. 6

1．奥壁を掘えた痕跡と裏込めの状態（南から）

2．石室床面の玉石残存状態（東から）

3．石室西壁の裏込め残存状態（北東から）

4．雨の中で続く石室作業の様子（北から）

5．石室入り口の土層と列石の状態（西から）

1．石室前の遺物出土状態（南東から）

2．南側くびれ部の周堀の状態（東から）

3．3区S（南側）遺物出土状態（南から）

4．3区S（南側）遺物出土状態（南西から）

5．下段墳丘の平坦面に設置された埴輪列（東から）

6．3区S（南側）1156の円筒埴輪近景（南西から）

7．後円部の東、下段平坦面の埴輪列（北東から）

8．1区S（南側）1305の円筒埴輪近景（北から）

PL. 8

1．後円部の北東、下段平坦面の埴輪列（北東から）

2．1区N（北側）1289の円筒埴輪近景（西から）

3．1区N（北側）の円筒埴輪の再現（南東から）

4．根が入り込んだ墳頂部の円筒埴輪（南西から）

5．3区S（南側）1156の円筒埴輪の近景（南西から）

1．前方部周堀から出土した朝顔型円筒埴輪（東から）

2．後円部東側の上段斜面から出土した鞆（東から）

3．1区S（南側）の大刀出土状態（南から）

4．埋め戻しも無事に終わり記念撮影（南西から）

5．これ以降の写真は平成7年度の範囲確認調査の記録写真／石室前面部と石室トレンチの様子（南から）

PL. 10

1．石室（S－1・2トレンチ）の調査（南から）

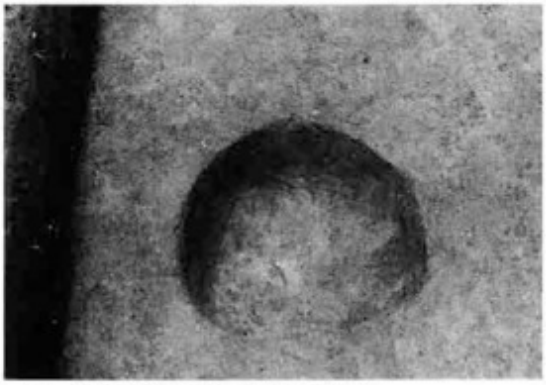
2．石室入り口の土師器杯の出土状態（北から）

3．石室前面部全景（南から）

4．石室前面部に見られる破砕礫の堆積（南西から）

5．石室前面部の埋設土器【U－1】の出土状態（東から）

6．埋設土器の掘り方の断ち割り（北東から）



7．埋設土器の掘り方（南から）

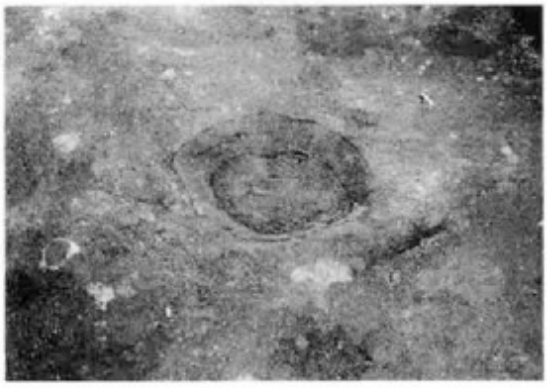
8．1Aトレンチ全景（西から）

1．1Aトレンチ（鞍部）の形象と円筒埴輪（西から）

2．1Bトレンチ全景（東から）

3．1Bトレンチの円筒埴輪（東から）

4．1Bトレンチの円筒埴輪近景（東から）



5．1Bトレンチの円筒埴輪設置坑（東から）

6．3Bトレンチ全景（南から）

7．3Bトレンチの円筒埴輪（南から）

8．3Bトレンチの円筒埴輪近景（北から）

1．4Aトレンチ全景（北西から）

2．4Bトレンチ全景（南西から）

3．4Bトレンチの埴輪出土状態（南から）

4．4Bトレンチの埴輪出土状態（北東から）

5．5トレンチ全景（南西から）

6．6トレンチ全景（北西から）

7．7トレンチ・前方部南コーナーの全景（南東から）

8．8トレンチ・前方部北コーナーの全景（南西から）

1006

1029

1049

1065

1242

1009

1007

1017

1008

1156

1001

1．透孔をふさぐ円盤

2．朔のヒレを接合するホゾ穴

円筒埴輪と製作技法のみられる埴輪

PL. 14

067
盤B

048
大刀B

047
大刀A

141
柄B

063
柄A

034
鞘A

001
人物A

002
盾A

032
盾B

形　象　埴　輪

040
鬚A

040
鬚A

D C B
大刀

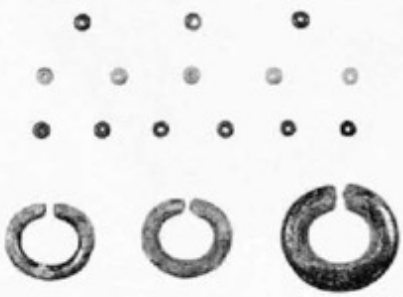
026
B

021
A

馬

鉄器

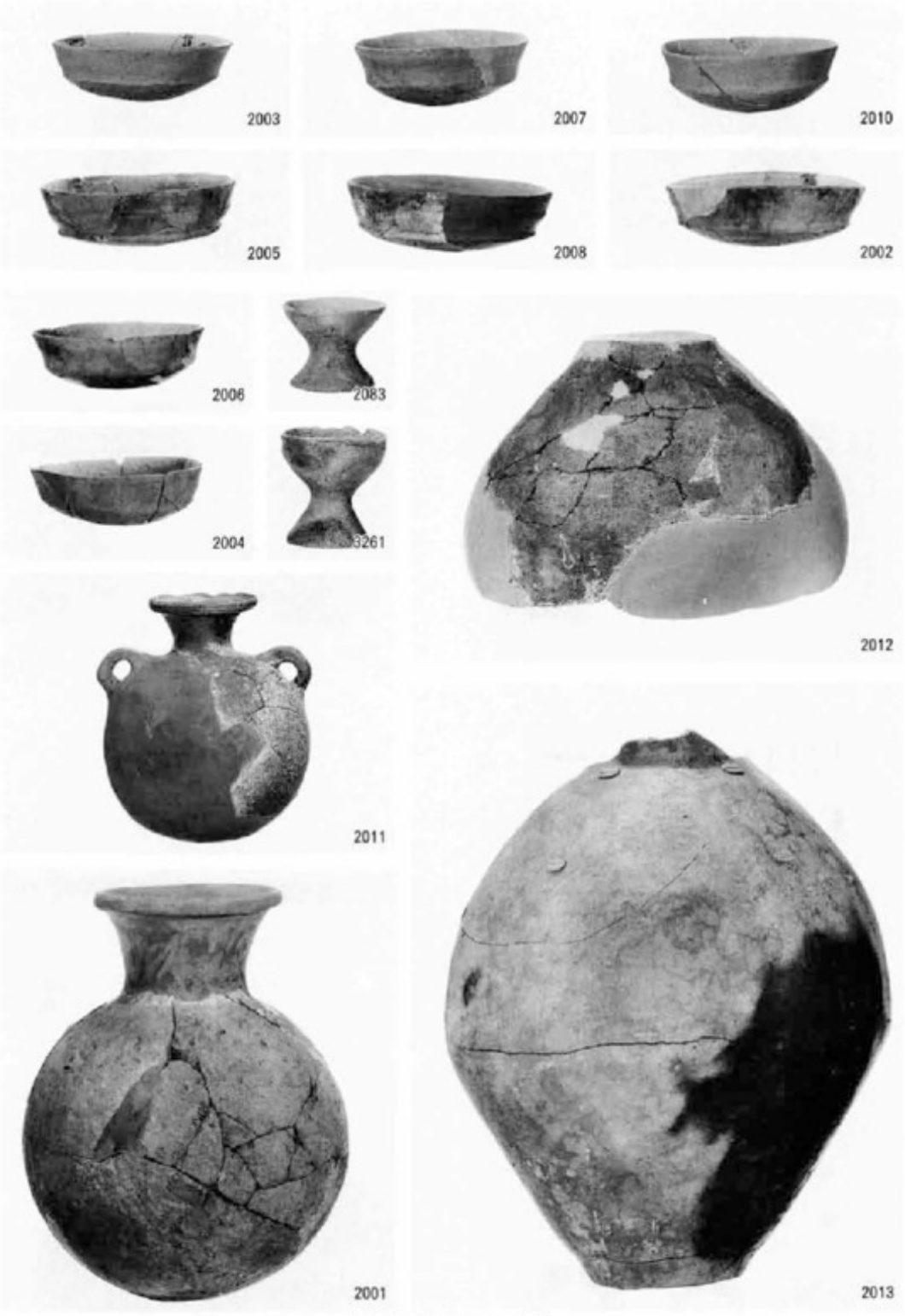
No.3044
直刀



装飾具

近代のノミ痕

PL. 16



墳丘、石室出土の土器

発掘調査報告書抄録

ふりがな	しょうふたごこふん
書名	小二子古墳
シリーズ名	大室公園史跡整備事業に伴う範囲確認調査概報
シリーズ番号	Ⅳ
編著者名	前橋市教育委員会文化財保護課 埋蔵文化財係 主任 前原 豊 埋蔵文化財係 主事 宮内 毅
編著機関	群馬県前橋市教育委員会管理部文化財保護課
編著機関在地	〒371 群馬県前橋市上泉町664番地－4
発行年月日	1997（平成9）年2月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	位置	調査期間	調査面積	調査原因
くにしていしせき 国指定史跡 しょうふたごこふん 小二子古墳	ぐんまけんまえばしし 群馬県前橋市 にしおおむろまち 西大室町 2142	10201	7E11 8E11	北緯 36°23′11″.5147 東経 139°11′47″.8944	19950721 ～ 19951031 19960603 ～ 19961209	647m²	大室公園 史跡整備事業

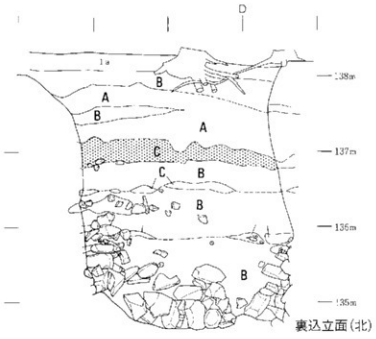
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
国指定史跡 小二子古墳	墳墓	古墳時代	古墳	円筒埴輪 形象埴輪（家・人物・大刀・靫・蓋・盾・馬） 副葬品（ガラス製小玉・鉄鏃・刀金具・耳環・大刀・刀子）、土師器・須恵器
特記事項	豊富な形象埴輪群を持つ前方後円墳。 石室は盗掘を受けるが、良好な閉塞状態を検出した。			

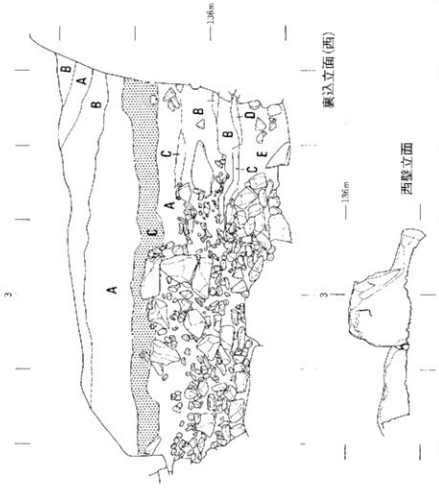
大室公園史跡整備事業に伴う範囲確認調査概報Ⅳ

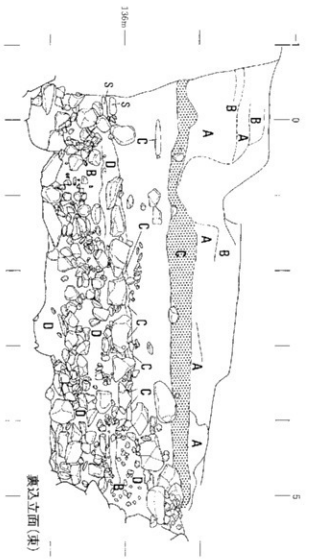
小二子古墳

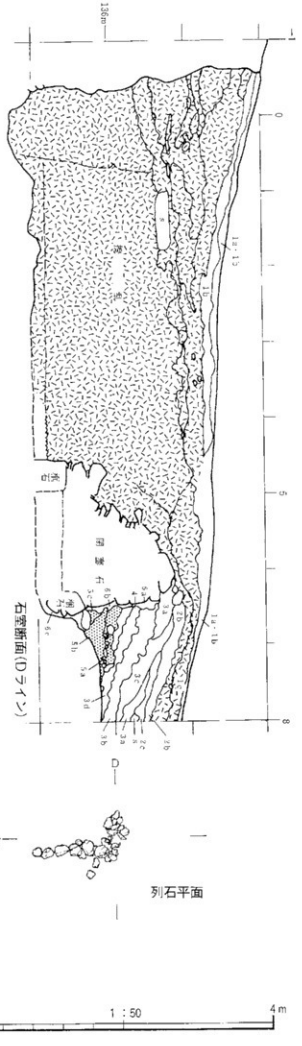
1997（平成9）年2月20日印刷
1997（平成9）年2月28日発行

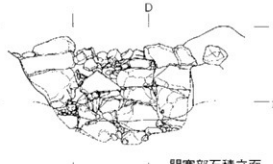
編集発行　前橋市教育委員会管理部
文化財保護課
〒371 群馬県前橋市上泉町664－4
TEL 027 231-9531 FAX 027-231-9862

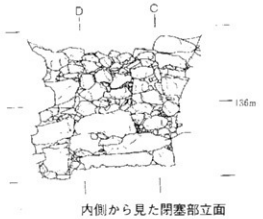


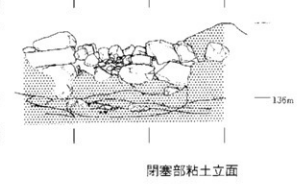


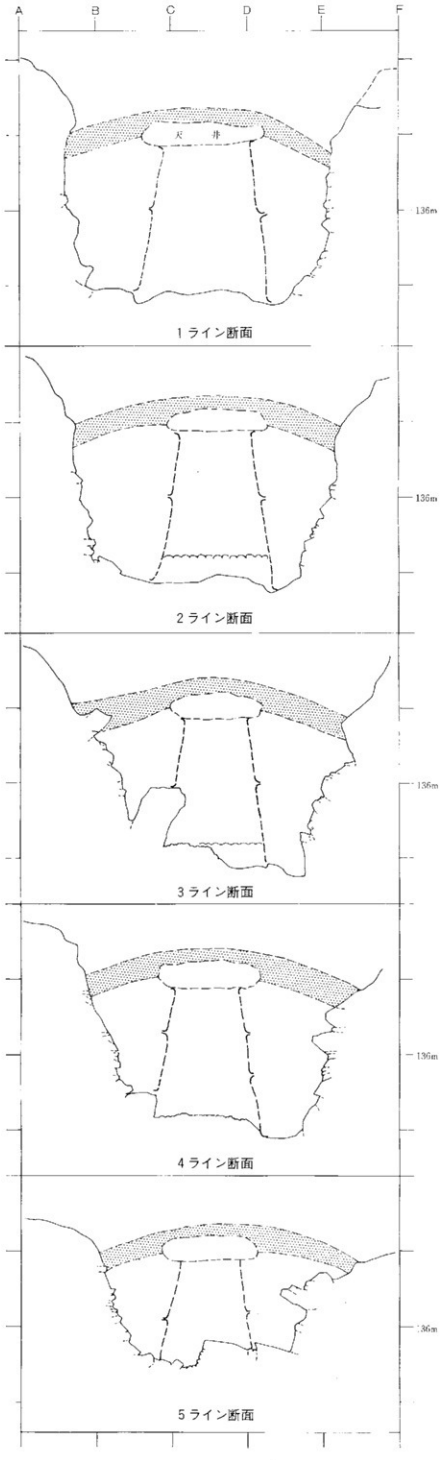












A・・・ローム土
B・・・黒色土
C・・・粘土
D・・・山砂
E・・・旧表土
S・・・礫

層序説明
1a層　近代～現代の層
1b層　暗褐色礫砂の表土層
1c層　カクラン層
2層　As-B層
3層　黒色土層
4層　黒褐色土層
5a層　純粘土層
5b層　5～10cm大の礫を混入する粘土層
5c層　5a層と5b層の混合層
6層　黒褐色土層

0　1:50　4m

付図　小二子古墳石室実測図